
伝説の武器(笑)、創りますか？

ディアズ・R

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説の武器（笑）、創りますか？

【Zマーク】

Z5380V

【作者名】

ディアズ・R

【あらすじ】

とにかく不幸な青年が、死んで異世界に転生…いろいろあってやる気無し！目立たないようにしていたら会話が苦手に…それでも、姉の為にチートな武器を造る！

今日も今日とて、普通に過ごすかな。
いろんな意味で、飛びますよ？

登場人物一覧（前書き）

読んでから見た方がいいと思いますね……微妙にネタバレですし。

読ませてしまえば、どうにかなるとか……思つてませんよ？

まあ、設定から読んでどんな小説かわかりそななら、いいですけど。

多分わかりませんよ？

世界についてや魔法の種類の設定、書いてないから。

そこの方、詳しく書いた方がいいのかな？

この小説が、書き終わつたらでいい？

登場人物一覧

真界の住人

ミーシャ・ラクロワンド・アルテミシア

主人公

元は麻峯 椰笠。

いろいろ不幸な目にあって死亡後、何故か転生。髪は空色で、腰辺りまである。

瞳は右が金色で、左が虹色。

左目はあらゆる流れを見る事が出来る一種の神眼。

左目は普段閉じている。

顔は上の中ほどに可愛い系。

身長、手、足は小さい。

使用可能能力

次元支配

空間を切り裂き次元の中を自由に操れる反則能力。

概念附加

いろいろな武器を創るのに役に立つ。

リューネ・クライア・アルテミシア

姉上

金髪のショートヘア。

瞳は綺麗な碧。

とても美人。

ミーシャラブ。
プラコン。

アメリカ・キュレイス・アルテミシア
母

金髪蒼眼の母性あふれる母。
ダメな人。

シルビア・レーベン

メイドさん

青髪金眼の大人な女性。

何でもできるスーパーメイド。

レズマイス・グランベルド・デステント
デステント王国の王
豪華な衣装を着たおっさん。
カリスマがすごい。

クリス・リファリア
双子の片割れ
デステント王国第一騎士団隊長。
蒼髪赤眼の美人。

少し黄色がかかった肩辺りまである髪。
少しのんびり者。

クリア・リファリア

双子の片割れ

デステント王国第六騎士団隊長。

蒼髪赤眼の美人。

少し緑色がかかった肩辺りまである髪。

真面目な人。

リリイ・アルタイア・デステント

デステント王国姫

腹ペコ騎士王似の子供版。

銀髪紫眼のポニーテール。

フォルメスト・メイファ・デステント

デステント王国女王

白髪碧眼の美人。

・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・

魔界の住人

ルシファー

七つの大罪《傲慢》

明けの明星。

超聴覚を持つている。

停止結界を使える。

妖刀・神切りを所有する。

黒髪金眼。

全魔王中最強の魔王。

アラストル

七つの大罪《憤怒》

復讐者。

地獄の魔神。

元男で、現女。

赤髪のサイドテールで、オレンジの瞳。
本気になると、黒い炎を操る。

レビィアタン

七つの大罪《嫉妬》

フリフリの付いた服が好きな、美人。

真の姿は、海蛇の様な竜。

蒼髪碧眼。

嫉妬の仕方によって、強さが上下する。

リリス

七つの大罪《怠惰》

露出の多い服を着た美少女。

紫のツインテールで、赤い瞳。

七つの大罪の中では、一番戦闘能力が無い。

ベヒモス

七つの大罪『強欲』

小さい子供で、男か女か判断できない。
真の姿は、巨大なサイの様な見た目。

銀髪金眼。

アイスやケーキなどのお菓子類が好物。

ベルゼブブ

七つの大罪『暴食』

紳士の様な青年。

蠅の王。

金髪碧眼。

肉体的にズタズタにされる役……でも死れない。

アスモデウス

七つの大罪『色欲』

消滅済み。

やられる所すら出ません。

サタン

七つの大罪『真の憤怒』

工房を持っていたおじいちゃん。

黒髪黒目。

本気にならないとただのおっさん。

マモン

七つの大罪 〈新の色欲〉

ホントは強欲だけど、色欲の方が空いていたのでこうなった。

眼鏡美人秘書。

可愛い物に異常な愛を見せる。

A 5x5 grid of 25 black dots, arranged in 5 rows and 5 columns.

天界の住人

レ
イ

一
心
死
人。

ミーシャとリューの父親であり、アメリカの夫。
とある理由により、生き返っている。
永遠の中二病。

ミカエル

四大天使の争いを鎮める者。

金髪銀眼の中性的な者。

性別は自由に変更でき、戦闘中が男で通常時が女。敵には容赦しないが、味方には甘い。

ガブリエル

四大天使の言葉を伝える者。

エメラルドカラーの長髪で、眼を閉じた儂げな女性。

四大天使としての名前と違い、余り喋らない。

ラファエル

四大天使の癒しを司る者。

琥珀色の髪で、優しげな眼差しの女性。

全天使の中で、一番優しい方。

ウリエル

四大天使の裁きを司る者。

真紅の髪の好青年。

光り輝く炎を操る。

目的の為なら、どんな手段でも使う。

登場人物一覧（後書き）

次は、登場した武器一覧。

多分、そこだけ見てもわけがわからないと思われる。

自分がわからないから、わかられると困る……作者として。

四大天使は、勝手に組ませました。
天使は皆、銀の瞳固定です。

武器一覧（前書き）

ダメだ、章のタイトルが思いつかない。

誰か考えてくれない？

ピッタリだと思ったら変えるから。

武器一覧

約束された勝利の剣
エクス・カリバー

スキルは、【真名開放】【風王結界】【換装】【空破斬】【魔力開放】【直感】

下位の概念は、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】【魔力上昇】【集中力上昇】【魔術無詠唱化】

中位の概念は、【切断】【魔法反射】

上位の概念は、【不滅】【選定】【精神感応】

全て遠き理想郷
アヴァロン

スキルは、【真名開放】【瞑想】【加速】

下位の概念は、【魔力上昇】【回復速度上昇】【魔力回復速度上昇】

【常時体力回復】【常時魔力回復】【集中力上昇】

中位の概念は、【魔法反射】

上位の概念は、【次元結界】【不滅】【選定】

次元の切り手

護身用のナイフ。

スキルは、【次元切断】【換装】【空破斬】【瞑想】【加速】【直感】

下位の概念は、【素早さ上昇】【魔力上昇】【回復速度上昇】【魔力回復速度上昇】【常時体力回復】【常時魔力回復】【魔術無詠唱化】

中位の概念は、【次元障壁】【魔法反射】

上位の概念は、【不滅】【選定】

神糸の結び目
クルスティア

金色の腕輪型。

スキル、【自在操作】【感覚共感】【自動防御】【拘束術】

下位の概念、【集中力上昇】【精神集中】

中位の概念、【切斷】【魔力無効】【魔術無効】

上位の概念、【不滅】

絶望を与える神銃

黒い折りたたみ式の対物ライフル。

スキル、【貫通】【拡散】【銃弾生成】【直感】

下位の概念、【魔力上昇】【魔力回復速度上昇】【常時魔力回復】

【集中力上昇】【軽量化】

中位の概念、【気配遮断】【気配察知】【魔障壁】【思考加速】

上位の概念、【不滅】【必中】

愛の奴隸

ピンク色の鞭。

スキル、【人格変更】【服従】【調教】

下位の概念、【感覚強化】【射程操作】

中位の概念、【魔力無効】

上位の概念、【不滅】

絶対概念、【ドM化】

翠扇

水色の扇。

スキル、【受け流し】【胡蝶蘭】【光竜招来】

下位の概念、【魔力上昇】【魔力回復速度上昇】【常時魔力回復】

中位の概念、【良く弾く】

上位の概念、【不滅】

刺し穿つ死棘の槍

紅い槍。

スキル、【ガード・ブレイク】【ストライク・ウェーブ】【デス・バイツ】【瞑想】【加速】【直感】

下位の概念は、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】【魔力上昇】【魔力回復速度上昇】【常時魔力回復】【集中力上昇】【軽量化】

中位の概念は、【気配察知】【魔障壁】

上位の概念は、【不滅】【選定】【精神感応】【呪い・感情】

アイス・ザ・サイレント・ドリーム
氷結せし沈黙の夢

青白い大鎌。

スキル、【沈黙の円舞曲】【加速】【直感】【氷結】

下位の概念は、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】【魔力上昇】【魔力回復速度上昇】【常時魔力回復】【集中力上昇】

中位の概念は、【切断】【魔術無効】

上位の概念は、【不滅】【選定】【精神感応】【呪い・魔力】

ウイザーズ・ロット
大魔道士の誓杖

灰色の杖。

スキル、【崩壊の火炎】【再生の流水】【英雄たる由縁】【術式固定】

下位の概念、【魔力上昇】【魔力回復速度上昇】【常時魔力回復】

【集中力上昇】【軽量化】

中位の概念、【魔障壁】【魔力吸收】

上位の概念、【不滅】

ルシフェル・ヴァルキリー
聖剣・天界の戦乙女

輝く白い剣。

スキル、【覚醒】【聖人化】【超直感】【罪】

上位に概念、【不滅】【魔法吸收】【精神感応】【聖なる守護】【

対魔障壁】【肉体瞬間回復】

絶対概念、【選定消滅】【固定選定】【光】

魔剣・魔界の戦乙女
ルシファー・ヴァルキリー

禍々しい黒い剣。

スキル、【解放】【魔人化】【超加速】【罰】

上位に概念、【不滅】【魔術吸收】【精神感応】【邪なる加護】【

対物障壁】【魔力瞬間回復】

絶対概念、【選定消滅】【固定選定】【闇】

果て見えぬ絶望の園
ライイン・オブ・ザ・ガーデン

片手で持てるスイッチ型。

スイッチを押すと大気圏外に巨大な衛星砲が転移され、スイッチを持つている人以外を全て消し去る。

スキル、【次元転移】【承認機能】

絶対概念、【存在維持】【存在消滅】

熾天覆う七つの円環
ロー・アイアス

花弁1枚で、ディ ガイアの魔王様の奥義であるメテオ ンパクトを防げる。

スキル、【自動防御】【自動再生】【体内保存化】【魔力貯蓄】【魔力自動生成】

上位の概念、【魔術吸收】【魔法吸收】【気配察知】

絶対概念、【加護】【守護】【最適化】

混沌を運びし大空
カオス・オブ・スカイ

右手用で、空色の刃が美しく鋭い、斬ることを追求した大剣。

スキル、【装飾化】【覚醒】【断罪剣】

上位の概念は、【不滅】【対空強化】

絶対概念、【断絶】【固定選定】【選定消滅】【自己成長】

奈落へ誘いし大地
アビス・ザ・アース

左手用で、金色の刃が歪で潰れている、碎くことを追求した大剣。

スキル、【装飾化】【解放】【地烈波】

上位の概念、【不滅】【対地強化】

絶対概念、【粉碎】【固定選定】【選定消滅】【自己成長】

運命の導き

肉体や思考を自由に変化させる為の指輪。

時間制限付きで三分のみ使用可能。

スキル、【肉体操作】【精神操作】

金蛟剪
きんこうせん

七匹七色の竜を召喚する事の出来る物。

スキル、【火竜召喚】【水竜召喚】【風竜召喚】【雷竜召喚】【土

竜召喚】【氷竜召喚】【闇竜召喚】

上位の概念、【不滅】【精神感応】【自律思考】

裁き降す雷電
オバーザ・ライデン

帶電している、

スキル、【放電】【加速】【直感】【雷鳴の裁き】
ライトニング・ジャッジメント

下位の概念、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】【集中力上昇】【精神集中】

中位の概念、【嗅覚強化】【聴覚強化】【気配察知】

上位の概念、【不滅】【呪い・視覚】

盤古幡
ばんこはん

地球儀サイズの黒い球。

スキル、【増殖】【重力操作】【視覚共有】【聴覚共有】【魔力操作】

下位の概念、【集中力上昇】【精神集中】

中位の概念、【視覚強化】【聴覚強化】

上位の概念、【不滅】【選定】

絶対概念、【甘い】

ドリーム・トンファー

夢見る者の基礎

ミスリル製の美しいトンファー。

スキル、【トンファー 武術（笑）】【加速】【直感】【心眼】

下位の概念、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】

上位の概念、【魔力収集】【不滅】【選定】

絶対概念、【辛い】

武器一覧（後書き）

ここだけ見てもわけがわからないと思つ。

ゆえに、次の概念の設定を見てくださいな。

それでも、わからぬ可能性がありますがね。

概念一覧と設定（前書き）

あらためて見直すと、自分がすゞい中一病に罹つてると認識せらる。

どうして、こんなになつちやつたからだろうか？

妙に人気になつちやつたからだろうか？

嬉しいんだけど……なんだかなあ～

概念一覧と設定

概念付加にもいろいろと調節が出来る。

スキル、下位、中位、上位、絶対概念の五つ。
順に優先度が変わってくる。

下位の概念より中位の概念、中位の概念より上位の概念、ありゆる概念で絶対的に優先されるのが絶対概念。

スキルは、おまけみたいなもの。

おまけで、思い浮かべた武器防具、アクセサリーを創る事が出来る。
それ相応に時間は掛かる。

ただの剣に強力な概念を付けると、剣が耐えられずに壊れる。

・ · · · · · ·

スキル一覧

【空破斬】

魔力を初級魔法程度使って、斬撃をまっすぐ飛ばすことができる。

【瞑想】

何もしていないときに勝手に発動して、体力と魔力を高速回復する。

【加速】

通常の二倍ほどの速度で行動できる。

もちろん、発動中は体に赤いオーラを纏う。

【真名開放】

魔力を八割使う代わりにアレが出せる。

【風王結界】

武器透過やり、攻撃やらが出来る。

【換装】

どんな服に換装するかは、人によつて代わる。

【魔力開放】

魔力を放出し続ける代わりに、ある程度の魔力を持った攻撃を防げる。

【直感】

第六感に田覚める。

【次元切斷】

空間を切り裂いてその切り裂いた先にある次元に入る事が出来る。

【自在操作】

見えないほどの細く、決して切れない糸を無限に出し入れできる。

【感覚共感】

糸に視覚、聴覚情報を追加して、腕輪に繋がっている糸のある場所なら何処でも見て聞くことができる。

【自動防御】

危険な攻撃を自動で防御する。

【拘束術】

相手を縛るスキル。

どんな縛りかは、使ってからのお楽しみ。

【貫通】

遠距離武器専用の概念。

【拡散】

遠距離武器専用の概念。

【銃弾生成】

魔力を使って銃弾を創り続ける。

【人格変更】

所謂一重人格。

自分が何をしたかの記憶は残る。

【服従】

人型であれば誰にでも効く。

魔力抵抗値が高い、自分の意志が強い相手には効かない。

【調教】

動物などの人で無いものに使うと従うようになる。

大きさや強さによって聞かない個体もいる。

【受け流し】

あらゆる攻撃を受け流すことができる。

それ相応の技術の身体能力があれば。

【胡蝶蘭】

チヨウチヨウの様な光を出して敵を幻惑する。

【光竜招来】

魔力を半分以上使う変わりに光属性の魔力でできた竜（蛇型）を使役できる。

魔力が切れると自然消滅。

【ガード・ブレイク】

あらゆる防御を貫く。

上位の概念に加護や守りがある場合は、無効化される。

【ストライク・ウェーブ】

地面に突き立てる事によって広範囲に純粋な魔力の波を放つ。

【デス・バッヅ】

急所に当たった時に発動する。

基本的に意味は無い。

心臓に刺せばそれで死ぬから。

バンパイアなどに有効。

頭、心臓に効果あり。

【沈黙の円舞曲】サイレント・ワルツ

真横に鎌を振る事によって一定距離を全て切り裂く。

【氷結】

斬つたものを凍らせる。
凍らせないこともできる。

【崩壊の火炎】

炎に触れたものを崩壊させる魔力。

【再生の流水】

傷や病気などを治す魔法。

【英雄たる由縁】

自分以外を強化することができる魔法。
武器防具兵士を強化する為の魔法。

【術式固定】

複数の魔法を同時に使えるようになる。
数日なら、発動しないで保つことができる。

【覚醒】

武器にのみ有効な概念。
武器の力を覚醒させて、絶大な力を発動する。

【聖人化】

見た目に変化は無いが、身体能力を上昇する。
ただし、天界でなければ意味は無い。

【超直感】

直感の強化版。

【罪】

触れたモノを浄化して、意識を奪う。

【解放】

武器にのみ有効な概念。

武器の力を解放して、真の力を使う事ができる。

【魔人化】

見た目に変化は無いが、身体能力が上昇する。
ただし、魔界でなければ意味は無い。

【超加速】

加速の強化版。

【罰】

触れたモノを消化して、存在を消す。

【次元転移】

指定した場所がどこであろうと瞬間移動する魔法。

【承認機能】

所有者がスイッチを押した時に撃つか撃たないかを決めることが出来る。

コレを決められるのは、設定された者だけ。

【自動再生】

使っていない間に大気中の魔力を使って自動で修復されていく。

【体内保存化】

武器、防具、装飾品などと違い持たなくていい。

【魔力貯蓄】

常に魔力を貯め続ける。
容量は、ほぼ無限。

【魔力自動生成】

常に魔力を創り続ける。

魔力量が限界を超えるとこの概念をつけた物が壊れる。

【装飾化】

武器を腕輪やネックレスなどにする。

【断罪剣】

敵を斬れば斬るほど切れ味を強化する。

【火竜召喚】【水竜召喚】【風竜召喚】【雷竜召喚】【土竜召喚】

【氷竜召喚】【闇竜召喚】

召喚系は、そのままの通りで、召喚する事が出来る。

【肉体操作】

この概念の付いた物を持っていると、自身の肉体を自由に操作できる。

【精神操作】

この概念の付いた物を持っていると、自身の精神を自由に操作できる。

【地烈波】

地面上に叩きつけることで、少しの間地面を自在に操る事が出来る。

【放電】

電気を放つ事が出来る。

自身に纏つて、肉体の限界を無理矢理出すなどいろいろ使い道がある。

【雷鳴の裁き】

ライトニング・シャッショント

一時的に自身を雷化して、周囲一帯に雷を落とす。

雷化を保つ事は出来るが、保つ長さによってかなりの代償を伴う。

【増殖】

この概念を付加した物を増やす。
ただし、本体とは色違い。

【重力操作】

この概念の付いた物の一一定範囲の重力を操る事が出来る。

【視覚共有】

この概念の付いた物を通じて、見る事が出来る。

【聴覚共有】

この概念の付いた物を通じて、聞く事が出来る。

【魔力操作】

魔力がある限り、離れた所からでも操作できるようになる。

【トンファー武術（笑）】

トンファーを使った（笑）武術的なものが使えるようになる。

【心眼】

一時的な未来視を可能にする。
見るのは、1・2秒先のみ。

・・・・・

下位の概念一覧

【攻撃速度上昇】

【筋力上昇】

【素早さ上昇】

【魔力上昇】

【回復速度上昇】

【魔力回復速度上昇】

【常時体力回復】

【常時魔力回復】

【集中力上昇】

【魔術無詠唱化】

あらゆる魔術を無詠唱で放てる。
やひつと思えば、上級の魔術も無詠唱で使えるようになる。

あらゆる感覚が鋭敏になる。

【精神集中】

【軽量化】
ただ軽くするだけ。

【感覚強化】あらゆる感覚が倍以上になる。
痛さも、快感も、倍。

【射程操作】

自分の意のままに伸ばしたり縮めたりすることができる。

A 5x5 grid of 25 black dots, arranged in 5 rows and 5 columns.

中位の概念一覧

【魔法反射】

魔力を消費し、一定時間あらゆる魔力を使つた攻撃を反射できる。

【次元障壁】

次元をずらして、あらゆる攻撃から身を守る。

【魔力無効】

相手の魔力を封じることができる。

【魔術無効】

触れた魔術を無効化する。
自分の魔術及び魔法も使えない。

【気配遮断】

気配を消す事が出来る。

【気配察知】

気配を探知出来る様になる。

【魔障壁】

魔力を使う代わりに障壁を纏うことができる。
上級の魔術をくらつても一回は防げるぐらいいの硬さ。

【思考加速】

一時的に思考を高速で働かせる事によって、あらゆる動きがゆっくり動いているように見ることができる。
使いすぎると頭が痛くなる。

最悪、吹き飛ぶ。
加速の劣化版？

【良く弾く】

水や炎、剣による斬撃を受け止める事ができる。
スキルの受け流しと使いことで、舞を踊る様な美しさで、敵からの攻撃をくらわずにすむ。

【魔力吸收】

使った魔法、魔術、使われた魔法、魔術に使われた魔力の半分を自分の中にする。
けして、魔術や魔法を無効化できるわけではない。

【嗅覚強化】

嗅覚を活性化させて、匂いを嗅ぎ分ける事が出来る様になる。

【聴覚強化】

聴覚を活性化させて、音を聞き分ける事が出来る様になる。

【視覚強化】

視覚を活性化させて、見る能力を上昇させる事が出来る。

【魔力収集】

倒した相手の魔力を吸収して、武器としての格が上がっていく。

・ · · · · · · · · ·

上位の概念一覧

【次元結界】

あらゆる害のある攻撃を反射、または、消滅させる。

【不滅】

けして壊れない武器防具になる。

【選定】

選ばれた人以外に使うことが出来なくなる概念だ。

選ばれた人が持つと羽のように軽くなり、選ばれて無い人は持つことが出来ない。

地面に沈む。

【精神感応】

使い手の心しだいでいろいろ変わる。

【必中】

スコープに相手をいれて、引き金を引けば当たる。
防ぐことは可能。

【呪い・感情】

武器の使用中に感情が無くなる。
代わりに、普段倍の力が出せる。

【呪い・魔力】

魔力を常に消費し続けるが、かわりに普段の倍以上の身体能力になる。

【魔法吸収】

所有者に害のある魔法を全て吸収して、所有者の魔力に変換する。

【聖なる守護】

あらゆる闇の魔術を無効化する。

【対魔障壁】

魔力を消費して魔力のある攻撃を遮る。

【肉体瞬間回復】

大気中の魔力を集めて所有者の肉体が限界を超えた瞬時に肉体を全快にする。

【魔術吸收】

所有者に害のある魔術を全て吸収して、所有者の魔力に変換する。

【邪なる加護】

あらゆる光の魔術を無効化する。

【対物障壁】

魔力を消費して基本的な物理攻撃を防ぐ障壁を張る。

【魔力瞬間回復】

大気中の魔力を集めて所有者の魔力が切れたら瞬時に魔力を全快にする。

【対空強化】

飛行が可能な相手と戦闘している時、身体能力を強化する。

【対地強化】

地面を動く相手と戦闘している時、身体能力を強化する。

【自律思考】

この概念を付けた物が自分で思考して、自由にする。

【呪い・視覚】

呪いを発動してると、視覚を奪う代わりに身体能力と視覚以外の感覚を強化する。

魔界に属するモノに対し絶大な効果を誇る。

光

所有者が死ぬまで、所有者が変わらない。

【固定選定】 選定の強化版。

選定で選ばれた所有者が死んだ時に選定消滅する。

敵を仲間にする最低のネタ手段。

ただし使い捨ての一回限り。

下位、中位、上位の概念としても付加できる。斬り易くなる。

絕對概念一覽

A 4x6 grid of 24 black dots, arranged in four rows and six columns.

低級の悪魔等は、近付くことすらできない。光の魔術を手足のように操ることができない。

【闇】

天界に属するモノに対し絶大な効果を誇る。下位の天使等は、近付くことすらできない。闇の魔術を手足のように操ることができる。

【存在維持】

その概念を持つていてる限りその存在を消される事が無くなる。

【存在消滅】

あらゆる存在を消し去る概念。

防ぐ方法は、存在維持だけ。

【加護】

所有者に対しての遠距離型の攻撃が全て外れる。

魔術や魔法、弓矢などが当たらなくなる。

【守護】

所有者に呪のあることを遮る。

マグマの中や海の中で呼吸することが出来る。

【最適化】

所有者のもつとも快適な温度を保つ。

どれだけ熱い所だろうと、どれだけ寒い所だろうと、常に一定の温度でいられる。

【断絶】

斬ること以外が出来なくなるが、あらゆるモノを斬ることが出来る。

【粉碎】

砕く事しか出来なくなるが、あらゆるモノを砕くことが出来る。

【皿】成長

使えば使つほど使用者に最適化していく。

【甘い】

そのままの意味で、甘くなるだけ。

【辛い】

そのままの意味で、辛くなるだけ。

概念一覧と設定（後書き）

もっとネタ武器創ろうかな……あ、天使には『ハイ クールD×D』
の「神滅具」を持たせる予定だったり。

ここに書く事じゃないね。

前書きと後書きって……一々変えるの面倒だよねえ
だから、変えないよ？

プロローグ（前書き）

頑張れ主人公。

主人公にやる気はないが。

プロローグ

死んだな……いくら不幸でもアレは無いわ。

俺こと【麻峯】あさみね【椰笠】やよいは、どこかの幻想を殺す人ぐらい不幸だ。

何かと命の危険が多い。

車が突っ込んだり、トラックが横転して潰されそうになつたりなどなど。

今回は飛行機が墜落してきた。

そして、どうどう死んだ。

ちなみに、今まで俺の巻き添えで死んだ人はいない。

今回も皆生きてんだる。

とにかく、何が言いたいかと言つと……

「どうやねん」

「天界やよ~」

空といふか海といふか、空のよつた海としか表現できないといふて立つていた。

そして、上から羽の生えた人が

「もう、いいです、連れてつて下さい…天使でしょ?」

「そうはいかんのよ~」

きっと転生とかそんなんだろ?

俺はまだ死にたくない、ああ、もう死んでるか。

とにかく、異世界とか行つたら間違いなく戦争に巻き込まれる。しかも最終的に大変なことになるのは俺だけだし。

やつてらんねえよ。

「なんか能力いるう~？」

「次元支配と概念付加が欲しい」

俺、この力で別次元に行って、のんびり暮らすんだ。
失敗フラグ？ そんなもの立てた覚えはない。

「ふうむ……いいよ~」

なんかす~」に「やつとしたんだけビ~！？」
なんだ、何をする気だ！？

「いつてら~」

「.....」

「.....」

「.....」

「.....」

「グッジョブ！あ~ん~、グッバイ！」

輝かんばかりの笑顔で、親指を下に向けていた。

なんだこいつ？

最後に見たことと思つたのことはそんなことだつた。

プロローグ（後書き）

主人公どうしよう。

可愛い系かな？

カツコイイ系かな？

それとも普通？

次回は、名前、変わります。

第一話（前書き）

連続

どひんぐ

第一話

6歳の子供である。
名前はまだ無い。
募集してます。

.....。

募集終了。

短い？ 知るか。

とゆうわけで、俺の名前はミーシャ・ラクロワンダ・アルテミシア
に決まりました。

周りの人もこんな感じだからしょうがないだろ？

嘘だよ、初めからあつたよ。

髪はなんか輝いている空色。

腰辺りまで伸ばしてみた。

瞳は右が金色で、左が虹色。

なんとなく左目を閉じている。

顔の造りは、上の中ぐらい？

身長は.....うん。

能力は普通に使えた。

変な能力も増えてた。

でも、その能力におしゃぶりを持っていかれたから使っていない。

結構気に入っていたのに.....。

（閑話休題）

この世界の説明をしておこう。

なんと魔法があつた。
以上。

……冗談だよ。

魔法にもいろいろ種類があるらしい。

火・水・風・雷・土・氷・光・闇の8種類の魔術。
回復・状態異常・強化・召喚の4種類の魔法。

他にも細かいのがあつた気がする。

あと、世界の分類としては、大きく分けて4つ。

天界・魔界・聖靈界・真界。

天界は天使達がいるといわれている。

あの天使は最上位の天使と似顔絵がそつくりだった。
魔界は悪魔達がいるといわれている。

デノートのデーク見たいなの。

アレは、死神か。

聖靈界は精靈や召喚獣がいるらしい。

最近、精靈が纏わりついてきてうざい。

真界は人間・エルフ・ドワーフ・妖精・魔族・竜族などがいるようだ。

魔族はいろいろいた。

リザードマン・ケツトシーなどなど。

あと、エルフのお姉さんは美人だった。

今わかつているのは、こんなところかな？

あ、普通に中世ヨーロッパぐらいの技術だった。

何してんだる。

一人寂しく頭の中で考え事なんて……。
でも、しょうがないじゃない。

誰も話し掛けて来ないんだもの。

唯一話しかけてくれるのは、メイドさんと姉上と母ぐらい。

メイドさんの名前は、シルビア・レーベンだが、メイドさんで良いと言われた。

何でもできるスーパー・メイドだった。

青髪金眼の大人な女性。

姉上の名前は、リューネ・クライア・アルテミシア。とても優しく、いつも話しかけてくれる。

金髪碧眼の優秀で頼りがいのある姉。

母の名前は、アメリカ・キュレイス・アルテミシア。何故か得物を狙うような目で見られることがある。

母は、要警戒だ。

金髪蒼眼の母性あふれる母。

我が家は中流貴族らしい。

父は俺が生まれたころに死んだらしい。

我が家には、他にもいろいろな使用人がいるらしい。

「ミー」

この呼び方は……母？

「姉だ」

ごめんなさい。

上記三人は何故か俺の考えていることが偶にわかるらしい。

「母様の代わりに城に行くが、お前も来るか？」

姉上は、とても優秀だ。

13歳なのに大人と同等の力と知識を持つている。

金髪のショートヘアで、瞳は綺麗な碧で、とても美人だ。

簡単に言うと、リアルチートなう。

そんな姉上は、いない父の代わりをしている母の代わりを良くする。
そのときは、何故か俺を必ず誘つてくる。

何故だ？

「外、や

「そうか……いや、なんだか嫌な予感がするから今日だけでも一緒に行こう

俺の語意力ショボ。

嫌な予感ってなんやねん。

まあいいや、行つてやろうではないか。

今回だけ特別なんだからね！勘違いしないでよね！

「ん

「行つてくれるか！よし、なら行こうか？

「ん

喋れんゼイ。

姉上が俺の手をとつて我が家のある馬車に乗り込む。
そういうえば、家の外、初めてだ。

第一話（後書き）

ミー君が脳内暴走。
プロローグの時のクールな感じが無くなつた。
クールでもなかつたか。

第一話（前書き）

またまた連続投稿～

どうぞ～

第一話

すげー、大きいです。

城でかすぎだお。

ナニがデカイと思ったよ？

「ミー、ぐだらない事を考えているな？」

ごめんなさい。

え～こちらの城は、大体300年ほど昔に建てられた由緒正しい城らしいです。

外観は中々綺麗で、明るいイメージが出ている。

例えるなら、大聖堂？

城じやないね～。

城内移動中。

「大人ばかりだが気にせずにな？」

「……ん」

大人がどうした！
かかってこいや～！
ちょっと緊張してたり。

「お前は賢いから大丈夫だ」

俺つて賢い？

姉上が大きい扉を開ける。

その後ろに、トコトコ着いて行く。

歩幅小心翼。

「おお、クライア君か……キュレイス殿は大事無いか？」

なんか豪華な衣装を着たおっさんが来た。
姉上に話しかける。
知り合いかな？

「はい。いろいろ忙しい身ですので、いつも時ぐらいい頼つて欲しいものです。」

「ははは、そつぬわないでやるのも子供の仕事であるが？」

母は現在、風邪を引いています。
てか、このおっさん誰？

「ん？この子は？」

「ああ、」紹介が遅れました。ミーシャです

「おお、この子があのラクロワンド君か」

「ハー、」挨拶しない

あつと偉い人なんだろ？な。

気の利いた事が言いたいNE！

「よひ、しぐ」

「聞いていた通りあまり喋るのが得意でないようだな」

サービス。

「我は、」の国テストント王國の王、レズマイス・グラントベルド・
デステントだ」

リアル王様キター。

だからどうしたよ？

ちなみに、この国は、この世界で、一番田、有名な、国だ！
たしか、魔法とかがすごいかったと思つ。

「驚かないとは……少しつまらないな」

「無駄に達観している上に、感情表現が苦手ですから

失礼な！

これでも感情豊かですよ？

口差しが強くて外がだるいとか。

歩幅が小さくて動くのがだるいとか。

声がうまくでないから喋るのがだることか。

俺は感情豊かだ！

「ふむ、まあよいか……では、何時もの所に座つていてくれ
「わかりました。ミーおこで」

室内をよく観察すると、謁見の間のような広さで、裁判所のような
感じになつてゐる。

俺と姉上が座るのは、王座の右側で三列ある席の一一番後ろだ。
少し席に座つて、姉上とちよくちよく話していると、徐々に席が埋
まってくる。

そして空席が両手で数えられるほどになつたあたりで、王様が言つ。
「これより、我が国に向かつて来ている魔物の群れについての会議
を始めむ。」

ゑ？

マジで？

つまり

「戦、争？」

その頃あは、誰にも聞かれることはなかった。

どないしょ。

もつわけわかめ。

第三話（前書き）

実は連続投稿。

一時間ずらしてみた。
どうぞ。

いや～驚いた驚いた。

俺の運もここまでくるとす、いな。

関わると俺の命が危ないな。

ここは、大人しくしよう。

「今すぐに討伐軍を送るべきだ！」

「いや、ここは防備を調べて……」

「傭兵どもを雇つて、戦わせればいい！」

「それでは資金がかかり過ぎる……」

「こんななんばつか。

「……静まれ」

その一声に、混沌としていた場が静寂に包まれる。

カリスマ、パネエ。

「私は今回、討伐軍を送らうと思つている

その言葉に、お偉いさん達がざわつく。

「静肅に……」

王様のそばに控えていた美人な騎士様が一喝。
また、静かになる。
騎士様、カツケ。

「そこで、討伐軍の指揮をする者はいないか？」

誰も反応しない。

それどころか、下を向いたり、横を向いたりしている。
ダメダメやん。

かくゆう俺は、帰る気満々だけどな！

「誰もいないのか？」

「……ならば、私に討伐軍を指揮する栄誉をお譲りください」

「む……」

何ともいえない空気を無視して、姉上が宣言する。
マジですか？

てか、この空気で言つとか、さすが姉上。

「姉……上」

「大丈夫だ、必ず、私は帰つてくれる」

姉上が心配させないよつこ、ゆつくじと言つてくれる。

姉上は死なないだらうから、どうでもいい。

問題は、俺が一緒に行くのがどうかだ。

「僕……は？」

「ツー？……お前は、お留守番だ」

一瞬の間が怖かつたが、よかつた。
一応、御守り的な物でも創ろうかな？

・・・・・

視点・リューネ

「そこで、討伐軍の指揮をする者はいないか？」

王が、そう言った。

だが、誰もその声に応える者はいない。

「誰もいないのか？」

王が問い合わせる。

先ほどまで、討伐軍を送るべきだと言った者すら下を向いている。
これが今の貴族。

私腹を肥やし、己が欲を優先するだけの輩。

私は、こんな奴らとは違つ！

「……ならば、私に討伐軍を指揮する栄誉をお与えください
む……」

私がそう言つと、王が少し考え始める。

他の貴族達は、なにやら小さな声で話し合つている。
安全などこのから命令しかしない奴らに、何かを言われても何とも思わない。

「姉、上

「大丈夫だ、必ず、私は帰つてくる」

弟が心配そうに言つてくる。

私の弟は、とても賢い。

だからこそ、わかつたのかもしれない。
このまま討伐軍を送つても、意味が無いと。

「僕……は？」

「ツー？……お前は、お留守番だ」

この子は、自分も連れて行けというのか……
まだ、10歳にもなつていらないこんな子供が……
いや、ミーは、私のことを、心配してくれているのだな。
血が繋がつていなければ、私の夫に欲しかったな。

「……では、リューネ・クライア・アルテミシアよ、御主を討伐軍の指揮官として任命する。頼んだぞ」

「ハツ！必ずや我が国に勝利を！」

王の言葉に答える。

今は、私にできる事をするだけだ。

「……いき、てね？」

「ああ、私は必ず生きて、お前の元に返つてくんだぞ」

そう、私は必ず生きる。

お前を、ミーを守れるのは、私だけなのだから。

・・・・・

・・・

・

今すぐにでも行きたいだらうけど少しの間、待つてもうりますか
ね？

略して、いきてね。

勘違いされた気がするけど、まあいいか。

第三話（後書き）

ウチの主人公に、シリアルスは向かないのよ。
わかつて。

では、また次回。

第四話（前書き）

最初から飛ばしそぎたかな？

でも、知らない間に何故か人気になってしまったかな？

姉上が魔物と戦いに行く。

姉上の武器防具にいろいろ追加しておいた。
弄っている所を見つかって、何度も怒られた。

概念付加で、武器防具を聖騎士、いや、勇者クラスにしてみた。
勇者は、いわゆる英雄に与えられる称号みたいなものだ。
概念付加にもいろいろと調節が出来た。

スキル、下位、中位、上位、絶対概念の五つだ。

上から順に優先度が変わってくる。

下位の概念より中位の概念、中位の概念より上位の概念、あらゆる
概念で絶対的に優先されるのが絶対概念。

スキルは、おまけみたいなものだつた。

大体こんな感じで調節してみた。

スキルは【空破斬】【瞑想】【加速】。

下位の概念は【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】【魔力
上昇】【回復速度上昇】【魔力回復速度上昇】【常時体力回復】【
常時魔力回復】。

中位の概念は【切断】。

これだけあれば何とかなるだろ？

上位の概念と絶対概念は、神用の武器になってしまふようなので、
やめておいた。

空破斬は、魔力を初級魔法程度使って、斬撃をまっすぐ飛ばす」と
ができる。

瞑想は、何もしていないときに勝手に発動して、体力と魔力を高速
回復する。

加速は、通常の三倍ほどの速度で行動できる。

もちろん、発動中は体に赤いオーラを纏う。

三倍は赤だと言つ俺は、間違つてるのだらつか？

これは、発動型なので、俺が言わないと使えないかも知れない。あとは、おまけで創つた御守りを出発前に渡すぐらい。とゆうわけで遊びます。

「討伐軍出発、当口」

「では、行つて来る」

「行つてらつしゃいませ、お嬢様」

「……こ、れ

「ん？ ネックレスか？」

ネックレス型の御守りを渡した。

ついでに、母は、前日に興奮のし過ぎで、寝込んでいる。御守りの効果は、一回限りの絶対概念【完全再生】だ。

「これは、ガーネットかい？」

「ん？」

「ガーネットの意味は、たしか……」

「生命力やエネルギーですよ、お嬢様」

「そうか……ありがと、ミー」

「ん」

おふう、拾つた綺麗な石で創つたなんて言えない。

ガーネットだったとは……

「母様に言つておいてくれ、必ず帰つてくれる、とな」

そう言つて、姉上は討伐軍の居る方へと向かつて行つた。

「……」

「あ、ミーシャ様。そろそろお屋敷にお入りください」

「……ん

これで話し相手がいなくなってしまった。

寂しい。

自分から話しつける?

出来たらいいなあ。

我が家に入り、拾った石を魔改造することにした。

母は、いつ出るんだろう?

その夜、母の寝室から「私も…出たいよ」と啜り泣きが聞こえた。明日は久しぶりに、一緒に寝てあげようかと考えたミーシャであった。

第四話（後書き）

母が不憫になつた。

そのうち母メインのでも書いてみようかな？

ちなみに、次回は姉メイン。

第五話（前書き）

もつらし、戦闘描写を何とかしたい。

俺的には、ヘタだと思つ。

どうぞ。

第五話

姉上が旅立つて、次の日。
概念付加を使って遊んでいた。
ホントにいろいろてきて楽しい。
今日は特に何もなかつた。
以上。

・
・
・
・
・

視点・リュ・ネ

王の話では、ただ数が多いだけでそれほど強い個体はないと言わ
れていた。

が、今私の目の前にいるのは間違いなく魔王級の魔物だつた。
私の周りには、死んでいった者達が大勢横たわっている。
私の後ろには、魔法特化の遠距離型とその護衛だけ。

「逃げられんな……」

もはや撤退などすることが出来ず、なんとか牽制して押しとどめて
いる状態だ。

私が倒れれば、後ろの者達は、抵抗も出来ずに、死んでゆくだけだ。
こいつだけでも

「倒す！」

父様から譲り受けた長剣を強く握り、斬りかかる。

この長剣、ミーが触り始めた辺りから、とても使いやすくなつた。今着ている軽鎧も、着ているだけで魔力が回復したり体の疲れがほとんど消えた。

何かと不思議な弟であるが、帰つたらしっかりと聞き出さなくてはな。

「フッ！」

斜めから剣を振り下ろし、その勢いのままに、切り上げる。自分でも驚くほど剣速で、腕をあっさりと切り裂いた。

だが、相手は魔王級の魔物。

その程度では、すぐに再生してしまう。

剣に振り回されない様に相手の動きに注意を払い、一気に攻勢に出る。

なぎ払い、突き、切り上げ、無詠唱によるあらゆる初級魔術。それでも致命傷を与えられずに反撃される。

長い爪による薙ぎ払い、無詠唱によるあらゆる中級魔術。そして……上級の闇の魔術。

直撃すれば跡形もなく消滅させられるだらう。だが、避けることなど出来ない。

後ろには、仲間がいる。

確かに、たいして一緒にいたわけでもない。

それでも、見捨てるなんて出来ない。

だからこそ

「私は、逃げるわけには

魔術が放たれ、私にまっすぐ向かつてくる。

あの魔物には、もう私を殺すこと以外に興味がないようだ。

なら、好都合！

「いかないんだあああ……！」

向かつてくる魔術に剣を切り落とす。
その時剣から何かが放たれ、ミーにもらった御守りが光り輝き砕け
散った。

魔術が消えて魔物を見てみると、真つ二つになっていた。
魔物の中心に核の様な黒い塊があつたがそれごと真つ二つになつて
いた。

御守りも粉々で、修復不可能であつた。
魔物達も魔王級がリーダーだったようで、残つていた全ての魔物が
引いて行く。

「……ミー、帰つたらおしおきだ」

小さく呟き後ろにいた仲間達に告げる。

「この戦……私達の勝ちだあ……」
『つおおおおおおお……』

剣を掲げると皆も同じように武器を掲げる。

大歓声の中生き残つた者達は死んでいた者達の為にも笑顔で泣いた。

私はそんな中で静かに黙祷する。
黙祷を終えて考えることは

「どんなおしおきにしてよつか」

そんなことだつた。

・・・・・

視点・ミーシャ

何故だらう。

このままだと、とても恐ろしいことになりそうだ。

とりあえず、絶対防御の概念をかけた指輪を創ることにした。
余計酷い事になりそうな気がした。
諦めることにした。

姉上、俺はどうなるのでしょうか？

何故か姉上の極悪スマイルが思い浮かんだ。

第五話（後書き）

どないしたもんか……

姉の武器どうしよう。

やつぱ剣？

それとも槍？

あえての鉄球？

ソつぽく鎌？

安全面的に『矢？

』は、剣かな？

第六話（前書き）

姉、ブラン、暴走。
どひゃ。

第六話

姉上が帰ってきた。
いろいろ質問された。

一緒に風呂に入ることになった。
おまけで一緒に寝ることになった。
……何故？

「森の工房」

我が家近くにある森に建つていて工房に来てみた。
鬚モジヤのおっさんがいた。

「なんのようだ？」
「……使って、い？」
「……邪魔はするなよ」

そう言つと自分の作業に集中し始めた。
許可が出たので、隅を使わせてもらひことにした。
姉上の剣が砕けてしまつたので、その代わりでも造らひと思つてゐる。
何故か姉上が家に着いて鞘から剣を抜くと砕けていた。
かなり落ち込んでいた。
何やつたらあんな風になるのだろう？
そんなこんなで完成した。

「エクス、カリバー」

セイバーさんのエクスカリバーができた。

ついでに鞘としてアヴァーロンも造つた。

スキルは、【真名開放】【風王結界】【換装】【空破斬】【瞑想】

【加速】【魔力開放】【直感】。

下位の概念は、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】【魔力上昇】【回復速度上昇】【魔力回復速度上昇】【常時体力回復】

【常時魔力回復】【集中力上昇】【魔術無詠唱化】。

中位の概念は、【切断】【魔法反射】。

上位の概念は、【次元結界】【不滅】【選定】【精神感応】。こんな感じだ。

真名開放は、魔力を八割使う代わりにアレが出せる。

風王結界は、武器透過やら、攻撃やらが出来る。

換装は、ネタとしてセイバーさんのあの戦闘服になれる。魔力開放と直感は、セイバーさんが持っているのと同じ。

魔術無詠唱化は、そのままの意味で、あらゆる魔術を無詠唱で放てる。

やろうと思えば、上級の魔術も無詠唱で使えるようになる。これが一番強いような……

魔法反射は、魔力を消費し、一定時間あらゆる魔力を使つた攻撃を反射できる。

次元結界は、アヴァーロンの真名開放を使えば発動できる。あらゆる害のある攻撃を反射、または、消滅させる。

不滅は、けして壊れない武器防具になる。

選定は、選ばれた人以外に使うことが出来なくなる概念だ。

選ばれた人が持つと羽のように軽くなり、選ばれて無い人は持つことが出来ない。

地面に沈む。

これで、姉上以外が使うことは出来ない。

精神感応は、使い手の心しだいでいろいろ変わる。完成したので、姉上のところに持つていく。

「あり、がと」

「フン……暇になつたらいつでも来い」

「ん」

意外といい人だ。

これが噂のツンデ

いろいろな都合で、カットです。

第六話（後書き）

次回、姉さらばに暴走。

どうなる？

説明的なのが、長いな。

第七話（前書き）

姉上大暴走。

ブランにしそぎた。

視点・リュ・ネ

父様から預いた剣を壊してしまつとは……まだまだ修行が足りないようだ。

そういうば、壊れた剣を持つて落ち込んでいる私を見てから、ミーが何かしているようだ。

そんなことを考えていると、私の部屋のドアがノックされた。

「開いているぞ」

「姉、上」

入つて來たのはミーだつた。

なにやら布に包まれたミーより大きな物を抱えていた。とても可愛らしい。

何故私の弟は、こんなに可愛いのだらう?

「これ、あげ、る」

「ん? 私にくれるのか?」

大きさと違つて、とても軽い。

なんだこれは?

布を取つてみた。

そこから出て來たのは、とても綺麗で、とても美しい鞘とその鞘に収められた神々しい雰囲気を放つ剣だつた。

「ミー……これは、いつたい……」

「造つて、みた」

こんな物をミーが、造つた？

鞘から剣を抜いてみる。

剣の刃は、両刃の長剣の様な形だつたが、そこら辺にあるよつた剣ではなく、芸術品のような、それでいて、どんなモノでも切断できそうな剣だつた。

剣から放たれる神々しい氣配から、伝説に出てくるよつた神剣や聖剣のように感じる。

「ミー、この剣に名前はあるのか？」

「エクス、カリバー……本当の、名前は、約束された、勝利の、剣

「エクスカリバー……約束された勝利の剣……」

「鞘は、アヴァ、ロン……全て、遠き、理想、郷

「アヴァロン……全て遠き理想郷……か

無意識にミーが言つた名を、囁み締める様に呟く。

「姉、上が、困つた、時、本当の、名前を、言えば、い

「そう、か……ありがとう」

こんなにすゞい物を私のために造つてくれた。

それだけで、満足だつた。

先ほどまで、落ち込んでいたのが嘘の様な笑顔をミーに向け。ここにミーがとんでもないことを口にする。

「あと、それ、いち、おう、聖、剣」

「……は？」

この子は今なんと言つた？

聖剣？

つまり、この子は聖剣を造ったのか？

「……フ、フフ、アハハハ…… わすが私の弟だ」

他の女に渡したくないな。

既成事実でも作ってしまおうか？

何故かミーが、急いで出て行こうとする。

「まあ、待て」

「……や」

やつぱり可愛いな。

他の女に渡したくないな。

子供をえ作つてしまえば、誰も文句は言えないだろ？

「……」（姉上が変態になつた気がする）

「失礼だぞ」

「……」（「めんなさい）

「私が、ミー以外に性的興奮を覚えるとでも？」

「……」（真操ピーンチー）

「ふふ、安心しろ、私も初めてだからな」

「……」（何が！？）

「女にそんなことを言わせるな」

結果的に、ミーはまだそつこつことが出来なかつたので、一緒に寝るだけにした。

ミーは、やわらかいな。

寝ているミーの脣に自分の唇を重ねた事は、私だけの秘密だ。

第七話（後書き）

ためてた話が無くなつた。

続きどうじよひ。

とりあえず//ーに護身用の武器を持たせよひと想ひ。

ナイフは確定。

他に//ーに持たせたい武器とかあつたら書つてくださいな。

受付期限としては、2011年8月8日あたりまで。

そのぐらいには、続きを書く。

では！

第八話（前書き）

ん～主人公の装備どうじょう。

決まらん。
ナイフしか。

なんだか寝てる間に何かをされた気がする。
気にしないで置くことにした。

護身用ナイフを造つてみた。

刃の長さは、拳二つ分。

刃の太さは、指ぐらい。

スキルは、【次元切断】【換装】【空破斬】【瞑想】【加速】【直感】。

下位の概念は、【素早さ上昇】【魔力上昇】【回復速度上昇】【魔力回復速度上昇】【常時体力回復】【常時魔力回復】【魔術無詠唱化】。

中位の概念は、【次元障壁】【魔法反射】。

上位の概念は、【不滅】【選定】。

次元切断は、空間を切り裂いてその切り裂いた先にある次元に入る
ことが出来る。

換装は、ネタとしてキラキラしている水色のドレス。
どんな服に換装するかは、人によって代わるんだよ！
趣味じゃないからな！

次元障壁は、ナイフの所有者の次元をずらして、あらゆる攻撃から
身を守る。
腰辺りに付けている。

これで安全！

……過剰ですかね？

そのうち、ラピタでも造ろうかな。

ム カ大佐ごつこしたい。

人がゴミの様だあ！！

……落ち着け、俺。

今更ながら、俺は何タイプなのだう？？

剣士？

魔法使い？

アーチャー？（赤い外套の弓兵ではない）

……アーチャーいいかも。

何造ろつかな

剣、槍、弓矢、鎌、ハンマー、鉄球、大剣、双剣、鉈、杖、ガント
レット、銃、長銃（スナイパー ライフル的な物）、双銃、爪、糸、
反則装備？……どれがいいかな？
ナイフだけじゃなんだかなあ
金ぴか王のアレとかどうかな？
……やめとこ。

よし、決めた！

そうと決まれば、髪モジャのおつをひととおじいちゃんのところに行くぜ！

第八話（後書き）

まだ、ぎりぎり受け付けてます。

何もない、反則装備？になりますよ？

俺としては、反則装備？か長銃。

第九話（前書き）

いのこのじ参考になる武器を考えてください。ありがとうございます。

武器を造るのは今回だけではないので、基本、全部出来んじやないかなーと思います。

では、さっそく

糸と対物ライフルを造つてみた。
アンチ・マテリアル・ライフル

糸の概念。

スキル、【自在操作】【感覚共感】【自動防御】【拘束術】

下位の概念、【集中力上昇】【精神集中】

中位の概念、【切断】【魔力無効】【魔術無効】

上位の概念、【不滅】

腕輪型。

自在操作は、見えないほどの細く、決して切れない糸を無限に出し入れできる。

感覚共感は、糸に視覚、聴覚情報を追加して、腕輪に繋がっている糸のある場所なら何処でも見て聞くことができる。

自動防御は、危険な攻撃を自動で防御する。

拘束術は、相手を縛るスキル。

どんな縛りかは、使ってからのお楽しみ。

精神集中は、糸を出している時、あらゆる感覚が鋭敏になる。

魔力無効は、拘束術で縛った相手の魔力を封じることができる。

魔術無効は、糸に触れた魔術を無効化する。

糸を出している時、自分は魔術及び魔法が使えない。

アンチ・マテリアル・ライフル
対物ライフルの概念。

スキル、【貫通】【拡散】【銃弾生成】【直感】

下位の概念、【魔力上昇】【魔力回復速度上昇】【常時魔力回復】

【集中力上昇】【軽量化】

中位の概念、【気配遮断】【気配察知】【魔障壁】【思考加速】

上位の概念、【不滅】【必中】

折りたたみ式。

貫通と拡散は、そのままの意味。

銃弾生成は、魔力を使って銃弾を創り続ける。

軽量化は、ただ軽くするだけ。

気配遮断と気配察知は、そのままの意味。

魔障壁は、魔力を使う代わりに障壁を纏うことができる。

上級の魔術をくらつても一回は防げるぐらいの硬さ。

思考加速は、一時的に思考を高速で働かせる事によって、あらゆる動きがゆっくり動いているように見ることができる。

使いすぎると頭が痛くなる。

最悪、吹き飛ぶ。

加速の劣化版？

必中は、スコープに相手をいれて、引き金を引けば当たる。

素人でも、ゴル 13並みの腕前に！

防ぐことは可能。

どうだ！

すごいだろ！

糸の名前を神糸の結び目

アソチ・マテリアル・ライフル

対物ライフルの名前を絶望を与える神銃

カツコイイだろ！

「こちらは没収です」

メイドさんに、絶望を与える神銃が没収された。

ああ、俺の主力兵器が……

しくしく……

頑張ったのに……

メイドさんの意地悪。

……危ないから説明書でも作るか。

・
・
・
・
・

視点・メイドさん

まさか、ミーシャ様がこんな物を造るなんて……
お嬢様が、大事にしたがる理由もわかります。
こんな物を造れると知られたら、兵器開発のために連れて行かれて
します。
お嬢様と一緒にミーシャ様をしつかりと守らなくては！
とりあえず、コレ、どうしましょう？

「……」

「……? どうかしましたか？」

「……」

ミーシャ様から何かの紙を貰いました。
なんでしょう？

「それ、の、使いか、た」
「そうでしたか……ですが、私が使つてもよろしいのですか？」
「……ん」

小さく頷くミーシャ様。

……なんでしょう、とても保護欲をそそられます。

なんとなく今日マリーシャ様と一緒に寝ることになりました。
……可愛い。

メイドさんが、良く話し掛けて来る様になつた。
このまま家にいると、貞操が危ない気がする。

・
・
・
・
・

第九話（後書き）

なんでメイドさんに持たせたんだろう？

メイドさん無双フラグが立った気がした。

名前の中一一度は気にしないでください。

第十話（前書き）

主人公のミー君より主人公らしい一人の決闘。

どうなると思う？

てか、この小説何時の間にかお気に入り件数が500いってん！？
楽しい？

俺は書いて楽しい！

そういうえば、自分の武器を作るついでに母に鞭を送つた。
ウチの母、M……だから。

結構ネタにはしつた。

スキル、【人格変更】】【服従】】【調教】

下位の概念、【感覚強化】】【射程操作】

中位の概念、【魔力無効】

上位の概念、【不滅】

絶対概念、【DM化】

人格変更は、所謂二重人格。

自分が何をしたかの記憶は残る。

服従は、人型であれば誰にでも効く。

魔力抵抗値が高い、自分の意志が強い相手には効かない。

調教は、動物などの人で無いものに使うと従うようになる。

大きさや強さによって聞かない個体もいる。

感覚強化は、あらゆる感覚が倍以上になる。

痛さも、快感も、倍。

射程操作は、そのままの意味で、自分の意のままに伸ばしたり縮めたりすることができる。

DM化は、そういう理由で使うとそのままの意味になる。

敵を仲間にする最低のネタ手段。

反省はしていない。
後悔はしている。

・・・・・

視点・母

私の出番……いいえ、私の時代が来たわ！

……私は、何を言つてるのかしら？

そういうえば……ミーちゃんから鞭を貰つた。

……どうしようと？

そうか！これで叩いて貰えれば良いのね！

つまり、これの使い方は、ご褒美ね！

ありがと、ミー君！

むしろミー君に使つてもらおつかしら？

「……母」

「どうしたの、ミー君？」

なんだか怯えてる様に見えるけど……

ハツ！？まさか、リューちゃんが何かしたのー？

「……ん」

なんだか呆れられた気がする。
おかしいな？

「奥様、今日の「予定は……」

「わかつてゐるわ」

「……」(いつも見て見るとできる女だよなー)

「ミー君、失礼よ」

「……」(「めんなさい」)

そうだ！

最近、ミー君とのスキンシップが無かつたから、今日ミー君といつも

……なんで出て行けとすんなの//一君?

11

いやいやと首をフルフルさせる。
可愛いわ

「……奥様、そちらは寝室です」

ハッ！？私は何を！？

「 毎 様 ！ い い 加 減 に し て く だ さ い ！」

「 」

フ、
フフ、
フフフフフ。

さすが我が娘

発言に躊躇いか無いわ。

「いいわ！その幻想！私が粉々にしてあげるわ……」
「……」（立場的に……それ、俺の台詞……）
「母様、いいえ、アメリカ！貴方の罪を！数えろお……」
「……」（もう、あんた等が主人公で良いじゃん）

A 3x3 grid of nine black dots, arranged in three rows and three columns.

視点・メイドさん

「これは、修復できるのでしょうか？」

「……無理ですね。」

「引越しの準備をしませんと。」

「ミーシャ様、こちらへ……危ないですから」

「……ん」（魔術スゲエエエ……おお、あれが上級魔術）

小さな歩幅で一生懸命歩く姿は、とても愛らしいですね。

「……」（そつち寝室だよ）

「……」（そつち私は、奥様と同じことをしていたようです。
そういうえば、あの一人、寝室だけ一切の被害も出さないですね。
す」）（執念です。）

「とりあえず、引越しの申請に行きましょうか？」

「……ん」（あれって……古代魔法とかゆうのじゃ……気のせいか）

ミーシャ様の小さく軟らかい手をとつて、城に向かつて歩く。

後ろから悲鳴とかが聞こえた気もしますが、私は関係ありません。

第十話（後書き）

あれ？おかしいな。

母のターンが何時の間にか終わってる。

何故？

しかも何故かドMになってる…？

母だし、いつか。

決闘は引き分け。

鞭の絶対概念ビリウド？

ダメ？

第十一話（前書き）

投稿ミス？

申し訳ありませんでしたああああ！！！

こんなショボイミスを……

一番人気な小説なのに……

ガン ム造りたい。

この世界で、ガン ムとか反則だろ。

メイドさんに没収されそだから造らないけど。

最近暑いので、扇を作った。

暇だったので、概念を付加した。

家?

無くなつたけど……寝室を残して。

偶然と言つより怨念やら執念を感じる。

今のは、城に少し近付いた豪邸。

メイドさんが増えた。

名前は、まだ知らない。

何時も見守られてる気がする。

スキル、【受け流し】 【胡蝶蘭】 【光竜招来】

下位の概念、【魔力上昇】 【魔力回復速度上昇】 【常時魔力回復】

中位の概念、【良く弾く】

上位の概念、【不滅】

受け流しは、あらゆる攻撃を受け流すことができる。

それ相応の技術の身体能力があれば。

胡蝶蘭は、チヨウチヨの様な光を出して敵を幻惑する。

光竜招来は、魔力を半分以上使う変わりに光属性の魔力でできた竜（蛇型）を使役できる。

魔力が切れると自然消滅。

良く弾くは、そのままの意味で、水や炎、剣による斬撃を受け止めることができる。

スキルの受け流しと使いことで、舞を踊る様な美しさで、敵からの攻撃をくらわずにすむ。

……誰かにあげよつ。

俺には使えん。

名前でも考えよ。

翠扇スイセイでいいか。

あ、あの王様にあげるかな。

城行きたいな

「ミーこれから城に行くが、着いてくるか？」

「……ん」

ラッキー！

王様に渡せるぜ！

そういうえば、王様の近く美人な騎士様いなかつたつけ？

「……」

「……」

姉上、何故俺の首筋に剣を？

「いや、私が近くにいるのに別な女、しかも美人の事を考えてる気がしたから」

ピンポイント！

許して。

「……私も、母様やメイドさんが持っているような特殊な武器が欲

「……」

あれは、その、ネタの塊だから……特に母のやつ。

ま、いいか。

槍……は騎士様にあげるか。

姉上に合いそうな武器……大鎌？

「……失礼だぞ」

「ごめんなさい。」

「あ、そうだ！アレにしよう！
ネタに走りまくった反則兵器！
……いいよね？」

「……あま、た」

「やうか！……何故だろ？、とても危険な約束をした気がする」

反則兵器の名前は……果て見えぬ絶望の園ライ・オブ・ザ・ガーデンの園とかどうよ？
漲つてキタアアア！！！」

昨日創つた槍をあの騎士様に渡さないと。
どこにまつまつたつけ？

第十一話（後書き）

今日は少しぶつ壊れて生きます。

最後に、ホントに申し訳ありません！

第十五回（前書き）

Fateの武器他にも出でうかなか……

なんか出して欲しいのあつたら言つてください。

無理矢理出します。

城、到着。

王様どこだ〜?

騎士様に渡す槍の名前は刺し穿つ死棘の槍。
ガイ・ボルク

パクリ?

気にすんな。

エクスカリバーだつてそうじやん。

とりあえず、こんな概念を付加してみた。

スキル、【ガード・ブレイク】【ストライク・ウェーブ】【デス・バイツ】【瞑想】【加速】【直感】

下位の概念は、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】【魔力上昇】【魔力回復速度上昇】【常時魔力回復】【集中力上昇】【軽量化】

中位の概念は、【気配察知】【魔障壁】

上位の概念は、【不滅】【選定】【精神感応】【呪い・感情】

ガード・ブレイクは、あらゆる防御を貫く。

上位の概念に加護や守りがある場合は、無効化される。

ストライク・ウェーブは、地面に突き立てる事によって広範囲に純粹な魔力の波を放つ。

デス・バイツは、急所に当たつた時に発動する。

基本的に意味は無い。

心臓に刺せばそれで死ぬから。

バンパイアなどに有効。

頭、心臓に効果あり。

呪いは、後に続くのによつて変わる。

今回の呪いは、武器の使用中に感情が無くなる。

代わりに、普段倍の力が出せる。

意外と強い？

真名開放は、ほら、魔物つて心臓刺しても死ないことの方が多いから。

むしろ原典より強くな？

布に包んで持つてきた。

兵士に捕まつた。

そりやねえ。

王様に会いに行くのに武器もつてく奴なんか怪しいわな。

「何をしている？」

「クリス隊長！」

あ、この前の騎士様。

「ミー彼女は、クリス・リファリアで、第一騎士団の隊長だ」

この国には、第一から第六騎士団まである。

第一騎士団は、国の精鋭を集めた部隊だつたはず。
メイドさんが教えてくれた。

「リューネ…… そちらの生き物は？」

「……私の弟だ」

なんだ？

姉上とクリスさんは、知り合いなのか？
てか、生き物つて……

「弟…… 可愛いな」

「それは良かつた、ではな
「まあ、待て」

「仲悪いのかな?
す」に気まずいんだけど。

「なんだ?」
「私も弟欲しいぞ」
「……ミーは、物ではない」

「そうだそうだ。」

「それとな、ミーは……私の物だあああ……」

物扱いいい!?

「なら、力ずくで……貰つまで……」

「なんだコレー?」

「武器の無いお前など、相手にならんわあああ……」
「弟君、これ、借りる」
「……ん」

渡しちやつたけど良いのかな?

まだ完全に選定されてない筈だから呪いが発動する事は無い筈。

「さあ!恐れと共に!跪けえええ!」

「貴方に教えてあげる、本当の絶望を!」

あ～王様どこかな？

「ク、クリス隊ち、ぐほあ！？」

「クライアち、『こはあ！？』」

俺は、悪くない。

原因？

俺じやない。

謁見の間にでも、行ってみるか。

第十一話（後書き）

姉上……どうしてこうなった。

次回！

双子登場！

第十二話（前書き）

姉上の最初のクールさが、消えていく……

姉暴走タグでもつけようか？

第十二話

「……二人とも何か言う事は？」

「すいませんでした」

「申し訳ありません」

「まったく、仲は悪いとは思っていたが……限度を知れ」

絶賛王様に怒られ中。

王様に聞いた限りだと。

王様と良く話す姉上と王様の護衛をしているクリスさんは、知り合いではあるが、何故か仲が悪い。

「ミーが欲しいとか抜かすもので……」

「可愛いんだもん……」

始めて見た時の印象が亡くなつっていく。

「クリス！」

クリスさんが……増えた！？

「お前は、また迷惑を……」

「まあ、待て……ミーシャ君に自己紹介を」

「？…………第六騎士団隊長、クリア・リファリアだ」

もしかして、この人がこの前の騎士様？

双子？

すげえー

第六騎士団は、国の守護が主な目的。

「//ー、シャ、で、す」

「.....」

メッチャ見られてる。

俺なんかした？

「.....いい」

ん？

なんて言つた？

「まあか、クリアさんまで.....」

「.....ミシャ？」

ちょっと呪つないよ、クリスさん。

「リュー・ネ殿.....//ー・シャ殿は、君の弟なのだな？」

「.....はい」

「わ、か.....」

なんだらひ、家がにぎやかになる気がする。

あと、クリスさん。

その槍、返してくれないの？

「リュー・ネ君、今回呼んだ理由だが

「

王様と姉上が話し始めた。

必然的にクリスさんとクリアさんと三人で話すことになるのだが.....

「話が無い。」

姉上もむちむちとこいつたちを見てる。

「…………ん? そういえば、クリス、その槍は?」

「ミシヤから貰った」

あげた覚えは無い。

「…………これは、誰が造ったんだ?」

「…………ん」

自分を指差す。

「…………」

わざわざよりも話し辛くなつた。

「良ければ、私にも造ってくれないか?」

もともと、その槍が貴女のです。
しうがない、この人には大鎌でも創るか。

「わ、かつた」
「…………ありがとう」

何故頭を撫でる。

「……クリアするい」

クリスさん、何故抱きつぐ。

「む……な、なら私だつて！」

クリアさんも対抗しないで。

「貴様ら……」

姉上怒らないで。

「ミーは……私の…………夫だあああああ…………」

違つからあああああ！……

「私は弟で良い」

「私は、妾でも……」

あんたらも何言つてんだ！？

「許さん！その命を燃やし尽くせえ！……」

「…………その身に敗者の烙印を刻んであげる……」

「私に挑むか、いいだろつ……『己が無力を嘆ぐがいい！……』

……王様ヘルプ。

「……すまん、我は用事があるので、失礼する

逃げやがった！

どうすんだよ……この人達？

第十二話（後書き）

俺は、何も、悪くない。

どうして、この双子、出てきて早々暴走したんだ。

てか、周りの女性がミー君より目立ってる。

ミー君最強タグが意味をなしてない。

ホントは強いんだよ？

第十四話（前書き）

無理矢理キャラを増やしてみた。

もつもつもつもつ、増えなくなる。

戦闘……した方がいいかな？

第十四話

「お前達は何をしてるんだ……」

姫っぽいのキター

白百合の姫騎士希望。

綺麗だし。

「ん？ お前は誰だ？」

「……」

「……」

「……む、名前を聞くなら先に名乗れと書つ」とか……面白い

わ～ターゲットにされた。
けしてびびってたわけではない。
のどがかれてたんだ。

「リリイ・アルタイア・テストント、リリイで良いぞ？」

「……ミー、シャ」

「？……あーお前がリューネの弟か！」

「……ん」

なんだ？

姉上は、有名なのか？

「なるほど、たしかに……だが、まだ子供に見えるが……何歳だ？」

実は、最初の自己紹介から2年ほど経つてゐる。

武器創りが、2、3日で、できるとでも？

「……8」

「8歳！？……リューネは、何を考えてるんだ？」

ちなみに、母は規制されました。歳。

姉上は、15歳。

メイドさんは、永遠の20歳。

ホントの年齢はわからないが、見た目だけの年齢は……

王様は、40歳。

不思議な騎士は、19歳。

真面目な騎士は、同じく19歳。

姫様は、12歳。

「私は10歳だ」

何故わかつた！？

「なんとなくだ」

それじゃあしようがない。

「クッ…やはり、勝てないか……」

「クリア……強すぎ」

「そんなことを言つたら、そちらの武器の方が……」

あ、何時の間にか終わつてゐる。

クリアさん一人で、チートかもしけない装備を持つてゐる一人を倒したのか……

「リリイ？」

「姫だ……」

「姫様！？」

「気付くのが遅いわ……」

あの双子の騎士は、何歳なんだろう？
あの発育で実は、姉上と同じ15歳とか？
ないわ、

「私だつて、もう少ししたら……」

「15」

「私も15です」

……顔に出てる？

「出でるな」

「出でる」

「出でます」

「出すぎだ」

そんな、バカな！？

「とりあえず、お前ら三人は仕事に戻れ」

「クッ！変な女に引っかかるんじゃないぞ！わかつたな！」

「……この槍、大事にする」

「造ってくれる武器、楽しみにしてますね？」

姉上……

昔のカツコイイ姉上に戻つて。

何故か姫さんが隣にいる。

「お前、武器造れるのか?」

「……ん」

「なるほど……なり、私にも造れ!」

〔命令ですか?〕

「個人的なお願ひだ」

〔そうですか。〕

「その扇……いいな……」

……
えいわ。

「む、すまんな」

よければ、こちらの腕輪もおねがいください。

「「コレもくれるのか?」……私としては、そちらのナイスの方が欲しい

……マジで?

……えいわ。

けして、けして権力に負けたわけではない。
長いものに巻かれただけだ。

「壱つておへが、一度貰つた物は返さんぞ?」

……新しいの創らなこと。

「造るのさ、杖でいいぞ

まだどる気か！？

「 一つだけ言つておひへ、私は、姫だ

……畜生！

世の中理不尽だ！

第十四話（後書き）

姫さんが、性格悪くなってしまった。

ミー君の全武器回収。

コレで、新しいのが創れる！

……何も思いつかない。

第十五話（前書き）

姫さんのキャラがつかめない。

ツンデレか？

でも、カッコイイな。

このままのキャラを維持できるだらうか？

第十五話

現在、家で寛ぎ中。
姉が隅でいじけてた。
何があつた！？

「ぐす……」

姉上……何故泣いてる？
なんかあつたんだろ？

「……盗られた」

何を？
ま、まさか！？

貞操を

「//ーに貰つた剣と鞘」

……想像通りだ。
で？……誰に盗られた？
大体想像つくけど。
俺が、この前盗られたし。

「リリイに……」

だろうね。
こんな感じかな？

予想中

「リリイー！ それはハーネーのだろー！」

ん？今は私のた

卷之二

「む、分かるか、ミーか

「ふむ……それをくれるなら、教えてやる

「ぐ……仕方あるまい」

「なら、それをミーに返せ」

「考えると言つただけだ」

「…………」

予想終了

外道だな。

そして、姉上単純すぎる。
だがそこが良い。

「どう、し、て？」

「あのね

予想通り

何故だろう、姉上が可愛い。

でも、それ以上の感情が芽生えない。

家族だからだ！

「……また、ひ、くる」

「ぐす、ホント?」

幼児退行している。

なんか良いわ~

むしりのままでも良い気がする。

「……ん」

「ありがとう、ミー」

でも、ま、何時も姉上の方が好きだから戻つてもうわんと。
さて、姉上用に完璧なのを創るかね。

「それと……」

「……?」

なんじや?~

「できれば双剣で!」

注文かい!

それにも……双剣、か……

一つあわせて一つか、一つひとつするか……迷う。

・・・・・

あ、双子騎士と姫さんがどんな見た目か言ひたくないや。

クリスさんは、蒼髪赤眼の美人。

少し黄色がかかった肩辺りまである髪。
姉上と違つて発育も完璧。

クリアさんは、蒼髪赤眼の美人。

少し緑色がかかった肩辺りまである髪。

クリスさんとそつくり。

姫さんは、銀髪紫眼の美少女。

どこかの腹ペコ騎士王似の子供版。

どうして、姫さんが……腹ペコ騎士王になつた。
いや、似てるだけだから良いんだけどね？

・ · · · ·

……そういえば、なんであの姫さんは、姉上の剣を持ってたんだ?
……選定の概念が発動してなかつた?
いや、もしかして、剣自身が持ち主に選んじやつたのかな?
……あの姫なら、ありか。
むしろピッタリだし。

む？なんだ？

誰かに噂されてる気がする。

「姫様、その剣……リュー・ネ殿が持つていませんでしたか？」

「ああ、奪い取つた」

「何故です？」

……理由、か。

「理由は、そうだな、私に似合いそうだったからだ！」

「そうですか……アルテミシア家は王族と親しいですが、どう言おうと所詮中流貴族ですからね……大貴族の方々が無理矢理聞いて、その剣を造つたのはミーシャ殿であると知れば……」

「……わかつてゐなら始めから聞くな」

恥ずかしいではないか……全く。

「わざわざ悪人みたいな真似しなくても良かったのでは？」

「見てたのかい！」

「いえ、偶然、チラッとお見えになつたので……」

もひ、知らん！

「寝る！」

「そうですか……明日、アルテミシア家にクリスと行くのですが……いえ、私が言つ」とではありませんね、では

全く、なんて奴だ。
いつか絶対泣かせてやるー

……私にできることなんて、所詮この程度だけだ。
ま、もしもの時は逃げる時間ぐらい作つてやるかな?

第十五話（後書き）

セイバー・リリイにしたかったわけではありません。

……そんなこと聞いてない？

最後、微妙にフラグに見える。

ミー君を何時魔界に落とそうか……

第十六話（前書き）

概念をまとめた設定、書いた方がいいかな？

今回の最初で、姉上の剣を姫さんが持てた理由、わかります。

頑張つて長く書けるようにします。

楽しみにしてる人も多いので、アドバイスください。
でも、できればあまり難しいことは言わないでください。
頭パンクします。

姫さんが、姉上の剣を持てた理由がわかつた。

姉上が、渡してしまつたからだ。

所有者である姉上が、次の所有者を姫さんにしてしまつたようだ。

あと、クリアさんと姫さんに大鎌と杖を創つた。
とても、眠い。

てか、あの日から双子騎士と姫さんが家に来るようになつた。

双子騎士は、何故来るかわからない。

姫さんは……嫌がらせもかねてると思つ。

大鎌の概念。

スキル、【サイレント・ワルツ】【加速】【直感】【氷結】

下位の概念は、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】【魔

力上昇】【魔力回復速度上昇】【常時魔力回復】【集中力上昇】

中位の概念は、【切断】【魔術無効】

上位の概念は、【不滅】【選定】【精神感応】【呪い・魔力】

サイレント・ワルツは、真横に鎌を振る事によつて一定距離を全て
切り裂く。

氷結は、斬つたものを凍らせる。

凍らせないこともできる。

呪い・魔力は、魔力を常に消費し続けるが、かわりに普段の倍以上の身体能力になる。

杖の概念。

スキル、【崩壊の火炎】【再生の流水】【英雄たる由縁】【術式固

【定】

下位の概念、【魔力上昇】【魔力回復速度上昇】【常時魔力回復】

【集中力上昇】【軽量化】

中位の概念、【魔障壁】【魔力吸收】

上位の概念、【不滅】

崩壊の火炎は、炎に触れたものを崩壊させるする魔法。

再生の流水は、傷や病気などを治す魔法。

英雄たる由縁は、自分以外を強化することができる魔法。

武器防具兵士を強化する為の魔法。

術式固定は、複数の魔法を同時に使えるようになる。

数日なら、発動しないで保つことができる。

魔力吸收は、使った魔法、魔術、使われた魔法、魔術に使われた魔力の半分を自分のものにする。

けして、魔術や魔法を無効化できるわけではない。

姫さんの方は、一部欠陥品な気がするけど……いいよね？
姉上の？

.....。

忘れてないよ？

明日から創るつもりだったんだよ？

ホントだよ？

俺は誰に言つてるんだろ？

姫さん、どこだ？
ちなみに、城の中です。

「……ミシャだ」

この呼び方は、クリスさんかな?

「どうしたの?」

「……あ」

「クリアと姫?」

「……う」

「中庭の方で訓練してた気がする」

「……あ」

「なら、一緒に行こう?..」

「……ん」

手を繋いで、一緒に中庭に向かつ。
なんで通じたんだろう?..

・・・・・

・・・

視点・兵士の会話

「なんで会話が成立してるんだ?」

「バカ、あのクリス隊長だぞ?」

「たしかに……」

「俺としては、そんなことよりも……」

「ああ、俺も思った」

『あの可愛い子誰だ?』

・・・・・

鳥肌が立つた。

なんだ、今の悪寒？

あ、いた。

戦闘してる。

・・・・・

リリイが果敢に攻める。

リリイの攻撃をクリアは、軸足を動かさずに捌ききる。

「クツ！」

「その程度ですか？」

「なめるなーー！」

リリイは、剣戟を休める事無く攻撃を続ける。
クリアは、顔色一つ変えずにそれを捌く。
圧倒的な実力差。

「ハアツーー！」

力を込めた斬り上げ。

「フツーー！」

相手の力を利用して受け流す。

リリイはなすすべなく、体制を崩す。

「グッ！？」

「私の勝ちです、姫様」

「また、負けた……」

リリイは、剣を首筋に向けられ、負けを認めた。

・・・・・

遅くね？

スローで見えたんだけど。

俺がおかしいの？

……実は、俺って最強？

ないな。

「む、見ていたのか」

「ミーシャ殿にクリス、どうしたのですか？」

「……あ」

「？」

「頼まれてた武器ができたから家にとりに来て欲しい、だつて

「おお、ついにできたか！」

「……何故わかる？」

俺にもわからん。

「では、行くぞ！」

「あ、姫様！せめて護衛を付けてください！」

「……行こうか？」

「……ん」

姉上がいない。

なんだか珍しいな。

……あまり良い予感がしない。

第十六話（後書き）

またまた嫌な予感。
戦争？少し違うな。

そして、ミー君は可愛い。

あと、メイドさんが出したい。
あの武器で無双したい。

そろそろ、魔界に行つてみようか？
ミー君最強フラグも立ててみたし。

第十七話（前書き）

ミー君をめぐつて争います。

デステント王国と魔界が。

勝てるわけがないね。

姉上用の双剣を創つた。

聖剣・天界の戦乙女。

魔剣・魔界の戦乙女。

名前、いらないかな？

ルシフェル・ヴァルキリー

聖剣・天界の戦乙女の概念。

スキル、【覚醒】【聖人化】【超直感】【罪】

上位に概念、【不滅】【魔法吸收】【精神感応】【聖なる守護】【

対魔障壁】【肉体瞬間回復】

絶対概念、【選定消滅】【固定選定】【光】

覚醒は、武器にのみ有効な概念。

武器の力を覚醒させて、絶大な力を発動する。

聖人化は、見た目に変化は無いが、身体能力を上昇する。

ただし、天界でなければ意味は無い。

超直感は、直感の強化版。

罪は、触れたモノを浄化して、意識を奪う。

魔法吸收は、所有者に害のある魔法を全て吸收して、所有者の魔力に変換する。

聖なる守護は、あらゆる闇の魔術を無効化する。

対魔障壁は、魔力を消費して魔力のある攻撃を遮る。

肉体瞬間回復は、大気中の魔力を集めて所有者の肉体が限界を超えた瞬間に肉体を全快にする。

選定消滅は、選定で選ばれた所有者が死んだ時に選定消滅する。

固定選定は、選定の強化版。

所有者が死ぬまで、所有者が変わらない。

絶対概念の光は、魔界に属するモノに対し絶大な効果を誇る。

低級の悪魔等は、近付くことすらできない。
光の魔術を手足のように操ることができない。

魔劍・魔界の戦乙女の概念。
ルシファー・ヴァルキリー

スキル、【解放】【魔人化】【超加速】【罰】
上位に概念、【不滅】【魔術吸收】【精神感応】【邪なる加護】【
対物障壁】【魔力瞬間回復】
絶対概念、【選定消滅】【固定選定】【闇】

解放は、武器にのみ有効な概念。

武器の力を解放して、真の力を使う事ができる。

魔人化は、見た目に変化は無いが、身体能力が上昇する。

ただし、魔界でなければ意味は無い。

超加速は、加速の強化版。

罰は、触れたモノを消化して、存在を消す。

魔術吸収は、所有者に害のある魔術を全て吸収して、所有者の魔力に変換する。

邪なる加護は、あらゆる光の魔術を無効化する。

対物障壁は、魔力を消費して基本的な物理攻撃を防ぐ障壁を張る。

魔力瞬間回復は、大気中の魔力を集めて所有者の魔力が切れたら瞬時に魔力を全快にする。

絶対概念の闇は、天界に属するモノに対し絶大な効果を誇る。

下位の天使等は、近付くことすらできない。

闇の魔術を手足のように操ることができる。

強くしそうだ。

そして……持てない。
重すぎる。

「ミー」

姉上だ。

これ、持つてて。

……あれ？

なんで姉上がここにいるんだ？

おじいちゃんの工房にまで来ない筈なのに……

「ん？ それが、私の新しい剣、か……」

なんだ？

いつもと雰囲気が違う気がする。

姉上が双剣を両腰に付ける。

鞘も剣に合ったのを創つておいた。

「……もうすぐ、この国に魔王が来る」「……ま、もう？」

魔王、か……あれ？

前に倒したとか言つてなかつたつけ？

「……まえ、は？」

「……あれは、私達人間が決めた魔王級だ……今回の魔王は、魔界が決めた魔王だ」

「なん、で？」

「悪魔が王の前に現れて、言つたんだ……この国に、神が力を『えた者』がいる、と……その者を渡せ、と……」

……俺？

いや、でも、天使だつたよ？
最上位だつたけど。

「〃一正直に答えてくれ……アサ〃ネ・ヤオイ……」の姉前は、心当たりがあるのかを……」

俺の前の名前じゃん！？
俺なんか……どうじよつへ。

「〃一 知つてゐるんだな？」

「…………うん」

「わづか 大丈夫、お前は、私が守るから」

「…………ん」

姉上は、最近壊れ氣味だけど……やつぱ頼れるよな……

「せー、今日はもつ帰るのつー。」

「…………ん」

俺は、姉上と手を繋ぐ。

姉上の手は、普段から剣を持っているのに柔らかく感じた。
なんで、今まで、気付かなかつたんだろう。

姉上の、リコーネの横顔を見上げる。

その横顔は、凛々しく、美しく、そして……かっこよかつた。

・
・
・
・
・

視点・メイドさん

城で、王族の給仕をしているメイドが言つてこましたが……やはり、

ミーシャ様のことでした、か。

お嬢様も、私に言つて下されば良いのに……酷いですね。

さて、いつ来るか分かりませんし、準備しておかなければいけませんね。

奥様とも相談しませんと……やることがたくさんですね。

お嬢様だけに負担を強いるなんてこと、メイドの私にできるわけがないですね。

ミーシャ様をお嬢様と一緒に守ると、誓つたのですから。

死んでも、守つて見せます。

・

・

・

視点・リリイ

「姫、どうする?」

「姫様……」

「御主等は隊の者達といなくて、よいのか?」

「姫の護衛」

「隊は副隊長や他の隊の隊長が何とかしてくれます……それに、隊の者達も納得しておりますし、軍の人間は皆、姫様のことを探してありますから」

「む……」

心配性な奴らだな……まったく。

「姫……ミーシャのこと」

「……分かってる……父様も危険なことぐらいは、な

「では、ミーシャ殿のことを……」

「ああ、全力で守ることになったよ……私も行くからな？」

「頑張る」

「はあ……止めないといけないんですが、言つても聞かないでしょ
う？」

「当たり前だ！」

お気に入りの者が危険な事になつてゐるんだ、無視するわけないだろ。
ミーシャが造つた腕輪、アレのお蔭で今回来た魔物からの攻撃を受
けても平氣だつたのだ。

……命の恩人じゃない？

「でしおうね、だからこそ王からはずでに許可を貰つております

「……相変わらず仕事が速いな」

「さすがクリア」

「はあ……とにかく、明日からは私とクリスは、極秘裏にミーシャ
殿の護衛に入ります……正直やめてもらいたいですが、姫様は自由
にして良いそうです」

自由！？

父様は、そこまで許してくれたのか！？

「王からの伝言です……『友達ぐらには、自分で守れ』だそつです

友達……か。

うむ、確かに気兼ねなく話せる（？）奴ではあるな。

友達が、魔界につれてかれるかもしれない……すごい状態だな。

「そつか……うむ……では、明日からじつかりとミーシャを護衛する

ぞー！

「了解

「ハツー！」

私がここまでやるんだ……絶対に守つてみせるー。
……とりあえず。

「今日は寝るぞー。」

「寝る

「はあ……」

・・・・・

俺のせいでの、この国危ないんだよね？
俺は、どうするべきなんだろ？

第十七話（後書き）

相棒見ながら書いてたら少しシリアルになつた。

ミー君の選択は？

王国の運命は？

魔界の目的とは？

気になる？

俺も気になる。

外伝・その？（前書き）

書いてみた。

伝言を伝えに来た魔物。

後適当にフラグ。

外伝・その？

視点・王様

「リュー、ここなんだが……」

「ん？ ああ、それはだな……」

うむ、やはり身分を気にしないアルテミシア家に娘の手伝いをさせたのは間違いではなかつたか。

出来ればこのまま、友達でも作つて欲しいのが、親心なんだがな。

「テストント王！」

「ん？ なんだ？ 今仕事中なのだがな……」

少し焦つた様に宰相が、部屋に入つて言つ。

「ま、魔界からの使者と言つてゐる者が！」

「なんだと！？」

「父様！」

「レズマイス様！」

「ど！ だ！」

「す、すでに謁見の間に……」

それを聞いて、私とリリイとクライア君が、飛び出す様に走り出す。

「二人とも、無茶だけはするな！」

「分かつてゐる！ むしろ父様の方が心配だ！」

「レズマイス様よりは、マジだと思います！」

確かに一人の方が強いけどね。
しかし、何故今使者等……

謁見の間に入る。

「な……」

「コレは……」

「……」

そこでは、兵士が数十人、肉塊に変えられていた。

「やつとですか……待ち草臥れて何人か血祭りにあげてしまったよ」

「……使者と聞いたが、何の用だ？」

「この国に、神が力を与えた者がいる……その者を渡せ」

「神が？」

神は世界を創った後、世界には、一切の干渉をしない筈では?
それに、何故そんなことを神に反逆する、魔界の住人たる魔物や悪魔が知っている?

「そうだ、アサミネ・ヤオイ、この名を知っている者が、神に選ばれた者だ」

「……神が与えた力とは、なんだ？」

「人間如きが俺に質問か……まあ、いいだろう……神が与えた力は、創る力だと聞いた」

「「ツ！？」」

リリイとクライア君が息を呑む。
まさか、知っているのか?

「その反応、知っているな？」

爪を伸ばす。

「一人が生きてれば、どうにでもなるか」

そう言つて、リリイの心臓に爪と伸ばす。いきなりの事で、誰も反応できなかつた。その筈なのに、魔物の爪は、リリイの前で、止まつていた。

「何！？ どうゆうことだ！？」

「ハア！」

「ガハア！？」

戸惑つている隙に、クライア君が魔物に迫り、落ちていた剣で、斜めに切り裂く。

当たる前に止まつたとはいえ、娘の無事が気になる。

「大丈夫カリリイ！？」

「ええ……どうやら、ミーシャに助けられたらしい」

ラクロワンド君に？

どうじうじだ？

まさか……魔界が狙つているのは……

「やうか、その武器、やはりここに……大人しく差し出せば、命までは取らないだろ？……これから魔界が誇る魔王軍が来る！死にたくないれば、神が力を与えた者を差し出せ！ハハハハハ、アッハッハッハッハッハ！イーヒッヒッヒッヒ……」

魔物は、不気味な笑い声と共に……消えていった。

魔王軍、か……

・・・・・

・・・・・

視点・リューネ

あの魔物が消え去った後、すぐに会議が開かれた。

「今すぐに奴らが探ししている者を探し出し差し出すべきだ！」

「だが、魔界が欲するほどの力を持っているのだぞ？」

「それに、その力を使ってこの世界に攻めて来ないとも考えられん！」

「そんなことより、まずは神が力を与えた者を探すべきだ！」

「そうだ！ そいつが見つからない限りこの国は、滅亡だ！」

……神が力を与えた者、か。

リリイも気付いてる筈だ。

魔界が探している者は、ミーであると……アサミネ・ヤオイとは誰のことだ？

ミー……なんで私に隠し事なんてするんだ。

私は、お前のこと……信じていいのか？

・・・・・

視点・リリイ

「静まれ」

父様の一聲で、全ての者が話すのをやめる。
「いつこの時は流れ石と思つた。

「そんな、確証も無い、探す方法も無いに相手を見つけよつ、魔王
軍を倒す事を考へろ………会議は終わつた」

そう言つて、父様は会議室から出て行く。

私とリコーネもそれについて行く。

リコーネは、なにやら驚き込んでもつた。

「はあ……おい、リコーネ」

「……なんだ?」

「奴の言つていたのは、あいつだろ?」

「ああ……」

「なら、まずは聞いて来い

「え?」

「うこうめんどうへやこことは、クリスとかクリアにドも任せとあ
たいものだ。」

「だから、誰かが原因で歎きでゐなり、まずは原因と話して来いと
言つてゐるんだ!」

「あ、ああ」

「とつとと行つて来い!」
「ちはいつで出来る事をある!」
「なんだとイザと話つ時まともに動けないぞ!」

「……わかつた、ありがと!、リコイ」

そう言つて、走つていくリュー・ネ。
面倒なヤツだ。

「ウチの娘も、苦労するな
「父様が王族なんかになるから」「いつなるんだ」
「しようがなくない?」

はあ、とにかく!

クリスとクリアにも話さんといけないし、軍を動かす準備、市民の
安全……やる事が多すぎる!
この怒り、全部ぶつけてやる!!

・ · · · ·

視点 · ? ? ?

暗く、何も見えない場所に……その者はいる。

「神に選ばれし、哀れな人よ……」

その者は、ただ悲しそうに、泣いていた。

「贊とわれし、夢き命よ……」

そして、静かに、眠るよいつて、泣いた。

「汝に、安らぎを……」

外伝・その? (後書き)

メツチャ強そうなのがちがつた。
このお方、誰だじょ?・

ルシ　アー?
サン?

勢いで書けばいいか。

第十八話（前書き）

国対魔界はやめました。

代わりに、ヒロイン（？）勢 VS 七つの大罪（俺流）です。

あと、反則兵器創つてみた。
微妙に伏線です。

考えても答えが出ないので、とりあえず反則兵器を創った。

片手で持てるスイッチ型。

スイッチを押すと大気圏外に巨大な衛星砲が転移され、スイッチを持つ

ている人以外を全て消し去る。

果て見えぬ絶望の園。

スキル、【次元転移】【承認機能】

絶対概念、【存在維持】【存在消滅】

次元転移は、指定した場所がどこであろうと瞬間移動する魔法。

承認機能は、所有者がスイッチを押した時に撃つか撃たないかを決めることが出来る。

コレを決められるのは、設定された者だけ。

存在維持は、その概念を持つていてる限りその存在を消される事が無くなる。

存在消滅は、あらゆる存在を消し去る概念。

防ぐ方法は、存在維持だけ。

うん、反則だな。

承認機能はもちろん俺設定だよ。

とりあえず、ポッケに入れておく。

あ、そうだ、俺の持ち物が無いじゃない。

今度は盗られない様な……盾？

普段持たなくていい、盾……F a t e の熾天覆うう七つの円環？

いいな。

それによつ！

なんか時間もないつぽいし、膳は急げ！

•
•
•
•
•

•

視点・メイドさん

周りを警戒していました。
どうやら来たようですね。

「来ました」

「そうか……クリスさん、軍の方は？」

厳しいどころか、不可能に近いです。
それでもやるんですが、ね。

卷之三

「さあな、ま、レジなら多少派手に戦つても被害はない、全力でミ

「三ツヤを付ねて。」

「ええ、リーシャ殿は絶対に守りましょう!」

三　春の匂いに心が癒され、達也は少しだけ和やかにな
てられないわ！」

「母様は、おいといて……人数は少ないが、私達なら負けはない

！」

姫様は、ミーシャ様の武器？を使って罠や魔法を使つ。
クリス様は、紅い槍を構えて魔界から来たであらう魔王軍を見据える。

クリア様は、青白い大鎌に魔力を注ぎ込んで待つてゐる。

奥様は、ミーシャ様から貰つた鞭と倉庫に仕舞つてあつた呪符を確かめている。

お嬢様は、昨日ミーシャ様が造つた美しい双剣を両手にミーシャ様のいる方を見ていました。

「来ます」

「分かつた、作戦はリリイが森に結界を、クリスとクリアさんと私が迎撃、母様はリリイの護衛、メイドさんは奉制後、ミーの傍に行つて下さい……それじゃあ、始めるか！」

私は、魔王軍の先頭にいた飛んでいる三体を貫通させながら撃ち落とす。

さあ、ミーシャ様に手を出すとどうなるか……思い知りなさい！

・ · · ·

視点・リリイ

結界の維持が難しくなつてきたな……あの三人は大丈夫だらうか？
かくゆう私もミーシャの武器のおかげで、ここまでできるのだがな。
ミーシャの造つた武器はどれも一級品どころか世界に一つと無い伝説上の武器だ。

でも、それを私は使つていいんだな……英雄になつた氣分だ。

だが、魔王の目的とはなんだ？

何故、今頃になつてミーシャを攫いに来たんだ？

分からぬ……情報が少なすぎる！

「荒れてるわね、お姫様？」

「む……昔みたいに小娘ではないのか？」

「あら？ ミー君のお嫁さん候補にそんな呼び方できませんよ」

「私は別に好いてるわけでは……友達として助けに来たんだ」

「そうかしら？ 好きでもない相手の為に命を賭けられる？」

それは…… はあ。

普段はダメ人間の癖に、こうこう時は勝てる気がせん。

「百歩譲つてそうだとしよう……だが、私は姫だぞ？」

「あらあら、ミー君はきっと大貴族ぐらいにはなるわよ？」

……この剣一つで、なれるか？

いや、私達が持つている武器を揃えれば国ぐらいには手に入るな。

「そうだな……でも、お喋りはここまでらし」

魔王軍が、あの三人と結界をつまく越えてここまで来たらしい。だが、こじら一帯はすでに、私とアメリア小母のテリトリーだ。

「そつみたいね……ふふ、それじゃあ

「ええ、それでは

一人で、指を鳴らした。

「「始めましょうか?」」

・・・・・

視点・クリア

結界内の森から爆音が聞こえた。

結界に遮られてるのに聞こえてくるとゆうことは、かなりの大音量

とゆうことになります。

何体か私達を無視して、森に入ろうとしているので、さすがに止め

様が無い。

そして、一体一体が私達人間が決めた魔王級に匹敵するので、油断

できない。

それでも傷一つ負う事無く戦えているのは、やはりミーシャ殿の武

器のおかげでしょうね。

少し数が減っている気が……あれは!?

「リューネ殿!」

「ハツ!……リューネでいい、どうかしたのか?」

「ザコに構つていられるほど余裕が無くなりそうです」

「……ホントだな、クリス!」

空を飛んでいた敵を倒していくクリスが、私達の所に走つて来る。

クリスも随分強くなりましたね。

「何?」

「ボスの登場だ」

そして、私達の前に7体の魔王が降り立つた。

第十八話（後書き）

いけるかな？

俺の文章力がどこまで通用するか……

とりあえず、七つの大罪編？はシリアルスッぽく戦闘多めでお送りしてみたいと思います。

第十九話（前書き）

難しい。

なんでこんなに難しいんだろ？

最初の頃が懐かしい。

そんな経つてないけど。

視点・メイドさん

「た、助け」「

ドオンシ!!

脳とお腹に響く音と共に、人型の悪魔が命乞いをしながら絶命する。これで、6体目。

皆さんが頑張っている御蔭でどうにかなっていますね。

私の戦い方は、この銃を使って少し離れた所から確実に仕留めていく方法です。

それに、この銃を持つと自分の気配が消えて相手の気配が良く分からんですね。

おや、7体目ですか。

ディアズ様の敵は、ここで死んでもらいます。

確実に狙いをつけて、引き金を

「……見つけた」

引いた。

・・・・・

視点・母

さすがにきつくなってきたかも。

「はあ、はあ、はあ……」

「お姫様、息が、上がって、るけど、大丈、夫?」

「そつち、」そ

さすがに数が多くなってきたわ。

ウチの娘は、何をしてるのかしら?

「どう、します、か?」

「降参、したら、見逃して、くれると、思う?」

「降参は、ありえません、が、見逃しては、くれない、でしょう

私、運動不足だわ。

昔は、あの人と一緒に冒険者としてブイブイいわせてたんだけどな

「アメリカ小母」

「小母は、余計よ」

どつやうら今度の相手は別格みたいね。

そして、木の影から出てきたのは

「……あ、なた?」

「久しぶりだな……アメリカ」

ミーシャとリューネの父であり……アメリカの……夫だった。

・・・・・

視点・クリス

七つの大罪。

魔界で最強と言われる魔王の集まり。

その7体のうち3体が森の中。

2体が、クリア。

1体が、リュー・ネ。

1体が、私。

双子なのに……私の方が少ない。

「おやおや、七つの大罪が一人『暴食』のベルゼブブを前に考え方
かね？」

私の前には、大袈裟な動きをする紳士ぶつた青年がいる。
リュ・ネとクリアは、見えない。
結界が何かを張っているようだ。

「別に、関係ない」

「そうかな？なら始めよう……私の見立てでは……君は、我ら悪魔
に対して一対一なら魔王にすら劣らないとみた……まあ、その武器
あつてのことだが、ね？」

ムカつく。

確かに頭に刺せば簡単に死ぬけど、技術は私の。

「ためす？」

「クハハハ……良いでしょー！」一人つきりで楽しみましょー！」

相手が動く前に、先手を取る為一気に懷に潜り込んで、石突きを顎に当てて、胴体を薙ぎ払つ。

ベルゼブブの体が、上と下の二一つになった。

普通なら胴体が離れたら死ぬ筈。

普通なら今ので、終わり。

でも、今回の相手は、普通ではないのだから。

「まさか、まさかここまで速いとは……先ほどまで手加減してましたね？」

上二一つに別れてるのに、普通にしてるのが気持ち悪い。

「さあ？ 今も手加減してるかも」

ベルゼブブの体が、元に戻つてゆく。
邪魔したいが、嫌な感じがする。

「クハハハハハ！ いいですね、では私も、本気でお相手いたしましょー！」

ベルゼブブが、お辞儀をした。

そして、ベルゼブブが……撃き消えた。

・ · · · ·

さすがに、七つの大罪を2体同時は厳しいですね……
動き難そうな服を着た美人と露出の高い服を着た美少女。
見た目に惑わされれば、その場でアウトですか。

「七つの大罪の『嫉妬』のrevyアタンと『怠惰』のリリス……随
分強いですね？」

「あら、意外と博識ね？私は貴女の事を知らないのに……羨ましい
わ」

「早く退いてもらえない？急いでるんだよね」

revyアタンが、巨大な大剣を使つた近距離型。
リリスが、魔法を使つた遠距離型。

魔法に集中すると大剣が、大剣に集中すると魔法が……コンビネ
ションは完璧。

なら、先に狙うのは……リリス！

「フッ！」

「ヤバ

」

青白い大鎌を横薙ぎする。

「…………イとでも？」

「なつ！？」

リリスの背中に、翼が生え空へと飛ぶ。
そして、リリスは上空から魔法を放つ。

「クッ！？」

当たりはしなかつたものの、私はバランスを崩し、一瞬の隙が出来る。

「しま
」

「さよなら、名も知らないお嬢さん」

レビュアタンの持つた巨大な大剣が、振り下ろされた。

・
・
・
・

視点・リリィ

アメリカ小母は、あの男どこかに消えてしまつたし。
入り口の三人も奥のメイドもかなり強い……恐らく魔王と戦闘中。
で、ミーシャのいる工房に向かっている残りの魔王軍は、全て私。
どれか一体でも通したら、ミーシャが連れて行かれる可能性がある。
つまり、一体も通さずに全滅させて、まだ戦っている所に行かない
といけない、か。

おもいつきり貧乏くじだな……終わつたら、ミーシャに甘い物でも
奢らせるかな？

右手の輝く聖剣を油断無く構える。

「さて、この先に行きたいのだろう?」

友達……いや、好きな奴の為に……

左手の杖に魔力を込める。

「なら、私を　　」

何とかするか！

腕輪から出る糸を張り巡らせる。

「殺してからにじろ！..！」

そして、死闘が、始まった。

・・・・・

出来た！

兆速で創つたぜ！

俺流、熾天覆^{ロウテンフ}う七^{セブ}つの円環！

完全防御版だああ！！

スキル、【自動防衛】【自動再生】【体内保存化】【魔力貯蓄】
【魔力自動生成】

上位の概念、【魔術吸收】【魔法吸收】【気配察知】

絶対概念、【加護】【守護】【最適化】

自動再生は、使っていない間に大気中の魔力を使って自動で修復されていく。

体内保存化は、武器、防具、装飾品などと違い持たなくていい。ただし、使う際は名前を言わなければいけない。恥ずかしがつたら使えません。

魔力貯蓄は、常に魔力を貯め続ける。

容量は、ほぼ無限。

魔力自動生成は、常に魔力を創り続ける。

魔力量が限界を超えるとこの概念をつけた物が壊れる。

加護は、所有者に対しての遠距離型の攻撃が全て外れる。

魔術や魔法、弓矢などが当たらなくなる。

守護は、所有者に害のあることを遮る。

マグマの中や海の中で呼吸することが出来る。

最適化は、所有者のもつとも快適な温度を保つ。

どれだけ熱い所だろうと、どれだけ寒い所だろうと、常に一定の温度でいられる。

花弁1枚で、魔王つながりのディ ガイアの魔王様の奥義であるメテオ ンパクトを防げる。

原典より守りは完璧！

……盾だから攻撃は出来ないけど。

ん？なんか外が騒がしいな……なんだ？

もしかして、もう来たのか！？

ヤバイヤバイヤバイ！

どうしよう！？

オロオロしていると後ろに気配が……終わつたかも。
ん？でもたしか、ここにいるのって……俺と

第十九話（後書き）

最後の誰かマル分かり。

だが、あえて聞こう！

おじいちゃんと七つの大罪の一人のどちらがいいか！

考えるのがめんどくさいとか、そんなこと無いよ？

第一十話（前書き）

まだまだ続きます。

メイドちゃんの相手が酷い。
メイドちゃんは、強いんだよ？

正直、めんどくさくなつてきた。

視点・リューネ

今、私の前にいるのは、タキシードを着た二十代後半ほどの男性。だが、その身から放つ魔力はとても大きい。

「七つの大罪の『憤怒』たる我、アストラルが貴殿の相手をつとめよう」「それは、光栄だな……」

アストラル……地獄の魔神にて復讐者。

紅い、真紅と言えるほど紅い炎を手と足に纏っている。危険だ、たぶん、私では勝てるか分からない。だからといって、退くことなどできるはずもない。ゆえに、私が取るべき行動は……攻撃あるのみ！

「フツ！ ハア！ ……」

一気に間合いをつめて、右手の輝く白い剣を一閃させる。

「紅蓮剣！」

アストラルは、手に纏っていた炎を伸ばして、剣の様な形を創る。その炎の剣で、私の放った斬撃を受け止める。

「なかなか良い剣を持っている様だ……それ以外は、大した事無いかな？」

剣が良いのは当たり前だろ？

ミーが！私の為に！造ってくれたんだぞ！
だが、剣だけ、とゆうのは気にくわんな。

「……良いのは、剣だけじゃないぞ？」

左手の禍々しい黒い剣を地面に突き刺す。
詠唱破棄しながら唱える。

「ダークネス・グレイブ！」

黒い剣から闇が溢れだして、地面に広がり、槍の様に突き出す。
無数の闇の針が、驚愕したアストラルを突き刺す。

コレで終わらない事は分かっている。
だから、追撃をかける！

「シャイニング・レイ！『ティバイン・ライト・ホーリー・ジャッジ
メント！』

上級の光の魔術を詠唱破棄しながら、放つ。
上から、下から、正面から、アストラルを光が包み込み、爆発する。
爆煙のせいでも見えないが、ダメージはあるはず。
倒せた、とは……思わない。

「あ～イタイイタイ、血が出てるじゃないか……クソが！」

アストラルの顔には、余裕が無くなり、代わりに怒りが広がつてい
た。

着ていたタキシードは、ボロボロになり、所々血が出ている。

「 もつゆるせねえ…… 消し炭 一つ残るト思ウなコオオオ ! ! ! 」

先ほどまでの紅かつた炎が、黒に、それこそ闇の炎と言えるほどに黒く染まっていく。

傷が燃えたと思ったら、既に塞がっていた。

なるほど、これが、憤怒たる所以、か。

怒れば怒れるほど、その力を増す。

先ほどまでは、離れているだけで平気な筈だったのに、今は、かな

りの熱が伝わってくる。

正直、アレをくらつたらホントに消し炭も残らないかもしねれない。だが、私は、ミーの為にも……

「 やりわれわけには、いかんのだ ! ! ! 」

「 黙れ、『娘ガアアアアア ! ! ! 』

・

・

視点・母

「 何年ぶりだい ? 」

「 …… 8 年よ 」

「 そうか 」

今、私の前にいるのは、ミー君やリューちゃんの父親。そして、私の……

「 どうした ? 」

「 …… いえ、なんでもないわ 」

あの人は、死んだ。

分かつてる。

きっと、「コレは、あの人じゃない。

「二人は、元気か?」

「……ええ、元気すぎるわ」

「僕には、あまり時間が無いんだ」

「……そう」

「だから、せめて最後にミーシャに会わせてくれないか?」

「……」

この人は、違う。

「……」

「? アメリ」

「消えなさい!」

鞭を放つ。

鞭が撓り、顔を碎いた。

「……ばれたか……何故分かつた?」

「知らない筈なのよ……ミーシャの名を……」

そう、知らない筈なのだ。

この名前は、あの人気が死んでから名づけられた名なのだから。

「許さない……あの人にはけて、ミー君を狙つなんて……」

「グハハハ、見抜けない方が悪いんだよ!」

体が軋み、服を破いてその真の姿を現す。

「俺様は！七つの大罪が一つ！『色欲』のアスモデウス様だ！…」

「色欲、ね……良い男に化けるしかない貴方にピッタリね？」

アスモデウスの姿は、醜い。

牛・人・羊の頭とガチョウの足、毒蛇の尻尾、手には軍旗と槍を持っている。

「貴方みたいなゴミと、あの人を一瞬でも間違えた私を殺してやりたいわ」

「言つなあ～人間……貴様はこれから、この俺様に心も体も蹂躪されるのだよ！グハハハハハ！」

「そう……でも、私……」

鞭と残りの呪符を構える。

「貴方じや、満足出来そうにないわよ？」

・

・

・

視点・メイドさん

「はあ……はあ……はあ……」

「よくもつた、と言つたところ、か」

もう、立つことすら出来ません。

そんな、這い蹲る私の前に立つのは、漆黒の五対十枚の翼を生やし

た、かなり達観した雰囲気の美青年。

ただ、そこに立っているだけで、跪いてしまいそうな、存在感。

「ぐ……これが、最強の魔王と、呼ばれる力、ですか……」
「そうだ、な……最後だ……もう一度名乗っておこう、七つの大罪が
一柱……『傲慢』にて明けの明星、ルシファー……人間の女よ……
汝に、敬意を表そう」

私も、運が無いですね……

気配を消しても、心臓の音で気付かれる。
罠を仕掛けても、全てが消し飛ばされ。
攻撃は、当たる前に止まってしまう。

ルシファーが、掌を向ける。

その掌に、一重二重の魔方陣が展開される。

「ミーシャ様……申し訳……ありま、せん

魔方陣が一際輝いた。

「最後ぐらい……あなたの、お顔を見た、かつた……です
……ミー、シヤ……様」

ほんの僅かに、頬に、涙が流れた。

・ · · · ·

視点・リリイ

「もう……動けん」

私は、地面に大の字で、ねつころがる。
私の周りには、バラバラな悪魔の死体が数十体転がり、悪魔の血が
水溜りの様になっている。
血臭が凄い事になっている。

そんな私も満身創痍のボロボロの状態なんだがな。

「死ぬ……」のままだと、死ぬ

腕や足にある傷から血が出ていく。
ミーシャから貰つた杖の固有魔法、再生の流水によつて何とか凌いでいる状態。

ただ、魔力は消費していくので、魔力が切れたらと思うと……ゾッとする。

まあ、消費した分だけすぐに回復するのだがな。

「だれか~助けてくれ~」

……誰もいないか。

まだ、戦闘している様だ。
暇だ。

剣の鞘はどこだあ~?

杖と剣と糸の出る腕輪は、手元。
ナイフは、体一つ分向こづ。
扇は足元。

鞘は……真横にあつた。

「一応、私は姫なんだぞ~」

そう言いながら、剣を入れる為に鞘を、手に取った。

第一十話（後書き）

姫さんだけ、シリアルスパートを抜けました。
これから頑張る予定です。
もう頑張つたけど。
もっと頑張つてもらいます。

七つの大罪の最後、強欲なんだけど……マンモンとベヒモスどっち
が良い？

俺としては、どっちを選んでも内容が変わるから選びたくない。
俺に選ばせると、名前が出る前に殺す。
それでも良いなら、読むだけにしてくえ。

/// 何どつなつた？

第一十一話（前書き）

戦闘描写、苦手だわ。

無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理。

戦闘いやあ

もう終わらせたい。

あと、シリアル嫌い。

嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い

シリアルがどんなものかあまり知らないが、こんな感じだろ？

第一十一話

視点・クリス

ベルゼブブがどこにいるか分からない。
見えないわけでは、ない。
どれが本体か分からぬのだ。

『さあ、貴女の全てを私にぶつけて下さい。』

ベルゼブブ……七つの大罪が暴食、そして、蠅の王。
消えたと思ったら、米粒サイズの蠅が集まって、7体のベルゼブブ
になつた。

どれが本物か、それとも、あの無数の蠅の一匹が心臓の役割をして
いるのか。

『どうしたのですか！攻撃が止まりましたよ！』

……考えるのは苦手だ。
私は、考えるのをやめる。
魔王に対する恐怖も、消す。

思考を……

感情を……

戦つことに必要な無いものを……

消した。

『この感じ……まさか！？神に力を『えられた者は、この力すら支配できるのか！？』

ベルゼブブが、驚愕している。

でも、私は何も感じない。

ただ、この手元にある槍で……

目の前の敵を……

「殺す」

・・・・・

視点・クリア

「う、嘘でしょ？あの体勢で……」

「受け、止めた！？」

「シツ！」

「グア！？」

隙だらけになつていた腹部に、蹴りを叩き込む。流石に効いたのか、膝をついている。

私はその間に、自分の状態を確認する。

無理な体勢で受け止めたから、衝撃を逃せなかつたので、左腕が重傷。

無理矢理動かせば、一回ぐらい動かせるだろう。

体はボロボロだが、動かないわけではない。
これなら、いけるか？

「チツ……レビューアタンーとつとと終わらせるぞ！」
「ええ、もう甘く見ない……確実に、殺す！」

これだと、油断が無い、ですか……
まあ、二対一には、馴れています！

「ダーク・アロー！ ブラック・セイバー！」

百の黒い矢と三十の黒い剣が、私に襲い掛かる。
その全てを紙一重でかわしていく。

何故か魔力が消費されていくが、その代わりに身体能力が圧倒的に
上がる。

自分の動きがより速く、より力強く、より正確に、進化していく。

「でえやあああ！……！」

レビューアタンが、大剣を横薙ぎに振る。
回避は……間に合わない。
なら！

「サイレン+
沈黙誘う」

私は、ミーシャ殿のくれた説明書の様に大鎌を水平に構える。
技名を言うのも忘れない。

私が死ぬか、相手が死ぬか……勝負！

「ワルツ
円舞曲！……！」

「なんかヤバ！？」

大剣と大鎌が、ぶつかり合い、その衝撃で地面が崩れ、抉れ、震える。

何も無い空間で、ビシッ！とぬう音が聞こえた。

相手の張った結界が、衝撃に耐えられなかつたんだろう。

「なんで、なんで
人間なんかがあああああ
！！！」

「貴方達とは……生き方が違うんですよおおおおおおおお……」

衝撃が、より強力になり、私とレビューアタン以外のモノを全て吹き飛ばす。

そして、
結界が……碎けた。

A 3x3 grid of nine black dots, arranged in three rows and three columns.

視点
・母

ゴオン！！

私は、その爆音を聞きながら、森の中を走る。

「チツ……意外としぶとい……いえ、しつこいと言つた方が良いかしら?」

「クソ！ 一体何枚持つてるんだ！？」

爆破の呪符は、今まで最後。

さすが魔王……この程度じゃ死んではくれない、か。
今、この時までに仕掛けたトラップの数は、二百。

そのうち、百八十七は、もう使った。

鞭だけだと、キツイよねえ~

「もう我慢ならん~捕らえて楽しもうと思つたが、限界だあ……森
~と消し飛ばしてやるわあ~！」

「意外と早いのね? そんなんじゃ女を満足させられないわよ?」

「ダマレH H H~!~」

アスモデウスは、その三つの頭から炎を吐き出す。

その口から放たれる炎は、森を燃やし尽くすように広がってゆく。

「あ~やばいかも」

さすがに、あの炎をビリビリができるアイテムは……無い。
ここに終わりの様だ。

「はあ……せめて、ミー君と、ちゃんとお話し……したかったなあ~」

炎が目の前まで迫り……炎が、割れた。

「え?」

炎が、何故かアメリカを避ける様に広がり、消えた。
そして、アメリカの前に一つの背中があつた。

間違えることが出来ない、その背中は、昔よく見た……愛した人の、
背中だった。

ただ一文字……その服の背中に、書かれた一文字……愛。

「……うそ」

「残念、ホントだよ……マイ・ハイ~?」

「「」の、無駄にかつこつけた言い方……間違いないわ
「酷いな……でも、もう偽者ごとに惑わされないだろ?」

少し青みがかかった銀髪。

性格を現す様な、明るい赤の瞳。

ミーに似た、整った顔立ち。

本物だ。

間違い無い。

「レイ?」

「ああ、君の旦那、レイだよ……そうだ、あいつ消したら……キス、
してくれな?」

「……帰れ」

「あれ!? そこは恥ずかしがりながらも承諾するといふだろ!…?」

今がどんな時かも知らないで……死ねば良いのに……もう死んでる
か。

「なんだキサマアアアア!…」

「ん? フツ……貴様!」ときた名乗る名は無いが……して言つながら、
正義の味方、だ

「人間ゴトキガアアアアア!…!…」

「人間? 違うな……今は……」

アスモデウスが、もつていた槍でレイを突き刺そうとする。

普通なら、あの怪力と見た目に似合わないスピードのせいでの避け
る事が出来ない様な攻撃。

「動く、屍だ」

アスモデウスが突き出した槍の上に、乗っていた。
それこそ、見えないほど速く。

ポーズを決めながら。

アレが無ければ……まあ、そこも良いんだけどね?

「悪いが、時間はかけない……七秒、それがお前の、最後だ」
「舐めるナアアアアアア……」

・・・・・

視点・メイドさん

何時まで経つても、攻撃が無い。

「……な、ぜ?」

「……終わったようだ……また、会えるのを楽しみにしていろ」

そう言って、ルシファーは、靈の様に去つて行く。

終わつた?
まさか!?

「ぐ……コホッ……ミーシャ、様」

まともに動く事は出来ないが、這つてミーシャ様が居る筈の工房へ
向かう。

全身が、引き裂かれる様に痛む、骨が軋み、血を吐く……それでも、
進む。

大切な人の、守るべき人のいる場所へ……

第一十一話（後書き）

母、戦闘から解放。

旦那出してみた。

バカは死んでも直らないって言つのを体現してみた。
母が間違えた理由は、死ぬ時に偽者みたいな感じだったから、とか
で。

姉上とか、どうじょう？

姉上も……魔界、連れてく？

そして次回！ どうじょう！ ——君が！ ？

どうなつちやう！ ？
てかどうじょう！ ？

第一十一話（前書き）

徐々につまくなつてゐる……といへな。

楽しんでつて。

早く終わらせたい。

視点・リューネ

「モエツキロコムスメエエエ！」

「くつ！ 全てを遮り、我が身を守れ！ 全能なる守護の盾！」

イージス

七色の薄い円形の障壁が現れる。

アストラルの炎を逸らす。

さすがに、強い。

攻撃は怒りに任せたゴリ押し。

何とかなると思ったが、冷静さが無い分、本能で行動している。

そのせいで、こちらの攻撃が当たらない。

しかも、当たると思った攻撃は、全て炎に遮られる。

これが憤怒の魔王の力。

「それでも！」

全力で剣を振り続ける。

その剣戟は、美しく、剣武から剣舞へ……

黒い炎の中で、白と黒の双剣を振り、舞う姿は、まさしく戦乙女。武器の力かもしれない、本人の素質かもしれない……どうしても、その強さは、本物だった。

どれだけ体を酷使しようと、剣が一瞬で最高の状態に戻す。どれだけ魔力を使おうと、剣が一瞬で全快の状態を保つ。

「ライト・ランサー！ ダーク・スラッシュ！」

輝く突きを放つ魔法。

飲み込む斬撃を放つ魔法。

アストラルに当たる前に消滅する。

だが、それは計算通り！

「闇を切り裂き、光を喰らえ！双破の衝撃！！」^{クロス・ブレイク}

この二つの剣があつてこそ出来る、合成魔法。
双剣の斬撃を同時に飛ばす。

純白の斬撃が黒い炎を切り裂く。

漆黒の斬撃がアストラルの心臓付近に当たる。

相手が斬れるわけではない。

ただ、魔剣の斬撃が、当たった。

「グッ！？」、「コノ、ワ！」

「はあ、はあ、どうだ？この剣の力は？」

「マ、マサ、力！？」コノ、チカラ、ハ……カミ、ノ……ガアアアア
ア……！」

黒い炎がアストラルを包み、消え去った。

魔剣、魔界の戦乙女。

斬れるわけではない。

ただ、相手の存在を消しただけ。

まあ、心臓辺りに当てないと、ただ叩きつける剣だからな。

森の方から爆音が聞こえる。

嫌な、予感がする。

早く行かないと！

走り出そうとしたら、倒れてしまう。

「あ、れ？」

どれだけ力を込めても、立つ事が出来ない。

いくら体は無傷と言つても、血はそう簡単に元には戻らない。

「ぐ、そ……」

動くことが出来ず、ただそこに伏せる事しか出来ない。
そんな自分が……赦せなかつた。

そこで、何も無い空間にひびが入り、砕け散つた。

そこから現れたのは、クリアと悪魔らしい翼を生やした美少女と…
・巨大な、怪物だつた。

・

・

・

視点・クリア

結界が破れたと同時にレヴィアタンが真の姿を現す。

『貴女は、絶対にコロス…!』

その姿は、巨大で、蛇の様だつた。
だが、その内に秘めたチカラは、次元が違つた。
唯一つ思うことは、勝てない。
ただ、それだけ。

「死ぬかも、です」

逃がしてくれそうにありませんし、誰かが助けに来てくれるまで、頑張りましょうか。

ふと、視線を横に向ける。

そこには、倒れて動けないリューネ殿がこちらを見ていた。

「……」

「……ごめん」

負けるわけに、いかなくなつてしましました。

大鎌を構える。

『シネエエエ！』

その巨大な尻尾で薙ぎ払つてくる。

と、ここで思い出した。

受け止めるだけの力が、腕に入らないことに……

レビュイアタンの巨大な尻尾が目前に迫つている。

コレは、無理だ……そう思つたら、一つの影が迫る尻尾の前に現れ、その尻尾を受け止めた。

「クリ、ス？」

いつも見慣れた筈のその顔には、一切の感情が無く、何も感じ取れなかつた。

『ジャマヲ、スルナアアア！』

レビュイアタンの口から巨大火球が吐き出される。

クリスは、その火球に自分から飛び込み、薙ぎ払つた。

「チャンスは、今だけ……なら……」

私は、クリスに注意の向いたレヴィアタンを凍らせようと近付く。

「レヴィアタンは、やらせない！」

「私も、あのお嬢さんの相手は遠慮したいのでね……」

「……結局一人なのですか」

リリスとクリスと戦っていた筈のボロボロの青年。
構えて、一気に突っ込む。

大きく弧をえがきながら大鎌を振り回す。
魔力を込め、大鎌から冷氣が溢れる。

「右手だけですが……失礼します！」

・
・
・
・

視点・メイドさん

「グツ！？ガハア！……ハア、ハア……ミーシャ様！」

工房の前まで何とか来た。

ここまで来ると、血が流れすぎたのか、痛みが無くなり、全身が
痺れ、視界が霞む。
それでも、声を出して名を呼ぶ。

「……来て、しまったか」

「あ、あなた、は……」

「すまんな……」
「うつするしか、ないんだよ」

工房から出でたのは、氣絶したミーシャ様を抱えた、この工房の主。

ミーシャ様が、嬉しそうに語る」とある御方。

「どう、して……」

「それは、私が七つの大罪が真の《憤怒》であり、魔界の支配者たる、魔王」

興味がわき、一度調べたことがあった。

その結果、この国に、初めからいた……それだけしか分からなかつた。

いつから、この工房を建てたのか、この工房でなにをしているのか、分からなかつた。

でも、ミーシャ様があそこまで信頼しているなら、そう思つてた。ミーシャ様は、悪意のある方々に対し、過剰に反応する。

だから、大丈夫だと思つていた。

「サタンだからだ」

「そん、な……」

「……ミーシャ・ラクロワンド・アルテミシアは、貰つて行く」

そう言つて、サタンが私の横をすりぬけて行く。

私は、無理矢理動かない体を動かして、立ち上がる。

「やめておけ……その体では、もう無理だ」

「……それ、で、も……ミー、シャ……様、を……かえ、して……も

うつ……」

血が飛び散るのも無視して、一足飛びに眼前まで近付く。

が

「ガハアッ！？」

私とサタンの間に、一つの小さい影が現れて私に蹴りをして邪魔をする。

その一撃で、完全に動くことが出来なくなってしまう。
小さい影は、ミーシャ様と同じぐらいの少年の様な黒髪赤眼の存在

だった。

断定することが出来ないのは、もう完全に目が見えなくなり始めて

いるからだ。

その存在は、私に止めを刺そうと腕を振り上げる。

「やめろ」

「はい、サタン様」

「……行くぞ」

「はい」

そう言い残し、気配が無くなる。

「あ……う……み……しゃ、た……あ」

もう、動くことも、喋ることも出来ない。

血が流れ、意識が朦朧として、ただ、涙を流す。

何も出来ない無力感、それだけが全身を満たし、ミーシャの安全、
それだけが脳内を廻っていた。

・・・・・

視点・リリィ

何か、嫌な予感がした。

だから、ミーシャがいる筈の工房に走る。

そしてそこには……

「シルビア！？大丈夫か！？」

ボロボロで虫の息のアルテミシア家のメイド、シルビア・レーベン
だった。

「しつかりしろ！何があつた！」

なるべく傷口を刺激しないように、話しかける。

再生の流水で、傷を塞ごうとするが、余りにも酷すぎて間に合ひつか
分からぬ。

「…………う…………あ」

「くそ！これでは間に合わんか！」

今ある魔力を使い切るつもりで回復しているが、命を繋ぎ止める事
は出来ても治す事が出来ない状態。

軽く回復する程度の魔法じゃなく治癒専門の魔法でないと……
背後に気配が現れ、振り向いた。

「お姫様に……シルビア！？」

「シルビアって誰だ？」

そこには、アメリカ小母と服の変わったあの男がいた。

第一十一話（後書き）

アストラルは、死んだのか?
サタンが生き返らせるとか。
……それでいいか。

姉上TUEEE!

クリアかわいそす。

クリス呪いで暴走中。

メイドさんYABEEE!

リリイ薄。

母、勝手に戦闘終了。

次回、七つの大罪編終了！？
お楽しみに♪

第一二三話（前書き）

無理矢理終わらせたあああ！！

魔界編、どうしよう？

魔王と仲良くなるでいいか。

第一二三話

視点・クリス

敵が何時の間にか、大きくなっている。
でも、どうでもいい。

ただ、殺すだけ。

ホントは硬いであろう鱗は、槍が当たる度に砕け、飛び散る。

『ナンデ、ナンデ人間に……こんなチカラヲーにくイ、二くイ、二くイイイイイイー！』

私を噛み碎こうと、口を開けて突っ込んでくる。
私は、その顔に槍を叩きつけて、地面にぶつける。
そのままその顔に乗つて、槍を向ける。
あとは、刺せば終わり。

『こロシテヤル、殺してやる、コロシテヤル！』
「あなたじゃ、無理」

そして、槍を

・
・
・
・
・

視点・クリア

リリスの魔法は厄介ですが、避けられないわけではないので無視し

て良いでしょ！」

まずは、あの男から！

地面が抉れるほど強く蹴つて、青年の真後ろに回つ」む。

その勢いを乗せて、大鎌を横薙ぎする。

「顔が同じなので、もしやと思いましたが……やはり速いですか」

その言葉と共に、青年が無数のハエとなる。

「ハエ！？ ベルゼブブか！」

「おや？ あちらのお嬢さんは、驚かなかつたのですが……もともと感情が希薄だつたのですかね？」

「む、驚いたわけではありません、気持ち悪かつたんです」

「おやおや、それは失礼」

「ベルゼブブはともかく……アンタおかしいんじゃないのか！？」

のんびり会話してゐる様に見えて、実はリリスの雨の様な無差別魔法を避けながら会話してます。

ベルゼブブの方は、障壁を張つてゐるのか、当たる前に消えてます。羨ましい。

こつちは時々当たつてゐるところに……
まあ、当たる前に凍らせますが。

「それにして……本当に良い武器を持つていらつしやる」「
ま、まあ、優秀な子が造つてくれましたから……当然です！」

「ククク……顔が赤いですよ？」

「黙りなさい！」

「……私、いらなくない？」

リリスが何か言つていますが、無視です。

顔が赤くなるのはしょうがないじゃないですか、……大体が、可愛すぎるんですよ！

あの少し潤んだ瞳から上の目遣い！
うまく喋れないから、何とか自分の言いたい事を伝えようとする健気さ！

小さい手足で、一生懸命動く變らしさー。
……最高です。

おや、魔法がやみました。

「ククク……わし、お話はコレぐらいで良いでしょ！」

「そうですね……もつ、終わつです」

「それはひづりの、なにー？」

驚いてますね。

こちらが、魔法を避けつつ、ベルゼブブの足元を凍らせていたことに。

「クッ！だが、足だけならー！」
「でしょーね……アクセセル加速！」

ミーシャ殿に教えられたその言葉と共に、私の体を紅いオーラが包み込む。

自分でも驚くほどの加速と共に、一瞬でベルゼブブの前に現れ、大鎌を腹に突き刺す。

刺された所から、どんどん凍つっていく。

「貴女と聞こ、あのお嬢さんと聞こ……切り札が多すぎでしょ！」

その言葉と共に、ベルゼブブの全身が凍りつく。

「ベルゼブブが、やられた！？」

「時間はかけられません……一瞬で終わらせます」

「ク、クソ！」

リリスの放つ魔法を加速しながら避けて、近付いてゆく。
どちらが魔王か分かりませんね。

かたや必死に魔法を放つ。

かたや紅いオーラを纏つて余裕で、圧倒する。

……私は魔王じやありませんよ？

そして、大鎌を

・

・

・

・

視点・母

レイがアスモーデウスを倒して、なんだかミー君が心配になつた。
それで、工房に来てみれば、シルビアが死にかけで、お姫様が何とか治そうとしている、そんな場面に出くわした。

「シルビア！ 酷い怪我……確か治癒の呪符があつた筈ー！」

「だから、シルビアって誰？」

「結局、お前誰だ？」

「フツ……聞いて驚け！ 俺はアメリカの夫にして

「あつそ」

「聞いといて酷くね！？」

お姫様とレイが漫才してるが、今はシルビアの治療に専念する。

治癒の効果のある呪符を、シルビアの傷にかざす。
呪符から光が溢れ、シルビアの傷を治してゆく。
コレなら何とか……

「う……おぐ、さま?」

「喋らなくていいわ……少し待つてなさい、すぐに治してあげるか
ら」

「ミー・シャ、様を……御守り、できま、せんじ、た」

「……レイ、工房の中を見てきて」

「工房内に気配は無い」……もう、誰もいない

「そう……誰もいない?」

なら、工房の主である、あのおじいさんは?
そういうえば、名前なんて言つたかしら?

「サ、タン、です」

「え?」

「なんだと!?」

「サタン?」

「あの、工房の、主は、サタン、です」

じゃあ、ミー君は……

「お姫様、レイ、あの三人のといひ一早いー

「分かつた!」

「りょ、了解!」

お姫様とレイが、一緒に走り去つて行く。

「私は、守れ、なかつた……それが、辛い、です」

「そう、なら次はしつかりしなさい……連れて行かれたなら、取り返しなさい」

「……はい」

間に合つかしら……

いえ、間に合つてくれないと困るわ。

絶対に……

・・・・・

・・・・

・・・

視点・リューネ

クリスとクリアの二人が、止めを刺そつと武器を振り上げた時、その声が聞こえた。

「そこまでだ」

その声には、威圧感が……

その声には、圧迫感が……

その声には、苦しみが……

「目的は、達成した」

その言葉と共に、残っていた魔王達の足元に魔方陣が現れる。
アレは……転移魔法！？

「！」の子は、預からせてもらひ

その声が、上空から聞こえた。

上を向くと、そこには……リーシャを抱えた、あの工房のおじこさんがいた。

「……なんで、貴方がミーを抱えてる？」

「……私が、サタンであり、魔界側の者だからだ」

ナムス・ナムス・ナムス

サタンの周りに、二つの魔方陣が現れる。

ミーを転移する為。

そして、魔界の襲撃は終わり、一人も死ぬことなく……敗北した。ミーシャは連れて行かれ、どうなつたか分からぬ。だが、一人の男がある事を言つた。

第一二三話（後書き）

駄文？なのは、ほら、俺ですから。

もしかしたら、良いと言ってくれる人がいるかもしれないのに、駄文に？付けてみました。

無駄な努力です。

魔界編、頑張ります。

外伝・その？（前書き）

なんだかなあ。

……なんだかなあ。

一言。

どうしてこうなった？

外伝・その？

視点・リューネ

ミーが、連れて行かれた。

私は、ただ……連れて行かれるのを見ているだけしか、出来なかつた。

「遅かったか！」

「やべ、怒られる」

森の方から、二人の気配が出てくる。

だけど、私には、もう、何の意味もない。

ミーがいない。

それだけで、何もする気が起きない。

「……リューネ」

「リューネ？ ジャあ、お前、があの時の！」

「姫、それ、誰？」

「ここを通った魔王が、そんな顔でしたね」

それを聞いた瞬間、私は動き出していた。

体が悲鳴を上げるが、魔王かもしれない男に双剣を全力で振りかぶる。

「あぶな！？」

「私を、私を……私を魔界に連れて行けええええーーー！」

アストラルと戦った時ほどの美しさも、力も、技術も無く、ただ、

執念だけで剣を振る。

だが、男はその攻撃を簡単に避ける。

「クソ！クソ！クソ！クソ！クソ！」

「……何をそんなに焦つてるんだ？」

「貴様なんかに、分かるわけがないだろお……」

「……そうか、い！」

男は残像を残し、私の鳩尾に拳を沈めてくる。

「あ……」

全身の力が抜け、崩れ落ちる。

声も出すことが出来ず、動くことも出来ない。

「何を勘違いしてるか知らないが、とりあえず言つておく……俺は魔界側じゃなく、天界側だ」

天、界？

・

・

・

視点・リリイ

天界ね……

とりあえず、リュー・ネの安否を確かめる。

うん、大丈夫そうだな。

「天界？」

「では、天使なのですか？」

それはないだろ?

バカだし。

「あ～天使ではない、つまりだな……あれ？」

「お前のことはどうでもいいから、天界は何故お前を送つてきたんだ？」

「どうでもいいって……えつと、ミーシャを守る様に言われてたんだよ、他にもなんか言われた」

なるほど、しかもこいつはアメリカ小母の夫らしいし……死んでいる筈だから……

「つまり、お前は天使によつて、肉体を『えられて、ミーシャを守りに来たと、そうゆう事か？」

「おお！ そうだそうだ！ 頭良いな！」

お前がバカなだけだろ。

「お前がバカなだけだろ？」

「おバカ」

「バカですね」

「バカ認定！？」

だが……何故、天界はミーシャを守らつとしている?
しかも、自分達で直接守らざるに……

「天界の目的は……なんだ？」

「ああ、それならミーシャの肉体に神を降臨する」ひだ

「……は？」

神を？

ミーシャノ肉体に？

ん？何か引っかかるな。

「……ミーシャ自身はどうなるんだ？」

「そういう話だと……」

「魂や人格は……」

「消えるらしいぞ？」

……自分の息子だろ？

なんで協力してんの？

「！」のままだと、一度と会えないからさて折角なら会いに行こうと思つて……

「バカは死ね」

「消える」

「むしろ殺します」

「ハツ剥きにしてやる」

おお、リューネも生き返つたか。

四対一ならどれだけ強かろうとやれるだらつ。

「え、あの、待つてくれない？リューネ？俺はお前の父だぞ？いいのか！」

「私の家族は、三人……ミーとメイドさんと母様だけだ」

「えええ……な、なら俺が死んだ理由を教えてやる！お前の後に息子が娘のどちらでもいいから生まれたら、一緒に旅に出ようと思つて

つたんだよ！そしたら、何故か薬を盛られてな……たかがドラゴンの生息地に行こうとしただけなのに……」

むしろ死んでよかつたんじゃないか？

最悪、ミーシャが竜の胃袋の中だつたかもしれないんだぞ？

「まあ……」

「とりあえず……」

「その命……」

「神に返して来い！」

四人で、同時に攻撃する。

だが、強さはあちらの方が上らしく、全て紙一重でかわされる。

「ま、待て！ もう一つ情報があるー！ ミーシャについてだ！」

その言葉に全員が動きを止める。

いつでも斬りかかる様に、構えは解かない。

「ふう……魔界は神を降臨させない為にミーシャを誘拐した可能性がある……だから、死んでない筈だ」

「だが、ミーシャを殺せば神の復活など不可能になるのでは？」

「死んだら死んだで、新しい神の器が生まれるらしい」

なら、ミーシャは魔界にいる限り、安全なのか？

「で、ここからが俺の本来の目的だ……天界側の者としてでなく、な

かつてつけてるようだが……

「キモイ」

「……お前達を鍛える為だ！」

無視したか。

……鍛える？

「たしかに、お前達は人間からしたら最強とすら呼べるだろ？……

だが、天使や悪魔には勝てないだろ？？」

「魔王軍の三分の一倒した」

「レビュイアタンとベルゼブブを圧倒した」

「レビュイアタンには負けそうでしたが、ベルゼブブを倒してリリスを倒す瞬間でした」

「アストラルを倒したぞ」

「……天使には勝てないだろ？？」

言い換えたか。

だが、こりして言葉にすると、以上だな。

前の私なら魔王級にすら梃子摺る筈だったのにな。

「そこで！俺が鍛えてやろう！」

「遠慮する」

「帰れ」

「さよなら」

「消え失せろ」

「……お、俺が、鍛え、て、やうう！」

泣きそうなんだが。

強いのは分かる。

だが、そんなことをしてゐる暇は……

「それがいいわ」

「アメリカ小母?」

「母様、それにメイドさんも」

森から出でてきたのは、シルビアに肩を貸すアメリカ小母だった。

「小母は余計よ……魔界がミー君に危害を加えないなら、少しでも強くなりなさい」

「ですが!」

「守りたいんでしょ?」

……相変わらず、カツコイイな。

旦那と違つて。

「取り返して、守り抜ける位……強くなりなさい」

「……わかりました」

「了解」

「アメリカ殿が言つなら」

「これが……人望の差、か

強くなる。

そうすれば、ミーシャを守れる。

「なら、一年……その間に今より強くしる」

「……いいだろ?一七つの大罪如き秒殺できる様にしてやるー。」

ミーシャ、必ず、迎えに行くからな?

……あ、私、姫じゃん。

忘れてた。

そして、ミーシャを助ける為の特訓が始まった。

外伝・その？（後書き）

レイの旦那がバカだ。

七つの大罪瞬殺フラグが立つた。
ま、いいよね。

外伝だし。

第一十四話（前書き）

魔界編、はつちやけんめい。

自重はしない。

後悔とい反省はある。

第一十四話

知らない天井だ。
体を起して、周りを見渡す。

「あ、起きたよ！」

そう言つたのは、フリフリのドレスの様な服を来た美人さん。美人さんの言葉に人が集まつてくる。

「起きたようでなによりなにより

紳士の様な理想的な青年。
つまり、イケメン。

「へゝ意外と……可愛い？」

下着の様な服を着た、美少女。
まあ、発育の方は……ぼちぼちだ。

「……」

無口でクールなイケメン。
嫉妬すらできないほどのイケメン。

「……だ、れ？」

俺の第一声。

「こたる経緯でも、みへゆに出でますわ。

・
・
・
・
振つ返ると、おじこちやんがいた。

「……な、に?」

「……いや、なんでもない」

なんでもないのか。

そろそろ帰るか。

おじこちやんを通り過ぎて、工房から出て行つた。

「じゃ、あ……また」

「ああ

扉に手をかけて、ブラックアウト。

・
・
・
・
・

よく分からん。
おじこちやんになんかされた?
でも、あのおじこちやんが?
信じられん。

「そつか、私達の事知らないんだつけ?私は、レビューアタン、よろ

しくね？」

「私はベルゼブブですよ」

「リリスでいいよ」

「……ルシファーだ」

どつかで聞いたことある前だな。
まあ、いいか。

「ハーハ、シャ、です」

そのまま立ち上がって、外に出ようとする。

「どう行くの？」

「かえ、る」

決まつてんじやん。

だからその服を掴む手を離してくれ。

「すまんがそれは出来んな」

そう言つて、扉の前に立つベルゼブブさん。
なんで邪魔をする？

「まあ、サタンが来るまで待つてる」

椅子を準備するリリスさん。

サタンって誰？

「……少し、話がしたい」

もう、しょうがないですね。
少しだけだよ？

・
・
・
・
・

この人達は、魔王らしい。
で、俺のことを誘拐したらしい。
でも、今戻るとまた誘拐されるかも知れないらしい。
どうすればいい？

「……私は君に、君達に謝らなければいけない」
「……な、ぜ？」

ルシファーさん、なんかしたのか？

「小さな塊を飛ばす武器を持った、人間の女を殺そうとしたからだ」
「……」

メイドさん、だよね？

え、ルシファーさんが殺そうとした？

「怨んでも構わない……だが、せめて、謝らせて欲しい」

もう……悪い人ではないんだよね。

魔王だけど。

どうしたもんか……メイドさんは死んでない筈。
そんな気がする。

だから、俺の判断は！

「いら、ない」

「……何故だ？」

「あやま、る、なら、真、接」

「……そひ、だな」

ルシファーさんが、少しスッキリした顔で小さく笑う。カッケ。

「おお、ルシファーが陥落した」

「ミーちゃん、可愛い」

「興味深いですねえ～」

なんか、温い魔王さん達だなあ
姉上達……心配してんかな?

・・・・・

視点・サタン

「天界が、攻めてくるか」

「そのようです」

私の傍で、いろいろと動いてくれるこの子供は、七つの大罪が『強欲』のベヒモス。

今は、子供の様な見た目だが……真の姿は、巨大なサイの様な姿だ。

「狙いは、アサミネ・ヤオイでしょうね

「……そうだな

まだ少し余裕がある。

だが、それも限界がある。

あの子は、なんとしてでも~~や~~いなくてはいけんな。

「ベヒモス」

「はい？」

「そろそろ行くぞ」

「はいー。」

あの子なら、ベヒモスとも仲良くなってくれるだろ？
私以外に中々氣を許さないから困る。

せめて、今この時だけでも、幸せを感じて欲しい。
悪魔としては、間違っているのかもしかんが、な。

第一一十四話（後書き）

ルシファーーちゃんとイケメンすばれる。

サタンが、ベヒモスのお父さんみたいな感じになつてゐる。

俺も限界に挑戦してみる。

魔界編、もう誰も出でなくていいかな？

あ、アストラルは性転換して出す予定。

お楽しみにいー

第一十五話（前書き）

ヌルイ。

魔王が、ヌルイ。

第一一十五話

サタンは、おじいちゃんだった！

おじいちゃんが、ベヒモスと言つ魔王を置いてどこかに行つた。
ベヒモスことベスちゃんが睨んできた。

男の子に見えて、女の子だった……どうしちゃ？

とりあえず、レヴィアタンことレヴィ坦に抱っこされます。
メッチャ嬉しそうですな。

「 ～ ～ ～ 」

「あ～暇」

「確かに、あの戦いの後だと暇ですねえ～」

「……寒くないか？」

「うう～」

なんだこの力オス。
魔王五人に囲まれてるだ。

「サタンは、どこだあああ～～～」

「 ～ ～ ～ 」

「ん？なんだ、アストラルか」

「女になつてますね」

「……リンク、いるか？」

「うう～」

さらに混沌としてきた。

とりあえず、ルシファーリーとルシがくれたリンクをベスちゃんにあげた。

「う、うう？」

戸惑いながらもしつかり食べてた。
小動物っぽくて可愛い。

「あの野郎……生き返らせるのは良いが、なんで女にしたんだよー。
ん？誰だお前？」

「ミー、シャ」

「ミー・シャ？ああ、俺達が真界に行つた理由か」

「……ん」

「なんだ？喋れないのか？」

喋れないわけじゃ、無いよね？

首を横に振る。

「む……クソ、早く戻らないと……」

アストラルさんの顔が少し赤くなつていた。
慣れない体で、照れてるんだと思う。

「おいらシファー、サタンがどこにいるか知つてるだろ？」
「……外で、何かを造つている様だ」
「何かを造つてる？あのクソ爺、何考えてんだよ」
「サタン様はクソ爺じゃない！」

「黙つてろクソチビが」

喧嘩だ。

殴り合いは勘弁してくれ。

「フン！人間如きに負けたくせに！」

「あんな剣持つてゐ奴に勝てるわけねえだろ？があーーー！」

剣？

しかも反則クラスの剣。

……姉上じゃね？

「「」、めん、な、さい」

「あ？ なんでお前が謝ん……お前が造ったのか？」

首を縦に振る。

殴られるかな？

殴られちやうのかな？

「……ま、まあ、どんな理由だろ？と俺の負けは負けだからな……
気にすんな」

「この人優しい！

甘えたくなる優しさですな。

アストラルさんに抱っこを要求する！

……俺、どうした？

昔の俺はどうしていいのか。

「な、なんだよ？ だ、抱っこでもすれば良いのか？」

「……ん」

「ぐ……むう……しょ、しょしがねえな……今回だけだからな？」

「コレはコレで面白こ」

「確かに」

抱っこされた。

ヤバイ。

物凄く眠くなる。

ただ、胸が少し大きすぎて邪魔。

「……アストラル……いつか貴女を殺します

「げ……嫉妬すんな」

「しようがないじゃないですか……私、七つの大罪の嫉妬ですよ?」

ああ、夜道には、気ヲ付けテ下さイネ?」

レビイたん、怖い。

アストラルさんの腕の中で丸くなる。

少し震えてるのは、その、あの、えっと、によ、尿意が……

「ほ、ほらー、ミーシャが怯えてるぞ!」

「ツー? わ、私が、怖いから? そ、そんな……うえええん、ごべん
ねえええ」

「泣いたね」

「泣きましたね」

「……食事でも、用意するか」

「サタン様は魔界の支配者なのですよ? 忿むこと自体間違いなので
すから……そもそも」

……あつちにいた時より、樂しいと思つてゐる……自分がいる。

・ · · · ·

視点・サタン

なんで、私はまた工房を造つてゐるのだ?!

分からない。

まあ、ミーシャ君に使って貰うか。

あちらにいた時も、私は特に何もしていなかつたからな。
せいぜい、細かい装飾品を造る位だ。

ミーシャ君ほどの技術は無いからな。

一人だと、やることが無いな。

七つの大罪の強欲に新しい魔王をつけなくてはな

……暇だ。

私も、ミーシャ君の所に行こうか？

いや、そろそろアストラルの肉体が完成する頃か……女の肉体になつていたな。

アストラルを倒したのが、女だったのが原因なのだが……あいつの事だ、私のせいだと思っているのだろうな。

……面倒だ。

ああ、暇だな。

· · · · ·

なんだろう、物凄い残念な感じの電波が……

どうでもいいか。

アストラルさん、ヌクヌクしてる。

まるで、炎の前にいる様な。

……アストラルって……燃えてる印象が……まあ、いいか。
暖かい。

第一十五話（後書き）

サタン、どうした？

なんか、魔王の皆さんのが最初の頃からどんどん離れてく。

特にサタン、ルシファー、アストラルが。

まあ、主人公が主人公だからしそうがないか。

第一十六話（前書き）

魔界のヌルサに、全俺が泣いた。
笑いすぎて。

まあ、冗談だけど。

一応戦闘的な書いてみた。
どうぞ。

おじいちゃんが工房を造った。

大剣を二つ創つてみた。

混沌を運びし大空と奈落へ誘いし大地の一いつで一組。

名前は魔界らしくしてみた。

右手用の混沌を運びし大空は、空色で刃が美しく鋭い、斬ることを追求した大剣。

左手用の奈落へ誘いし大地は、金色で刃が歪で潰れている、碎くことを追求した大剣。

まあ、五メートルサイズの大剣を二つだから、かなり扱いが難しいんだけど。

混沌を運びし大空の概念。

スキル、【装飾化】【覚醒】【断罪剣】

上位の概念は、【不滅】【対空強化】

絶対概念、【断絶】【固定選定】【選定消滅】【血口成長】

装飾化は、武器を腕輪やネックレスなどにする。

断罪剣は、敵を斬れば斬るほど切れ味を強化する。

対空強化は、飛行が可能な相手と戦闘している時、身体能力を強化する。

断絶は、斬ること以外が出来なくなるが、あらゆるモノを斬ることが出来る。

自己成長は、使えば使うほど使用者に最適化していく。

奈落へ誘いし大地の概念。

スキル、【装飾化】【解放】【地烈波】

上位の概念は、【不滅】【対地強化】

アビス・ザ・アース

アビス・オブ・スカイ

アビス・ザ・アース

アビス・オブ・スカイ

アビス・ザ・アース

アビス・オブ・スカイ

アビス・ザ・アース

アビス・オブ・スカイ

絶対概念、【粉碎】【固定選定】【選定消滅】【血口成長】

地烈波は、地面に叩きつけることで、少しの間地面を自在に操ることが出来る。

対地強化は、地面を動く相手と戦闘している時、身体能力を強化する。

粉碎は、碎く事しか出来なくなるが、あらゆるモノを碎くことが出来る。

完璧。

とゆうわけで、実際に使ってみた。

・・・・・

クロシアムの様な場所の中心にミーシャは立ち、その両手には不釣合いな大剣が二つ。

そして、ミーシャを囲むように、アストラル、ベルゼブブ、リリス、レビィアタン、ベヒモスがそれぞれ炎の剣、風の槍、光以外の魔術、氷のハンマー、雷の大斧を油断無く構える。

誰一人何も言わず、静かに戦意を滾らせる。

最初に動いたのは……ベヒモス。

大振りに見えるが、当たつても外れてもすぐに次の行動に移れる様に工夫された攻撃。

その攻撃により、ミーシャの体が斬れた……が、その体が消えて、ベルゼブブの横に何時の間にか立っていた。

ベルゼブブは、それに慌てる事無く風の槍で突きを放つ。

ミーシャは、その矛先を左手の刃の潰れた大剣で逸らし、右手の刃の鋭い大剣でベルゼブブを横薙ぎにする。

ベルゼブブは、蠅となつて少し離れた所に再度体を作る。

ミーシャとベルゼブブの一瞬の攻防の間にリリスが魔術を放ち、レヴィアタンがその魔術に続く様に氷のハンマー腰だめにしながら突っ込む。

ミーシャは右手を前へ出す。

すると、その手を中心いて鮮やかで、美しい七枚の花弁が現れる。その花弁が、リリスの魔術を全て防ぎきる。

魔術がやんだと同時に、花弁が空気に溶ける様に消える。

レヴィアタンが氷のハンマーを大上段に構え、地面に叩きつける様に全力で振り下ろす。

ミーシャは右手の大剣で、真正面から受け止める。

ミーシャの足が地面に抉り込み、地面が陥没する。

そして、背後からアストラルが、右側からベルゼブブが、左側からベヒモスが、上空からリリスが、攻撃を仕掛ける。

ミーシャは、その場から動かずに左手の大剣を地面に叩きつける。

そして、地面を操り、向かってくる全員に地面を槍の様にして妨害する。

そして一步足を踏み出し……こけた。

・ · · · ·

バランスが、悪い。

体が小さいのがいけないんだ！

「あのタイミングでこけるのかよ」

「ホントに……ですが、ずいぶんの強いですねえ」

「むしろ強すぎだろ」

「大丈夫？」

「もう……まあ、力は認めてやつても……」

体が、体が大きくなりたい！

……そうだ！ 体が小さいのなら、大きくすれば良いじゃない！

まあ、もう少し試したいし……リトライを要求する…

「……もう、い、かい」

「まあ、俺も楽しいから良いけどな」

「むしろ、こちから頼みたいぐらいですね」

「しょうがね～な」

「じゃあ、まずは傷の手当てをしようね？」

「時間が勿体無いけど……今日は暇だから……」

痛くなんか無いんだからね！

手当てなんて必要ないんだから…

……血がスゲー出てる。

・ · · · ·

視点・ルシファー

「あの歳で、あそこまで出来るのか」

「……神の器、か

今ままでは、私に及ばないまでも、腕の一つはもっていかれるだ
ろつか？

惜しいな……あと、五年と言つた所か？

「ミーシャ君と戦いたいか？」

「……ああ、少しでも……可能性を上げられるなら」

あの子に戦い方を、生き方を、抗い方を教えてやりたい。
あの子は、生きるべきだ。

「お前も、変わったな」

サタンは、ミーシャの作ったオムライスを食べながら囁く。

「……お前に言われたくないな」

かく言う私も、ミーシャの作ったカレーを食べながらだが。

「……うまいな」

「……そうだな」

食べ終わつたら、感想でも言いに行くか。

なんだね？

・ · · · ·

ものすごく、シユールな場面を見逃した気がする。
まあ、いいか。

俺は、大剣を構え……斬りかかった。

第一十六話（後書き）

なんで、最後ギャグにしたんだろう?

てか、サタンとルシファーがオムライスとカレーって
想像したけど、メッチャシユールだ。

アストラルが、薄くなってる。

次回は、ルシファー戦?

第一二十七話（前書き）

今回は、ミーシャ君対ルシフラー。

いろいろ伏線回収した。

頑張った！

ミーシャ君の大人版？出ます。

大剣を使いこなす為に、ある指輪を創つてみた。
名を運命の導き。

スキル、【肉体操作】【精神操作】

肉体操作は、この概念の付いた物を持っていると、自身の肉体を自由に操作できる。

時間操作は、この概念の付いた物を持っていると、自身の精神を自由に操作できる。

「…ええあれば、あの二つの大剣を使いこなせるのだ！
使いこなせるんだけど……何故俺はルシと戦うことにな
まあ、やるからには勝……てるのか？

いやーあの魔王勢とだつて互角に戦えたんだから！

この指輪さえあれば！

いける！……かな？

…

…

…

…

視点・ルシファー

「ロシアムで、ミーシャと向かい合つ。

ミーシャの武器は、前と同様、二つの巨大な大剣。

そして、今回は指輪を付けている。

どんな物かは分からないが、油断する気は無い。

私は、左手に持つた妖刀・神切り。

昔いた、ただ一人の親友からの贈り物。

刀という故郷の武器と言つていた。

刀を鞘に入れたまま、ミーシャが動くのを待つ。

ミーシャが指輪の付けてある手を前に翳す。

私も手を前に翳す。

あの、シルビアといつ名前の人間の女にも使つた停止結界を発動する。

あらゆる動きを三秒間停止する結界。

今まで、この結界を越えて私に傷をつけた者は……いない。

ミーシャの指輪から光の糸が出てきて、その糸がミーシャを覆つていく。

そのまま、繭の様に覆い隠す。

そして、繭の様な糸が光の粒子になつて消える。

そこから出て来たのは……ミーシャではなく、見知らぬ青年だった。

私と同じ身長。

美しい空色の髪を膝上まで伸びた長髪。

片方は閉じられているが、開いている瞳から見える金色の瞳。

だが、その顔はどこかで見たことがある造形だった。

・ · · · ·

ルシファーが驚くのも待たず、青年は動き出す。

唯一歩、それだけでルシファーの目の前に到達する。

そして、左の大剣をルシファーの前で振り、結界を碎く。

その勢いを殺さずに、右の大剣でルシファーを切り裂こうとする。

そこでルシファーが、唐突に反応して居合いの要領で刀を抜き、大剣を弾く。

弾かれた瞬間、いつたん距離をとり、止まる。
ルシフラーも刀を鞘に入れ、居合いの構えで、止まる

「ミー・シャ、か？」

「ええ、ミー・シャです」

「普通に喋れるのか？」

「この指輪の御蔭ですよ」

「そうか……ここからは……」

「はい、真剣勝負」

「いや……」「

そして、二人は同時に動き出す。

・ · · ·

視点・ルシフラー

今ミー・シャは、この前以上に速い。

私ですら、目で追うことすら出来ない。

だが、私は視覚よりも聴覚が優れている。

ゆえに、ミー・シャの心臓の音で、どこにいるか判断する。
右から風きり音が聞こえたので、右に向かつて刀を振る。

ガギヤンッ！

その巨大な大剣と細い刀から鳴る音とは思えない音が聞こえる。

腕に強力な衝撃が走る。

だが、その衝撃を無視して刀を持つていない方の手にある鞘を振り

かぶる。

ミーシャは、バックステップで距離をとり回避する。
離れた瞬間、複合魔術を発動する。

「ダーク・ストライク！」

闇と風の複合魔術。

私の前の地面を切り裂いて、ミーシャに向かう見えない刃の魔術。
それに対して、ミーシャも魔術を使つ。

「ライト・ブラスト！」

光と水の複合魔術。
見えない刃を包み、消し去る。

「魔術も使えるのか」

「勉強だけは、してましたから」

「そうか……フフ、ハハハ！」

「……クク、アハハ！」

二人で笑う。

唯、自らの全力の試せる相手が目の前にいるから。

「全力で……」

「本氣で……」

「一殺し合おうー！」

同時に地を蹴る。

その時、私は見ることになった。

ミーシャがいつも閉じている、左目を開けるのを……

その瞳は、引き込まれる様な、美しい輝きがある……虹色だった。

・・・・・

・・・・・

久しぶりに、左目を開く。

その瞬間、あらゆる流れを見ることが出来る。

魔力の流れ。

時の流れ。

死の流れ。

そして、今見るべき流れは、時の流れ。

過去、現在、未来、あらゆる時の流れのみを視界に残す。

その時の流れから、さらに未来の流れのみを見る。

その流れを見ながら、目の前の何も無い空間を切り裂く。

その行動で、次元が裂ける。

その次元にそのまま入り。

次元が閉じた。

・・・・・

視点・ルシファーア

次元を切り裂いた。

それだけでも、異常なのに、その次元の裂け目に入った。

次元を裂く事が出来るのは、召喚の魔法を使った時に次元の裂け目から聖霊界の生物が出てくる。

それ以外に次元を操る事が出来る者は、いない。

その、筈だったが……ミーシャは、自由に次元を操る事が出来る様だ。

見る事も、気配を見つける事も、音を聞くこともできない。

こんな切り札を持っているのは、予想外だった。

と、そこでいきなり全方位の空間が裂け、囲まれる様に次元の裂け目が現れる。

最初に音が聞こえたのは、右。

大剣が飛んでくる。

それを裂け目の無い方に弾くが、弾いた先に裂け目が出来て、そのまま大剣が消える。

その瞬間から、攻撃が激しくなる。

左、前、右、後ろ、斜め、あらゆる方向から大剣が飛んでくる。停止結界は発動してる筈なのに、切り裂かれ、碎かれる。

私は、避けて、弾いて、受け流す。

攻撃は弱くなるどころか、どんどん激しくなる。

だが、どれだけ激しくなると、所詮は一つのみだ……このままだとジリ貧だ。

物理的には、次元の裂け目に干渉できないが、魔法や魔術なら干渉出来る筈とあたりをつけて魔術を発動しようとする。

そこで、上に心臓の音が聞こえた。

・・・・・

・・・・・

火・水・風・雷・土・氷・光・闇の全てを合わせた、魔法剣・エーテル・ブレイドを両手で持ち、上から切り下ろす。

だが、ルシファーアの障壁に阻まれ、当てることが出来なかつた。
が、そのままルシファーアの体に蹴りを叩き込む。

「ぐつー?」

強化魔法も使つた蹴りなので、かなりの威力があつた筈だ。
これなら勝てるーと思つたら……

パキン!

手の辺りで何かが壊れる。
ゆっくり手を見る。

何も無い。

足元を見る。

そこには、碎け散つた指輪があつた。

「あ……壊れ、た?」

そして、意識が闇に飲まれる。

・

・

・

・

視点・ルシファーア

……ミーシャが倒れた。

氣絶しているだけの様で、肉体も元の状態に戻つてゐる。

戦闘時間は、約三分。

あの状態は、三分が限界の様だ。

まあ、このまま成長すれば、あの強さを保てるのだから。
やはり、どんなことをしても、生かしてみせる。
……とりあえず、どうすればいいんだ？

第一一十七話（後書き）

もう少し魔王勢の好感度あげたら天界でも行くか。

封 演技の武器とかでも魔王勢に持たせようか？
出して欲しそうだし。

読者が。

原典以上の物になるぜ？

あ、何か出して欲しい武器とかあつたら言つてね。
無理矢理出しから。

俺は、トンファー出したい。

外伝・その？（前書き）

頑張つて、伏線を回収してみた。

最後の方、眞面目に書いてみた。

父親の扱いが酷いな。

まあ、屍だし……どうでもいいか。

外伝・その？

視点・リューネ

ミーが心配なのが、余り心配する必要が無い気がする。
何故だろ？

「考え方とはいい度胸だあああああ！…！」

バカ、間違えた、父様が木剣を振りかぶる。

「てい！」

「グホッ！？」

隙だらけの鳩尾に突きを放つ。

父様は地面で転げ回り、痛そうにお腹を押さえている。

「ちょ！？今の酷くない！？」

「考え方の邪魔をするからです」

「訓練中に考え方は無いだろ！？」

「三日前から父様に全勝出来る様になつてゐるのですから、もういい
です」

「そんな！？お父さんを見捨てないで…」

私の足にしがみつくバカ。

とつあえず、顔を踏みつけておいた。

「グブエ！？」

地面に擦り付ける様に踏み抜く。

悲鳴も出ないよう口を押さえながら。

「何してるんだ？」

「……痛そう」

「偶には手加減してあげた方が……」

リリイとクリスとクリアが、こちらに歩いてくる。
足元の人物を心配そうに

「で、できれば……もう少し上を……」

蔑んだ目を向ける。

三人は、砂をかけるように蹴りを入れる。

そのまま、何事も無かつたかのように会話する。

「私達もだいぶ強くなつたな？」

「そうだな……姫ということを忘れそうになる」

「ミシャから貰つた武器も、ちゃんと使えるようになつた」

「ホント、大変でしたね……」

懐かしむ様に、全員が遠い目をする。

城が壊れたり、町が燃えたり、城壁が吹き飛んだり。
いろいろあつたな……

今ならミーを助けにいけるんじゃないかな?
というわけで聞いてみる。

「魔界へ行くには？」

「わからん」

「じゃあ、死ね」

「俺父おゲベ！？……それは、うめ　　」

私が踏んで、リリィが糸で縛り、クリスが足に乗っかり、クリアが凍らせる。

これがコンビネーション。

「貴女達楽しそうね？」

「元気すぎて困るぐらうですよ

「あ、女王陛下、母様も」

城の訓練場に来たのは、この国の女王、フォルメスト・メイファ・デステントと母様。

その後ろにメイドさんもいた。

「女王、珍しい」

「御身体の方は大丈夫なのですか？」

女王陛下は、今まで病に侵されていて、まともに歩く事が出来なかつた。

寝込んでいた影響で、髪の色が落ちて白髪になつている。

それでもその美しさは衰えておらず、むしろ儂げに見えてとても人気になつていて。

特に市民や兵達の間で。

そこで、リリィの持つていてる杖専用の回復魔法、再生の流水によつて病が無くなり、動けるようにまでなつたのだ。

再生の流水は、肉体や傷の回復よりも毒や病気を治すのに特化されているようだ。

まあ、そのせいで女王陛下が、ミーに興味をもつてしまつたが……

「心配してくれてありがとう、ミーシャ君の所へは？」

「まだ、分かっていません」

「そう……早く会つて見たいわ……ウチの娘のお気に入りみたいだ
し、ね？」

「むう……」

リリイの顔が赤い。

ライバルが多いな……ミーの貞操は私の物だ！
いや、最初だけでも私が貰うでいいか？
とりあえず……早く取り返さなくては！

・ · · · ·

何故か、帰りたくなくなつた。
いろんな意味で、身の危険を感じる。

「ミー・シャ君、どうしたの？」

「……ん」

レビイたんが聞いてきたので、首を横に振る。
レビイたんの頬が赤くなる。

……魔界にいても、身の危険を感じる。
どうすればいいんだ！

「ミー・シャー！紅茶入れてくれ！」

「私はアイスを要求するわ！」

「では、しつとりべとべとなカレーを……冗談だからそんな目で見
ないでください、甘めの飲み物を」

「パフェを！パフェを作つてください！」

「……モンブランを頼む」

「じゃあ、「一ヒーを入れてくれ……」マモンも何か頼んだりじつだ
?」

「……イチゴケーキを」

七つの大罪が全員そろつた。

色欲にマモンさんが入った。

インテリな秘書の様な人で、イチゴやら、なんやらの可愛い物好き。可愛い物を貪欲に集めることに興奮することから、色欲に選ばれた様だ。

ちなみに、今の場所は工房だ。

一階が、武器などを創る場所で、二階が、カフェの様になっている。七つの大罪は、基本的にここにたむろしている。

ちなみに、上の注文を作るのは俺だ。

まあ、楽しいからいいんだけど……これ、姉上達が一緒になつたらどうなるんだろう?

……俺が一番大変じゃない?

ああ、そういえば……俺、不幸体质だつけ?

・

・

・

・

視点・?/?

「……アサミニネ、ヤオイ」

「可哀想ではあるが……」

「我らが、神の復活の為にも……」

「……必ず、連れて来るんだ」

四つの影が、雲の中に入った。
その影の一つ、一つが消える。

「……」

「まだ、迷ってるのか？」

「ええ、ホントに、これでいいのか……」

「もう、余り時間が無いんだ……なるべく早く覚悟を決めろ」

そう言い残し、影が一つになる。

「正義とは……なんなのでしょう……私は……分かりません……」

そして、最後の影が……消えた。

外伝・その？（後書き）

ミー君と姉上のある意味以心伝心。

伏線増えた……

七つの大罪全員集合。

外伝で。

ベルゼブブの頼んだのは、カレーです。
けして、ウ カレーではないです。
カレーなんです。

第一二十八話（前書き）

何も思いつかない。

ヤバイ。

止まるかも。

まあ、一日二日空けて投稿してるよね？

第二十八話

耐久度が足りない。

不滅の概念も付けてみたけど、三分で壊れた。
グム三つや。

魔三の滝一郎

何にしようかなあ

•
•
•

かゆいのがある

「なんだ!? ど、どうして!? ああ!?」

レビュイたんとリリスが驚いてる。

むかでなか？

封神技の金蚊剪をアレンジしたのが、原因だ。原典より魔改造の方が好きなんです。

七匹七色の竜達に弄ばれてる。
現在天井に貼り付けられています。

「のクソ竜ぢモー」ハリヤま、けしからん事を。」

いや、意味わからんないから」

一人が、俺を下ろそうと頑張っているので、今之内に説明しよう！

スキル、【火竜召喚】【水竜召喚】【風竜召喚】【雷竜召喚】【土

竜召喚】【氷竜召喚】【闇竜召喚】

上位の概念、【不滅】【精神感応】【自律思考】

召喚系は、そのままの通りで、召喚する事が出来る。

自立思考は、この概念を付けた物が自分で思考して、自由にする。

自分が従うべき相手には、普通に従う。

自立思考、なんで付けたんだろう？

「クッ、じいづら……！」

「意外と、強い！」

降りるのに一時間掛かった。

誰かに押し付けよう。

・

というわけで、竜が似合いそうなアストラルさんにあげることにした。

「いいのか？」

「……ん」

「そつか……ありがとな！」

美人が男っぽく笑う。

カッコ綺麗だ。

照れるぜよ。

少し顔が赤い気がする。

「アストラル……あなたとゆう人は、一度ならず一度までも……許しません」

血塗れた斧が似合いそうな、レビイたん登場。
どこのホラーですか？

「まあいい、早速試させてもらひつか……名前なんて書つんだ?」

うまく言えないので、いつも通り紙を渡す。

「…………へ～金蛟剪ね…………そりよー。」

アストラルさんが、金蚊剪を振ると竜が現れる。
炎と闇の竜だけだが。

他の竜は、相性と熟練度が原因で出でこないようだ。

「やれ！」

そういうと、一匹の竜がレヴィたんに迫る。

「何故……貴方だけなのですかあああああ！」

氷のハンマーで、叩き潰した。

それと同時に、アストラルさんも突っ込む。

本當の姿にはなって応戦す。レバ、たん
とりあえず帰ることにした。

・・・・・

「//—シヤ語」

「……こん、にちわ」

「ええ、ここんちわ」

工房の一階に「マモン」とマモさんがいた。やつぱりこいつやって見ると、普通だよね。作った犬と猫のぬいぐるみを出してみる。マモさんが鼻息荒く詰め寄つて来る。

正直キモイ。

「一体何所でこれを！ハア！ハア！ハア！可愛いわ～」

「……つく、た」

「ホ、ホントに！？ね、ねえ……よかつたらそれ……」

「……ん」

差し出す。

もともと暇だから作つただけだし。

「ありがとう！…！」

「……うぶ」

おもいつきりハグされる。

マモさんの胸に顔が押し付けられて、息が出来ない。

「ハアハアハア、可愛いわ、もう絶対離さないからね！」

「……あ～その、お邪魔みたいだね」

今のは、リリスさんかな？

助けてくださいよ。

そろそろ息が、ほん、とに……無理……

「へ〃一シャ君?〃一シャ君ー?」

「その胸のせいだな

「ええー!?」

明日、何し、よ、う……グフッ!
ザク、とは……ちがう……

第一二十八話（後書き）

毎日更新は無理があつたか。
まあ、それでもやるんだがな。

明日は、設定的なものを投稿します。

第二十九話（前書き）

ミーシャ君のアストラルに対する好感度が上がった。どうしても、逆に出来なかつた。

第一十九話

Fateに出てくるハルバートを創つてみた。

ベスちゃん用に創つた結果、放電してハルバートになつた。
名前は、オーバー・ザ・ライデン裁き降す雷電。

スキル、【放電】【加速】【直感】ライトニング・ジャッジメント【雷鳴の裁き】

下位の概念、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】【集中力上昇】ライトニング・ジャッジメント【精神集中】

中位の概念、【嗅覚強化】【聴覚強化】【気配察知】

上位の概念、【不滅】【呪い・視覚】

放電は、電気を放つ事が出来る。

自身に纏つて、肉体の限界を無理矢理出すなどいろいろ使い道がある。

雷鳴の裁きは、一時的に自身を雷化して、周囲一帯に雷を落とす。
雷化を保つ事は出来るが、保つ長さによってかなりの代償を伴う。
嗅覚強化は、嗅覚を活性化させて、匂いを嗅ぎ分ける事が出来る様になる。

聴覚強化は、聴覚を活性化させて、音を聞き分ける事が出来る様になる。

呪い・視覚は、呪いを発動して視覚を奪う代わりに身体能力と視覚以外の感覚を強化する。

うーん、結構でかい。

ベスちゃんはどこだあー

二階で、俺のオレンジシャーベットを食べていた。

作るのに、苦労した俺のアイス。

「ん？ ああ、ミーシャですか……このアイスも中々美味しいですね」

ベスちゃんが、最後の一 口を食べた。
悲しくなんか無いさ。
あれ？ 田から水が出てる。

「ちよ!? なんで泣いてるんですか! ?」
う

止まりなによ。

どうせここで作るか、わからんないから、同じ味を作るのに、三ヶ月も掛けたのに……
もう、無いんだね。

「泣き止んでくださいーーーもうーーどうすれぱーこんですかーーー？」

A 3x3 grid of nine black dots, arranged in three rows and three columns.

視点・アストラル

ミーシャにアップルティーでも入れて貰おうといつもの場所に行つたら、泣いてるミーシャとそれを泣き止ませようとしているベヒモスがいた。

「何やつてんだ？」

「アストラル!? 助かりました! 何とかしてください!」

「しょうがねえな……ほり、ミーシャ」

ミーシャを抱っこして、背中を軽く叩く。

最近思うんだが、ミーシャを抱っこするのが癖になり始める。まあ、別にいいんだけどな。

「泣いてたらわかんないだろ? どうした?」

「……あい、す」

「? アイス? ……おい、これって……」

足元にアイスを入れてあつたであらう、空の箱があった。たしか、ミーシャが大事にしてたアイスの箱じゃないか? 空だけど、そうだよな。

そこで、顔を上げるとベヒモスが、汗を滝の様に流しながら田を泳がせる。

「……急用を思い出しました」

「まあ待て」

逃げよつとするベヒモスの首根っこを掴んで持ち上げる。

「離して下さい! もしも、こんな事がレビューアタンにばれたら!」

「私がどうかしましたか?」

「あ……」

レビューアタンが丁度来た。

レビューアタンが最初に見たのは、ミーシャ。

「ミーシャ君! ? なんで泣いてるんですか!」

「……ソレを見れば、お前ならわかるだろ?」

空の箱を指差しながら、教えてやる。

「…………ベヒモス…………あなたという方は…………なんと言つ事を…」「ひつ…?」

レビューアタンを中心に、ドス黒いオーラが渦巻く。
俺の本気の黒炎に近いものを感じる。

アレはヤバイ。

「そのアイスは、ミーシャ君が、苦労して作った、大事な物なのに……」

「あ、その、だって、美味しそうだったし、だから、その、あの…」

「苦労して、作り上げて、そして、出来た時のあの笑顔を……」

俺もその時いたが、笑顔ではなかつた気が……あんま表情変わんな
いからわかんねえ。

笑顔？

「泣き顔にするなんて…………ユルサナイ」

「あ、い、ひ、ま、待つて……」

あ～ここ、壊れるかも。

明らかに本気のレビューアタン。

全力で守りに入つたベヒモス。

俺はとりあえず、ミーシャに被害が出ないよう、ミーシャが造つたであろううハルバートを持つて外に出る。
出たと同時に、工房兼溜まり場が吹き飛んだ。

そこには、本来の姿を現したレヴィアタンとベヒモスがいた。あの人間達と違つて、ベヒモスにはレヴィアタンの硬い鱗をどうかでできる攻撃が無い。

「一体がぶつかる度に、周りの木々や土が吹き飛ぶ。

ここは流石としか言い様がないな。

最強と言われる生物と最高と言われる生物。

まあ、今現在の争つてる理由は、大した事無いんだがな。

「……う？」

「お、泣き止んだのかミーシャ？」

「……ん」

やつぱ、可愛いよな。

待て待て、俺は元男だぞ？

まあ、悪魔に性別とかそんなに意味は無いからな……て、ダメだろ。

落ち着け、俺。

「……？」

やめろ！首を傾げるな！

胸の奥が、すごい締め付けられる。

よし、あの一体を見て落ち着くんがだ。

……うん、もう大丈夫。

「とつあえずどつか別のところ、工房造りに行くか？」

「……ん」

ミーシャは、今までいた場所を眺めた後に頷く。

正しい判断だな。

まだ残っていた、涙を舐め取る。

「ん、しょっぱいな」

「……」

ミーシャの顔が赤くなる。

ホント可愛いな。

……俺、女で良かったかも。

・・・・・

・・・・

・

何時のためにか、レイヴィたんとベスちゃんが工房跡で大乱闘していた。
アストラルさんが、すごい優しい上にカッコイイ。

まるで、姉上の様な感じだ。

姉上にやられたのに、似てる。

姉上達、元気かな？

……元気だろうね。

第一十九話（後書き）

うーん、他の奴らどうやって絡ませよう?

レビューアタンは簡単なんだけど。

ミーシャ君関連で嫉妬でもさせればいいだろ。

あと、アストラル。

とりあえず、ミーシャ君を抱っこすればいいし。

うむ、他の奴ら、どうしよう。

第三十話（前書き）

投稿が、遅れた。

パソコンを親に取られたせいだ。

頑張った。

新しい工房を皆で造つた。

最近、魔王らしくなくなつてきた七つの大罪。

そして、封神 技の盤古幡ばんこはんを創つて、概念で遊んでみた。

スキル、【増殖】【重力操作】【視覚共有】【聴覚共有】【魔力操作】

下位の概念、【集中力上昇】【精神集中】
中位の概念、【視覚強化】【聴覚強化】
上位の概念、【不滅】【選定】
絶対概念、【甘い】

増殖は、この概念を付加した物を増やす。
ただし、本体とは色違い。

重力操作は、この概念の付いた物の一定範囲の重力を操る事が出来る。

視覚共有は、この概念の付いた物を通じて、見る事が出来る。
聴覚共有は、この概念の付いた物を通じて、聞く事が出来る。
魔力操作は、魔力がある限り、離れた所からでも操作できるようになる。

視覚強化は、視覚を活性化させて、見る能力を上昇させる事が出来る。

甘いは、そのままの意味で、甘くなるだけ。

反省も後悔もしていない。

地球儀サイズの黒い球。

誰に渡そうかと転がして遊んでたら、増えた。

一つが二つに、二つが四つに、四つが八つに……どんどん増えてく。

なんかヤバイ。

本体の黒い球を残して、増えた白い球を外に放り投げておいた。
投げても投げても増えるので、本体を持つて工房の裏にある芝生に避難。

早く誰かに押し付けないと……

そういえば……絶対概念の甘い、どんな感じだりつ。
舐めちゃう?

恐る恐る、舌を伸ばす。

舌が球に触れると、味覚を刺激する甘い味が口一杯に広がる。
……うまい。

芝生に足を投げ出すように座つて、球を両手で持つて、ペロペロと音を出しながら舐める。

うまうま。

球が小さくなる事も無いし、味が薄くなる事も無い。

これは良いアメだ。

これは、誰にも渡さない。

・
・
・

視点・レビューアタン

ミーシャ君に会つ為に、工房に来たら……白い球が大量に転がっていた。

脳の処理速度が追いつかない。
少しの間、呆然としていた。

「…………ハツ！？ミーシャ君！？」

脳が再起動したら、ミーシャ君がいない事に気が付いた。
いつたいどこに！？

部屋の隙間を重点的に探す。

ミーシャ君は、部屋の隙間などを好んでいて、暇になると隙間や隅
っこにいる。

だが、どこを探しても見つからない。

ふと耳に、小さな音が聞こえる。

ぴちゃぴちゃと艶かしい音が……ま、まさか！？

アストラルがミーシャ君を！？

なんて、ひらやま……けしからん事を！

音の出でこむ場所は……「この裏の様だ。

「今行くからね、ミーシャ君！」

急いで裏に向かう。

そこは…………パラダイスだった。

（一部誇張表現）

黒い球を小さな舌で一生懸命舐めるミーシャ君。

たくさん舐めたのか、舌が球から離れる度に唾液の糸が伸びる。

その顔は、とても嬉しそうにとろけていた。

私は、その嬉しそうな顔を見て、微笑ましく思った。

・・・・・

視点・リリス

レビューアタンが、飛び出すように工房から出て裏に回つて行つた。後を着いて行つてみると、ミーシャが無表情に黒い球を舐めていた。そして、それを見て、鼻息を荒くしながら鼻血を流しているレビューアタンがいた。

……昔のお前はどうに逝つた。

まあ、私もその光景を眺めていたけど。
うん、何かエロイ。

第三十話（後書き）

ミーシャ君が舐める、というのをやりたかった。
始めは、槍系の棒にしようと思っていた。
でも、それはダメじゃね？と思いつた。
なので、丸い球にしてみた。

第三十一話（前書き）

頑張って夏休みの宿題終わらせてきたー！

でも、学校が始まると、毎日投稿が出来なくなる。

自分、続きを書くの楽しみにしてんだけどな。

第三十一話

盤古幡もといアメを、リリスさんに持つていかれた。

俺の、アメ……

また創ればいいかな？

でも、同じの創るのはなあ～
ダブリにはしたくない。

棍……いや、何かエロイ氣がする。

ヌンチャク……創るのめんぢくさい。

トンファー……使えるかな？

フレイル……痛そう。

……舐めるんだっけ？

だとすると……トンファーが一番かな？

……ええい！めんぢくさい！

昔の偉人も言つていた！

考えるな！感じるんだ！

創るぞおおおおお～！！！

顔は無表情。
心は暴走。

そんな、寝る前のミーシャでした。

・ · · · ·

視点・ベルゼブブ

また、ミーシャ君が何か作っている様だ。

私も、何か欲しいものだ。

出来れば破れたりしないスースなど……いや、さすがにそれは無理か。

あの呪いの力など、私はいいと思うのだがな……

「……ベルゼブブ」

「どうかしましたか、レヴィアタン？」

どうやら、考え方のし過ぎでぼんやりしていたようですね。
レヴィアタンは、両手に透明度の高い、魔力からしてミスリル製で
あらうトンファーを持つている。

ミーシャ君には、けして見せないであろう顔で、私の前に立つてい
る。

笑顔なのだ……笑顔なのだが……目が笑っていない。

「これを試したいので、おとなしく死んでください?」

「……笑顔で言う事ですか」

そして、レヴィアタンが構える。

だが、何故蹴りの構えなのだ?

明らかに回し蹴りの為に右足を後ろに構えている。

……ああ、聞いたことがある気がします。

武器の名前が入っているのに、武器を使わない攻撃。
昔、人間が使つてきたな……

「トンファー

」

レヴィアタンは、勢いをつけて、一回転する。

「ああ、ミーシャ君には、頑丈なスーツを作つて貰おう」「キィイイイイク！－！」

私が覚えていたのは、そこまでだつた。

・・・・・

・・・・・

レビィたんが、ベルさんをしばいでいた。

それはもう、血塗れの池が出来上がるほどに。今回創つたトンファーは、ミスリル製です。

スキル、【トンファー武術（笑）】【加速】【直感】【心眼】
下位の概念、【攻撃速度上昇】【筋力上昇】【素早さ上昇】
上位の概念、【魔力収集】【不滅】【選定】
絶対概念、【辛い】

トンファー武術（笑）は、トンファーを使った（笑）武術的なものが使えるようになる。

心眼は、一時的な未来視を可能にする。見れるのは、1・2秒先のみ。

魔力収集は、倒した相手の魔力を吸収して、武器としての格が上がつていく。

辛いは、そのままの意味で、辛くなるだけ。

……血塗れだけど、舐めてみる？

トコトコとレビィたんの犯行現場に近付く。

「うふ、うふふ、あはははは、どうかしましたかミーシャ君?」「

す」に変わり身の早さ。

血塗れのトンファーを見て笑っていたと思つたら、笑顔に戻つて俺に話しかけてくる。

うん、今までで、一番魔王っぽい感じしてたよ。

「……ん」

「え? 犹めたいんですか? 分かりました、すぐに拭きますね」

血を拭いて、トンファーを差し出してくる。

どのぐらい辛いかわからないので、ペロッと小ちく舐める。舌を刺激する辛さ。

少し舌がピリピリするが、これはこれでいい。全体的に味わう為に、トンファーを舐め回す。トンファーを持つ所から、離れれば離れるほど、辛くなる。俺の舌が、もっと刺激を求めてる。

しゃぶる様に、丹念に、丁寧に、念入りに、舐め回す。

舐めすぎたのか、涎でぴちやぴちや音がしているが、まあ、気にしないでいいだろ?。

刺激を求めて一心不乱に舌を動かす。

・・・・・

・・・・

・

視点・サタン

ミーシャ君にどうしても伝えなくてはいけない事があるので、来てみたのだが……なんだこれは?

ベルゼブブかもしれない、グチャグチャの肉塊。

美しいトンファーを無表情に舐めているミーシャ君。
そのミーシャ君を見て、恍惚としながら鼻血を大量に流し、水溜りを作っているレビィアタン。

……何があった？

「……」

関りたくないでの、何も言わずにその場を離れた。

ベルゼブブは、残念だがあのままだ。

私は、あの状態のレビィアタンを敵にする気は無い。

まあ、ベルゼブブなら大丈夫だと信じよ。

……私は、なんであそこに行つたんだ？

いかんな、歳だらうか？

まあ、そのうち思い出すだらう。

「しかし、ミーシャ君………口過ぎやうぞ？」

その言葉は、誰にも聞かれる事無く、空氣に溶けていった。

第三十一話（後書き）

この本の収録、メインストーリーは一ヶ月にしてしまおうつか。

姉上じやなくて。

だつて、今になつ。

いいかな？

最初の頃から比べると、自分でもよくなつてゐんじやないかなあ」と思える。

氣のせいじやないと信じたい。

もつと上手くになりたい！

あの後、レビーたんも舐めたのだが、舌が触れた瞬間絶叫してビニ
カに走つていつた。

辛過ぎた様だ。

俺の舌、大丈夫か？

創るのも飽きてきたし……何しよ？

……やることが、無い。

そうだ！狩りをしよう！

・・・・・

視点・サタン

「最近、男の魔が何者かに瀕死に追いやられている……何か知つ
ている事は無いか？」

私を除いた七つの大罪を、ミーシャ君の工房の一階に集めて、そ
う切り出した。

各々が、ある人物を示唆する。

「この頃、どこにいるのかわからないんです」

「出かけた時と帰つて来た時で、服が違うんだよ」

「その通り魔的なを見た女の魔が、ショタコンに田覚めるんだ
と」

「僅かに、血の匂いがしますね」

「よく、寝る頃になると出かける」

「紙に正の字を書いていました」

「新しい暇潰しを見つけたと言つてていたな」

上から、レヴィアターン、アストラル、リリス、ベルゼブブ、ベヒモス、マモン、ルシファードだ。

「……ミーシャ君だろうな」

「だが、やられているのは天界と手を組もうとしていた奴等だけの筈だ」

そうなのだ……天界と手を組み、ミーシャ君を使い神を降臨した後の魔界の所有権を欲しがつていたらしい。

本人が言つていた。

その後、自白した者は、皆蹲り命乞いを喰き続ける。

「……放置でいいだろうか?」

『異議無し』

珍しく、全員の息が揃つた瞬間だつた。
天界で思い出した。

ミーシャ君に言わなければいけない事を。

・
・
・
・

今日は、集団で固まつてくれたから楽に狩れた。
何を狩れたのかは、聞かないで欲しい。
狩をしている時に、新しい武器と防具を思いついた。
むしろ、思い出せた部分もある。

この世界来て、約八年と六ヶ月。
まあ、それはさておき。

おじいちゃんが、大事な用があると言つていた。
なので、おじいちゃんの家といつ名の城に来た。
中庭にて、おじいちゃんを発見。

「……な、に？」

「……お前の事についてだ」

なんだ？

あ～もしかして、器とか何とかの事かな？
いろんな所で話してゐるの聞いてるし。

「お前が神の器だといつのは、知つてゐるな？」

「……ん」

「まずは、お前が何故神の器と呼ばれるかだ……神の器は、文字通り神を宿す為の肉体の事だ……お前が選ばれた理由は、わからない……だが、名譽な事などではけしてない……なぜなら、神を宿した肉体の元の精神、つまり、人格より自我を全て消され、肉体は完全に神の所有物となる」

え～つまり、神が宿ると俺といつ存在が消されると言つ事か？
最悪やん。

「だが、神降ろしが出来るのは、神の器が15歳を超えるまで……
だから、私達魔界は君を連れて来たのだ……神は、眞界に伝わるようないいものではない……ああ、神の器を殺しても数年後には、新たな命にその役目が下されるだけだ……唯一、その呪縛から解放される方法がある」

その心は！

「神の器が、神を殺す事だ」

よくあるファンタジーモノのお約束ですね。
神殺しても創ろうかな？
うまく出来なかつたら、俺が死ぬだけだね。
ははは、笑えねえ。

「近い内に、天界が君を連れて行こうとするだらう……天界の者に
とつて、神とは、崇めるべき存在だからな」

天界つて天使だろ？

……あの天使は、何か知ってるのかな？
俺に変な運命を背負わせやがつて……許すまじ！

「……安心しろ、お前は、ミーシャ君は、私達が守つてみせる
「……ん」

渋カツコイイと思つてしまつた。
最近、影も毛も薄いくせに！

「……今何を考えた？」

頭をさすりながら、聞いてくる。
気にしてたんだ。

「……なん、で、も、ない」
「そつか」

う～む……対天使用の装備でも創るかな。
いつ来るかわからんないし、急いで完成させるかな！

「……がん、ばる」

「……頑張れ」

そうと決まれば、いざ工房へ！

・・・・・

視点・ベルゼブブ

サタン殿の屋敷がある方から、ミーシャ君が小走りに工房に向かっている。

そうだ、スーツの件を考えておいてもらおう。

「ミーシャ君ー」

「……ん」

「実は、君に作って欲しい物があるんだ」

「……ん？」

小首を傾げつつも、続きを促す様に見つめてくる。

この仕草が、女性受けするんでしょう。

「頑丈なスーツを作つて欲しいのだよ

「……わか、た」

「さうか！ありがとうミーシャ君ー貰つだけだと悪いからね……この宝石の詰め合わせを上げよう

「……あり、がと」

僅かだが、嬉しそうに見えなくもない。
無表情だから、感情が読み取りづらいな。
あの呪いの力を使える槍を使っていた少女。
あの少女も無表情であつたな……

「……ま、た」

「ん？ ああ、すまないね……」

考え方をしていたせいで、ミーシャ君はビビッたらいいか迷ついていたようだ。

また、小走りで工房に向かっていく。

「……ふう、命を賭けてでも、守らなければな」

そう呟き、無数の蠅となつて、消えた。

第三十一話（後書き）

次回は外伝！

異議は認めない！

これは、決定事項だ！

ベルゼブブのスーツ、封神技の怠惰スーツを少しアレンジしてタキシードにする予定。

ここに書く事じゃないか？

大丈夫、土壇場で変えることもあるから。

外伝・その？（前書き）

読み返してみると、未回収の伏線が結構あった。
めんどくさいと思つた。

魔界編の次は、天界編かな？

外伝・その？

視点・クリア

ミーシャ殿がいなくなつてから、城の訓練場で集まるのが習慣になつてますね。

ああ、あの頭を撫でたいです。

……ハツ！？私は何を！？

「何故百面相をしておるんだ？」

「え？あ、姫様……なんでもないですよ？」

「そうか？……まあ、いいか」

危ない危ない。

そのうち、変なこと言つてしまいそうです。

とこりで、リューネ殿は……何故パジャマなのでしょう？現在、訓練場に机と椅子を置いて、私、クリス、姫様、リューネ殿の四人で、紅茶を飲んでいる。

誰もリューネ殿の服装について触れないでの、私も気にしないようにしているのですが……気になります。

しかも、可愛らしいパジャマですし。

ピンクの花柄パジャマです。

……よっこりまで来れましたね。

「……クリア……リューネが、変
む、お前もそう思つていたのか？」

クリスが、小声で聞いてくるのに、姫様も混ざる。
どうやら、一人ともおかしいと思つていたようですね。

「多分、ミーシャ殿のことが気になるのでしょうか……連れて行かれ
てから、一ヶ月は経っていますから」

「……そう

「そういえば、もうそんなに経ったか……」

何時になつたら、ミーシャ殿を助けにいけるのでしょうか……表現が
違う気がします……連れ帰れるのでしょうか。

リューネ殿を見ると、上の空といった感じで紅茶の入ったカップを
右手に持つて、空を見上げている。

私達の会話も聞こえていない様です。

そういうえば……一週間ほど前から、レイ殿がどこかに逝っています
し……これからどうすればいいんでしょうか？

「……え」

「ん？ どうした、リューネ？」

リューネ殿が驚いた様な声を上げ、それに姫様が反応する。
リューネ殿は、何も言わずに上を指差す。

なんでしょう？

全員で、上を見ると……羽の生えた人が四人、浮かんでいた。

「……天使？」

「……始めて見た」

「……何故ここに？」

私達は、ただ、呆然と天使？を眺めていた。

・ · · · ·

視点・レイ

「俺！ 降臨！」

……誰も見てないし！？

あの四大天使どもめ……羨ましい！
一応紹介しておくか。

「え～あの金髪がミカエル、緑がガブリエル、琥珀色がラファエル、
赤がウリエルだ」

「……それって」

「天界の四大天使じゃないのか！？」

「確かに……七つの大罪と同等の有名度ですね」

「何故そんな方が私達の所に？」

「……気付いてたのかよ！？ 最初に反応してくれよ！？」

でも、最近それがいいと思つてしまつ。

アメリカに、鞭で叩かれたあたりからこの快感に目覚めたんだけど

……何故だ？

「そろそろ、よろしいでしょうか？」

ラファエルが、そう言ひつ。

浮かんでるのをやめて、地面に立つてゐる。

「説明は任せた！」

全部押し付けて、椅子に座る。

何時の間にか横に、メイドのシルビアが立つていて、レモンティーを入れてあるカップを差し出してくる。

……完璧だな。

啜りながら、眺める。

「余り詳しくは言えませんが……私達がここに来たのは、あなた方に協力して貰う為です」

「協力、ですか？」

ラファエルの申し出に、リューネ達は首を傾げる。

てか、なんでガブリエルが言わないんだよ。

言葉を伝える者だろ？

喋れよ。

バアカが！

「……あの～ミカエルさん？何故俺に剣を向けるのですか？」

「……消えてください」

ミカエルが、俺に剣を向けて斬りかかって来る。

殺される！？

「もう死んでもますけど！？何か！？俺は今、風になる！」

・ · · · ·

視点・シルビア

旦那様が、ミカエルと言っていた天使の方に追い掛け回されてい

ます。

大方、馬鹿にする様な事でも考えたのでしょうか。

旦那様も、ミーシャ様と同じ様に顔に出やすいですかから。

そんな御一方を無視しつつ、会話を続けています。

「あなた方が、七つの大罪の魔王達を相手に勝つたと……彼から聞きました」

七つの大罪……私だけが、まともに戦闘すら出来ませんでした。今のお嬢様なら、ルシファーと互角に戦えるかも知れませんが……

「それで、そのお力を貸していただければと……」

「……つまり、魔界へ行けると言う事ですか？」

「はい、そうです」

やつと、ミーシャ様を取り戻しにゆけるのですね。

「何時行くので？」

「三日後になります」

「……わかりました、ようしくお願いします」

「いらっしゃるこそ」

天界、それも四大天使との協力。なにか、違和感を感じますね。

失礼と思いつつも、声を掛ける。

「少し、よろしいでしょつか？」

「はい？何でしょつか？」

「あなた方天使が、魔界に何の用があるのでですか？」

「……お答えしかねます」

「そうですか……お時間を取らせました」

「いえ、大した事ではありません」

この方々は、信用してはいけない……そう、感じました。

私達にとつて、とても大事な事を隠している。

あの時の失敗を繰り返さない為にも、疑いを持たなくてはなりません。

ミーシャ様を守る為にも、絶対に……

・・・・・

・・・・・

・・・・・

視点・リリイ

ラファエルと、ある程度の事を話し合い、今日は解散となつた。

ラファエルは、何かに耐えてる様な気がした。

ミカエルは、レイを追い掛け回していたので、言つてはなんだが、それほど頭が良いとは思えない。

ガブリエルとウリエルは、喋らなかつたので何とも言えないが、ウリエルには注意が必要かもしれない。

あの眼は、危険だ。

まあ、父様と母様に魔界に行く許可を貰えなければ、何の意味も無いんだがな。

私、姫だし……無理かな？

外伝・その？（後書き）

今更だけど、エルフとか出してなにや。
この状態で、出せるのか？
無理だと思つんだけじ。
いや、どうとかしてみせる！

……エルフとかドワーフ用の武器、今のうちに考えておいてくれない？

ほら、読者の意見を尊重しているのだよ！
俺は、天使の武器を考えなくてはいけないのだから！
魔界より天界の方が、やばくなりそうだな。

第三十二話（前書き）

魔界編がそろそろ終わりそうですね。

天界編は、それほど長くないかも。

まあ、自分のヤル気と想像力しだいだね。

スーツとパジャマを創つてみた。

スーツは、ヒヒイロカネとアダマンタイトがあつたので、魔法で纖維状にして一から創つた赤みのかかつた黒スーツ。

パジャマは、スーツの纖維とミスリルの纖維で創つた猫パジャマ（何故か動く尻尾とフニフニの肉球グローブ付き）。

封神 技の怠惰スーツを参考にしてみた。

あと、手と腕が痛い。

スーツの概念。

スキル、【幻】【魔力自動生成】【自然修復】

下位の概念、【耐久上昇】【頑丈さ上昇】

中位の概念、【よく伸びる】【破け難い】【気配察知】

上位の概念、【呪い・食欲】

幻は、服や鎧等の防具専用の概念。

発動時は、指定した相手のみに幻を見せる。

自然修復は、魔力を使って、破けたり壊れたりした所を直す。

耐久上昇は、武器にひびが入りにくくなったり、服にしわが出来難くなる。

頑丈さ上昇は、壊れにくさが上がる。

よく伸びるは、よく伸びる。

破け難いは、斬られでもしない限り、破けたりしない。

呪い・食欲は、何かを食べたくなる。

食べてる間は、あらゆる攻撃に耐えることが出来る。

パジャマの概念。

スキル、【瞑想】【装飾化】【魔力自動生成】【重力操作】

下位の概念、【睡眠時間上昇】【睡眠速度上昇】【常時体力回復】

【常時魔力回復】【疲労回復】【体調回復】【状態異常瞬間回復】

中位の概念、【次元障壁】【魔術無効】【魔法無効】【魔力無効】

【気配遮断】【魔障壁】

上位の概念、【次元結界】【聖なる守護】【邪なる加護】【対魔障壁】【対物障壁】【呪い・惰眠】

絶対概念、【存在維持】【最適化】【加護】【安眠】【絶対守護】

【和み】

睡眠時間上昇は、しっかりと寝る時間が調節できる。

睡眠速度上昇は、寝る早さが上がる。

疲労回復は、疲れがしっかりとれる。

体調回復は、風邪や病氣に罹っても早めに回復する。

状態異常回復は、毒や麻痺や火傷が一瞬で治る。

呪い・惰眠は、どんな事をしても起きなくなる。

十一時間以上は、発動しない。

安眠は、快適な睡眠をとる事が出来る。

絶対守護は、呼吸を必要としなくなる。

あらゆる攻撃などを全て遮る。

絶対概念、守護破りが付いた物でのみどうにかできる。

和みは、見た者を和ませ、敵意などを削ぐ。

装飾時は、ドックタグ。

パジャマは、戦闘中に着ないでください。

着た瞬間に眠くなります。

と言ひ訳で、おやすみ、なさい……

・ · · · ·

視点・レビュー アタシ

ミーシャ君が、何をしているか見に来たら、吐血した。

可愛らしい猫のパジャマを着て心地良さそうに丸まりながらコラコラと尻尾を動かすその姿はまさしく猫の様で時折聞こえる寝息はとても穏やかでいて本当に気持ち良さそうに寝ていて更には普段見せない表情である油断だらけな寝顔を見たら私はもう我慢できません！つまり何がいいたいかと言つとー！

私は前のめりに倒れて、鼻血で水溜りを作った。

視点・ベルゼブブ

そろそろステッジが出来る頃かと思い、工房に来てみたら……殺害現場に遭遇した。

君

スーツが机の上に置いてあつたので、それを取つて外に出る。

うん、私は何も見なかつた

そう呟いて、私は歩き出した。

・・・・・

・・・・・

視点・マモン

ミーシャ君に紅茶の入れ方を習おうと、工房に来たら、興奮した。足元にレビュー・アタンが転がっていた気がするが、そんなものはどうでもいい。

「……みやあ～」

もひ、興奮のし過ぎで、ビチャビチャです！
この猛り！興奮！欲望！辛抱堪りません！！

「御持ち帰りいいいいいい！」

寝ているミーシャ君に飛び掛つたら、吹き飛ばされた。
一瞬で意識が飛んだ。

最後に思つた事は、一緒に寝たい、それだけだつた。

・・・・・

・・・・・

視点・アストラル

「何があつた？」

ミーシャの工房が騒がしかつたので来てみたら……凄い事になつて
いた。

レビィアタンは、明らかに血の流しそぎ。
マモンは、逆さまになつて氣絶している。

ミーシャは、初めて見る猫のパジャマを着て、寝ていた。
なんだこれ？

とりあえず、ミーシャを抱っこして寝室に運ぶ。
抱っこする際に薄い障壁の様なものがあつたが、こちらに害意が無
いのがわかつたのか、それもすぐに消えた。

「あの二人は、どうするか……放置でいいか」

ミーシャの安らかな寝顔を見る。

「……やっぱ、可愛いよな」

そう呟いて、静かに寝室から出る。

サタンが言つていた天界の事。

ミーシャが天使達に連れて行かれれば、間違いなく、今俺が、俺達
が知つてゐるミーシャがいなくなる。

それだけは、絶対にさせるわけにはいかない。
まあ、今は……この一人をどうにかしないとな。

レビィたんがぶつ壊れてる。
ベルゼブブがチキンになつた。
マモンが変態になつてる。
アストラルがかっこいい。

ミーシャ君は、知り合つた者をダメにする。

……どうしてこうなつた？

一つだけ言つておく！
皆、魔王だから！

第三十四話（前書き）

内容考えるの、大変すぎるよ。

まあ、大した内容じゃないんだけど。

毎日投稿とか無理だから。

今日の寝起きは……良い気分だ。

何時布団に入ったか覚えていないが、気分が良いので、気にしない。ベットから降りたら背伸びをして、床をゴロゴロ転がる。尻尾が動くので、捕まえようと追いかける。

五分ほど追いかけ続けて、ふと思いつく。

俺、何やってんだ？

気分が良くて寝起きだったので、思考が正常に作動してなかつたようだ。

うむ、何か創ろうかな。

あ、ベルさんから貰った宝石に、なんか概念でも付けよ。

……終わった。

ちなみに、附加した概念は、完全再生と存在維持で、使い捨ての品だ。

一から創ってるわけじゃないし……附加するだけだし……渡しに行くか。

・ · · · ·

視点・ルシファー

ミーシャに、ダイヤモンドのネックレスを貰った。

純潔、清浄……あと、意志力を信念を強める、と言つ意味があつたはず……

意志力と信念、か……偶然か、それとも、必然か……

「……フツ……考へても仕方が無いか」

天界が動き出したらしいからな……ミー・シャは、必ず守つてみせる。
たとえ、私がどうなるとも……

・
・
・
・
・

視点・アストラル

ミーシャがアクアマリンの腕輪をくれた。

宝石の意味を調べたら、聰明、沈着、勇敢だった。

何故これを俺に渡したのかはわからないが、大事にするつもりだ。

「さてと……きんこうせん金蛟剪の練習でもするかな」

火、風、雷、土、闇の五種類は、操れる様になつたけど、水と氷が
まだ操れないんだよな。

きんこうせん金蛟剪を振つて、七匹の竜を出す。

「ミー・シャの為にも……俺に従つてもらうぜ?」

・
・
・
・
・

視点・レビューアタン

ミーシャ君との婚約指輪のアメジストを貰つた。
これで、将来ミーシャ君は……わ、私の……

「ふふ、うふふ、あはははは、あははははははははは……」

「うん、アメジストの意味は、誠実、高貴、心の平和……わかるよ？」

婚約指輪なんかじゃないんだよね？」

「でも、いいんだ。

いつか、私だけのミーシャ君にしてみせるから。
ワタシダケノ……

・・・・・

・・・

視点・リリス

サファイアのピアスをミーシャに貰つた。

誠実、賢明、慈愛の意味を持つてゐる宝石だ。
私に似合つのか？

ピアスを付けて、鏡の前に立つ。

キラキラと光る、三日月型のピアスが揺れる。

「……うん……いいな」

そのまま、鏡を見続けた。

鏡には、嬉しそうな笑顔をした……私が映り続けた。

・
・
・
・
・

視点・ベヒモス

ミーシャにルビーの付いたティアラを渡された。

サタン様に教えられた宝石の意味は、情熱、勇気、自由。

「……私はこんなのはいらない……ま、まあ、捨てるのは勿体無いから使うけど」

……使いたいわけじゃないんだからね！
ベルゼブブ殴つてくる！

・
・
・

視点・ベルゼブブ

ベヒモスに殴られた。

……私、何かしましたかね？

あ、そういうえば、ミーシャ君がエメラルドの付いたチェーンを置いて行きましたね。

まさか、あげた物が戻つてくるとは……
幸福、誠実、生き生きとした力を強くすると言つ意味を持った宝石
でしたか？

「……つまり、どういう意味ですか？」

「これからも、殴られたりするんでしょ、うか？」

「……役に立つ事を祈ります。」

「あ、神には祈る気は無いですか？」

「……私、独り言多くなりましたかね？」

「……」

「……」

「……」

視点・マモン

トパーズの付いた掌サイズの犬のぬいぐるみを、ミーシャ君が投げて、逃げだした。

最近、ミーシャ君が冷たい……

まあ、このぬいぐるみ可愛いから良いけどねえ～
トパーズの意味は、友情、希望、潔白……そして、美と健康のお守り。

「私にピッタリね！」

全てにおいて、私以外には合わないかも。

「……今、純白じゃなくて漆黒の間違いだろ？つていう電波が……私の気のせいね。」

腰の辺りに付けて、小さくぬいぐるみを揺らす。

「……ふふ」

私が、一日中笑顔だつたと知ったのは、次の日の出来事だった。

・・・・・

視点・サタン

ミーシャ君が、オパールの入つた御守りをくれた。希望、幸福、安楽……悲しみを消し、希望を生む。

「……私に、希望をくれるのか……ミーシャ君」

助ける為とはいえ、家族から無理矢理引き離した……私に……守らなければならん、な。

たとえ、全てを失つても……絶対に……

・・・・・

・

渡した人によつて、反応がいろいろ変わつていた。うへん……これからどうしよう?

する事も無いし……誰かと、ゆつくり話す?

一人きりで……レビイたんは、貞操の危険性がある。ん? そういうのをデートと言つのか?

うん、してみたい。

よしー最初は誰を誘おうかな?

小走りで、工房に向かう。

明日の事を考えながら、平和な時を過ごす為に……

第三十四話（後書き）

アストラルさんとのデートは、ある程度考えてあるんだけど……他
がな……

それと、このデート回が終わったら、天界ルートに入ります。
では、また次回。

第三十五話（前書き）

アストラルをかつこよくしようとしたら、主人公みたいになっちゃ
た。

うん、俺はかつこいいと思ひ。

アストラルさんと、一人で散歩中。
無限に続きそうな螺旋階段を下りてゐる。

「足、大丈夫か？」

「……ん」

「さうか……なあ、ミーシャは……帰りたいか？」

「…………」

迷つてしまつた。

メイドさんには、会いたいな。

「…………わか、ない」

「俺は、ここのまま…………いや、なんでもない」

そこで、壁に扉が現れる。

アストラルさんが、扉を開けて中に入る。

俺もその後ろに続き、扉の中に入る。

扉の中は、広く、果ての見えない…………草原だった。

赤い満月が浮かび、その世界を赤く魅せる。

正直、綺麗だと思った。

「ここの場所な……もづ、無いんだ……幻術で、こう見せてるだけなん
だよ」

そつと、アストラルさんの顔は、少し悲しそうで、少し泣きそ
で、少し辛そうだった。

この綺麗な世界は、ホントの意味で見ることが出来ないんだ……

「アストラルさん」とって、「の世界は……どんな思い出があるんだ
る？？」

「「の場所で、俺は復讐者^{アストラル}に、なつたんだ……まあ、大した理由じ
やないんだけどな」

「…………つら、いの？」

「ん？…………そうだな、泣きたいぐら^ア辛いな……でもま、今に満足
してゐや……うん、俺は今の生活が好きだ」

先ほどまでの陰のある顔は無く、こつもの明るく、かつじよく、綺
麗な笑顔があつた。

その男っぽい笑顔を見ると、自然と笑顔になる。
まあ、恥ずかしいから下を向くけど。

「せんと、「れからびうるへ。」

あ～考えてなかつた。

とりあえず、一緒にいればびうるへとなると思つてたわ。

「やうだな……少し、手合^アわせしないか？」

てあわせ？

手でも合わせるの？

ああ、手を繋ぐつてことか？

その言葉に頷く。

「…………ん」

待てよ……てあわせ……手あわせ……手合^アわせ？

……組み手つてこと？

返事しちゃつたよ。

「うーしー!!」シャに貰つた金蛟剪きんじゅせんも全部使えるよになつたからな……行くぞ!」

そう言つて、アストラルさんは金蛟剪きんじゅせんを振り、七匹の竜を出す。マジか……完全に操つてるよ。左の腕輪を大剣に変えて、両手で持つ。これなら、今の状態でも扱える事がわかつた。

「舞い踊れ!」

その言葉と共に、七匹の竜が襲い掛かる。

炎と風の竜が右から、水と雷の竜が左から、土と氷の竜が正面から、闇の竜が上から迫つてくる。

焦らずに対処する……ゅうくつと、踊るよつと全てを逸らす。

「ハアー!」

アストラルさんが、両手を使つた炎の大剣を振り下ろす。

竜に注意を払いながら、その炎の大剣を右手だけで持つた大剣をぶつける。

アストラルさんは、足に炎を纏い、回し蹴りを仕掛けてくる。バックステップで、その蹴りを避けるが、右、左、後ろ、上から竜が迫つてくる。

一瞬焦つてしまい、大剣を足元に叩きつけて、地面を操り竜を串刺しにする。

串刺しになつた竜は、六匹。

「飲み込め!」

足元が盛り上がる。

氣付いたときには、すでに地竜に飲まれた後だつた。景色が見えなくなる瞬間、運命の導きを使用する。膨大な魔力が溢れ、その余波で地竜を碎く。

「ハツ！カツコイイね！……ラスト一撃、喰らつとけや！！」

アストラルさんの纏つていた炎が、黒に変色する。頭上に巨大な黒い炎球を創り出す。

その炎球の中に
七四の竜が入っていぐ

矢球を打を消し
黒の濃い蝶色の田舎が現れる
直撃すれば、華一
つ残らないであろう熱量が肌に当たる。

持つていた大剣を地面に突き刺し、右の腕輪を大剣に変える。
大上段に大剣を構える。

「いつけえええええ！」

巨竜が、その巨大な口を開けて迫つてくる。

僕は
目の前に来た瞬間は
力鎧を振り下ろした

「切り裂け！！」

大剣が、アストラルさんの創つた巨竜を真つ一つにした。

それを確認しないで、アストラルさんの目の前に移動して、その首筋に刃を向ける。

「あ～やつぱ負けたか……降参だ」

「結構危なかつたですよ?」

「そつか?付き合つたくれて、ありがとな

「いえ、俺も良い気分転換出来ましたから

武器を戻して、地面に座る。

疲れた……やつぱ強いね。

「あ、そつだ」

何かを思い出したよつて、アストラルさんが手を叩く。

「へ.ビ.う.か.し」

何を思い出したのか聞こいつとしたが……柔らかい唇によつて、口を塞がれてしまった。

いきなりの事で、一切の反応が出来なかつた。

目の前に、アストラルさんの顔がある。

綺麗な瞳が、俺の事を見ている。

唇が離れ、アストラルさんが背を向ける。

「俺の名前、アストラルさんじやなくして、アリマつて呼べよ……俺の、前の名だ」

それだけ言つと、走る様にこの世界から出て行く。

俺は動かずに、ただ呆然と座り続ける。

指先で、ゆづくつと自分の唇をなぐる。

「……やつぱ、カツコトイトよ」

やつねや、」の声をかり田の壁に回かって、歩を引いた。

第三十五話（後書き）

むじゅヒロイーン？

元男なんだけど……どうしてこうなった？

次は、ベルゼブブでいいか。

ベルゼブブ回。

短い気がする。

やる」とが、無い。

え～今、ベルさんと工房一階で、紅茶を飲んでる。
特にする」とも無く、まつたりのんびり過ごしててる。

「平和だね」

「……ん」

ベルさんが言つにほ、最近レビィたんとベスちゃんが襲い掛かって
来るらしい。

今のベルさんの表情は、心底安心しきつた顔だ。

「それで……これが、ひびきしますか？」

「どうしようつ、

長い会話は無理。

聞く事、話す事……無い。

「……ん」

「？……ああ、このままのんびり過ごすんですね」

少し止まつたけど、理解してくれた。
皆の解読スキルが上がつていぐ。

「わついえば、このスースー」ですな……アレだけボロボロこさ
れたのに、すぐに戻りましたよ?」

どんな使い方してんの?

まあ、役に立つてるなら良いけど。

紅茶を啜る。

うま～

「やつだ、リリスがミーシャ君に何かを用意していましたよ?」

なんじやろか?

リリスさんは、あんまり話していない氣がする。

次は、リリスさんと何かしようかな?

「……ミーシャ君は、誰が良いですか?」

「……なに、が?」

「つまりですね……」

ベルさんが、声を小ねくして耳元で囁く。

「どの女性に興味があるのか、と云つ事です」

「これは……猥談と云つヤツか!」

どの女性って……どの女性だろ?!

「君の周囲には、綺麗な女性が多くて……レイニアタン、ベヒモス、アストラル、最近ではリリスも怪しい、そういう向こうの世界には、双子の騎士、姉、姫、それにメイドもいるらしいじゃないですか?」

……意外と、いっぱいいるね。

むう……興味がある女性……アリマさんとメイドさんかな?

だがしかし……皆綺麗だから、良いこと思つんだけビ?

「……みん、な」

「フム……では、しつかりと男を磨いた方が良いですよ? 女性の考

えは、男には一生分からないものですか？……ね？」

昔なんかあつたのかな？
でも、聞くのめんどくさい……いいか。

「……ん

「ハハ、ミーシャ君ならそのままでも平氣そつですね

「……ん？」

そうなのか？
分からんな。

「それでですね……アストラルとは、ビームでこきましたか？」

アリマさんがビームした？

ビームで行つた、と言われても……何所までだらう。

「……あ？」

「……では、最近した事は？」

最近した事……はう。

フランシュバックの様に、柔らかい唇の感触が思い出された。
顔が熱い。

「……赤くなつたと言つ事は……まさか！？」

「……キ、ス……それ、た」

「……そりですか」

何やら残念そうな顔をする、ベルさん。
なんだ？ 何か拙かったのか？

「……そのままの顔で、いてください」
「……ん？」

よく分からざ。

まあ、どうでもいい事だろう。

「セヒ、やうやう御暇させてもらいますかね」
「……ん」

結構話していたようで、小腹が空いた。

腹時計は、午後五時だ。

「……じゃ、ね？」

「うむ、今日から忙しくなね……それではな？」

そう言い、ベルさんは工房を出て行く。
少しして、下から悲鳴が聞こえた気がするが、何も聞かなかつたこ
とにした。

なんとなくだけど、こんどは痛覚を如何に出来る様にしようかな?
……あくまで、なんとなくだよ?

第三十六話（後書き）

うむ、ベルゼブブは弄られキャラだね。

他に思いつかん。

次、リリスです。

第三十七話（前書き）

全然続きが思いつかん。

絡みが無かつたから、これしか思いつかない。

微妙にシリアス？

何故かほんのり暗いダンス会場に立っている。
かなり広く、シャンデリアやらなんやらがいつぱいだ。
どうすれば良いんだ？

俺は、リリスさんに会いに来ただけなのに……てか、ビリでいるんだ？

「ミーシャ？ なんでここにいるんだ？」

噂をすればなんとやら。

なんと言えば良いのだろうか？

とりあえず……目のやり場に困る。

リリスさんは、布が少ない胸元と背中と腕部分が開いたドレスを着ている。

肌が、綺麗です。

「どうした？ 顔赤いぞ？ …… なあ、一曲踊つてかないか？」

ダンス会場ゆえに？

ダンスとかした事無いんだけど……

リリスさんは、俺の手をとり、ダンス会場の真ん中に誘う。
その微笑は、少し……悲しそうだった。

「手を掴んで、腰に手を回す…… それじゃあ、音楽流すな？」

リリスさんがさつまつと、ゆつたりとしたクラシックが流れ
その動きに合わせて、ゆつくりと動き出す。
今の状態だと、手足が小さいからかなり大変だ。

リリスさんは、俺に呑ませるよつにゆつたりと動いてくれる。

「やつやつ、なかなかつまいぞ」

そのまま数分踊り続けて、少しだけ動きに慣れてくれた。
簡単な会話なら、できる余裕が持てた。

「……なあ、ミーシャはどうして、私達といるんだ?」
「……?」

「つまり、わ……今ミーシャは、私達七つの大罪じゃどうにも出来ない……だから、逃げるなり何なりすれば良いんじやないのかつてこと」

おお、分かりやすい。

なんだらうな……直感が、帰るなと告げている。
それに、もうすぐ会える気がするし。
あ、でも……嫌な予感もある。
どう伝えたものか……

「私はわ、七つの大罪で一番弱いだろ?だから、なんて言えば良いのかな……私は、ミーシャの事を守つさる自信が無いんだ」

ゆつくりと、感情を吐き出すように、呟く。
俺は、その姿をただ、眺めた。

「ほり、もうすぐ天界がミーシャを奪いに来るつて、言われてるだろ?だからわ、今からでも、逃げた方がいいと思つんだよ」

俺は、答えない。

ただ、リリスさんを眺める。

「折角、仲良くなつたんだ……ミーシャには、死んで欲しくない」

お互ひに、動きを止める。

リリスさんは、下を向き……俺は、リリスさんを見つめ続ける。

「私は、弱いから……こんな事、考えちゃうんだ」

今まで、リリスさんと一人きりで話した事が無かつたから、知らなかつた。

こんなに、弱つてゐる事に……

「その、じめんな……これ、やるよ」

そつと、リリスさんは片手で持てるような箱を机から取つて、差し出す。

その箱を受け取つて開けると、中には小さなオルゴールが入つていた。

「そのオルゴールの曲、私の好きな曲なんだ……ミーシャ、なんで、何も言つてくれないんだ? いつもは、返事してくれるだろ?」

俺は、その問い合わせを、答えを、自分の考えを、言わない。

喋りたくないわけじゃない。

ただ、何を言えば、この人を救えるのか。

それが……分からなかつた。

だから、何も喋らない。

「……ミーシャ……私は、必要なのかな? ……私は、役に立つてゐ

のかな?……私は、ミーシャの事を……守つて、いいの、かな?」

声が震え、体も小刻みに揺れる。

リリスさんの足元に、雲が落ちている。

俺は、何を言えば良いのか、決まっていない。
それでも、泣いてる知り合いが目の前にいる。

それだけで、動く理由になる。

運命の導きを発動する。

そして、リリスさんの頭を撫でる。

「……ミー、シャ?」

リリスさんが、顔を上げる。

その顔は、涙に濡れて、いつもの雰囲気が無い。

考えも何も纏まっていない。

それでも、リリスさんは、自分の考えを言つてくれた。

その頬に手を当て、微笑みながら、リリスさんに呴く。

「必要とか、役に立つとか……他人に決めてもらうものじゃないよ
……でも、俺の答えが、どうしても聞きたいなら教えてあげます……
リリスさんや皆に守つてもらうほどの価値が、俺にあるか分から
ない……それでも、俺は」

「

・ · · · ·

その言葉は、ミーシャの心であり生き方を示していた。

ミーシャの、気持ち。

ミーシャが、私から離れ、一礼する。

「お嬢さん、一曲……踊つていただけますか？」

「……クク、喜んで！」

ミーシャの考え、それを聞いただけでも、意外と吹つ切れるもんだ
な。

ゆつたりと、揺れるように踊る。
ただ、笑顔で踊り続ける。

それが、今、私にできることだから。

第三十七話（後書き）

ミーシャ君が何を言つたか、『想像にお任せします。

あれですよ、そのうち出します。

ミーシャ君を、隅には男っぽくしてみたかっただけなんです。

……『』の内容になつた原因、それじゃない?

…………まあ、次回に期待といつことで。

第三十八話（前書き）

ミーシャ君は、基本なんでも出来る万能君です。

本人が出来ないと思っているから、やらないだけです。

まあ、どうでもいいのでベスちゃんとの一冊、見てください。

ベスちゃんと二時のおやつ中。

フルーツ、アイス、ケーキ、パフ、プリン、ゼリー、クレープ、チョコなどなど。

お互いに、たいして太らない体质といつが、体内のカロリーを簡単に消化できるといつが。

つまり、どれだけ食べてもお腹をいっぱいにする事が無い。作っては食べ、作っては食べを繰り返す。

「これは何ゼリーなのですか！」

「……も、も」

「甘くて、さわやかな味なのですね！」「ちば、何アイスですか！」

「……ラム、ネ」

「これは……飲み物が欲しいのです！」

飲み物？

メロンソーダ、オレンジジュース、麦茶、アップルティー、カルスなどを用意した。

「！」のメロンソーダは美味しいのです！

「……ん」

「！」の白いのは……ネバツとするといつが……ネチャネチャしてますね……それに、甘い？」

間違えて、原液で出しちゃったかもしれん。

カルスの原液を普通に飲めるとか……ベスちゃんスゲエ。

歯磨き？魔法つて便利なんですよ？

「む、もつやわらわら」飯が食べたいのです！」

一時間近く食べ続けていたらしい。

俺とベスちゃんの胃袋、どうなつてんだろ？

「ステーキとさしみが食べたいのです！」

「……ん」

ステーキに使用した肉は、ベスちゃんの本来の姿の肉。本人が提供してきたので、心置きなく使用する。刺身は、マグロを捌く位しか出来ないんだよね。……なんで、捌けるんだ？

『飯とサラダを作つて、完成！

「いただぐのです！ハグハグ」

お互に、口いっぱいに含んでモグモグ口を動かす。うむ、良い出来だ。

「つまいのですー！」これからも作るのですー！」

良い笑顔で、ビシッと指を向けるベスちゃん。シエフに任命された。

これは、あれかな？

守つてやるから、これからも美味しい物作れつてこと？

「……ん」

加減無しで楽しめるから、俺としても歓迎だよ。

「どうあえず、もつと作るのです！」

「……ん」

次は、何を作ろうか。
激辛麻婆豆腐でいいか。

・
・
・
・
・

視点・ベルゼブブ

コーヒーでも飲もうと、ミーシャ君の家……間違えた、工房の一階に行こうとしたら……田と鼻を刺激する強烈な辛味が襲う。

「！」これはなんだ！？

ミーシャ君の安否を確認しようにも、進む事が出来ない。
ミーシャ君は今日、ベヒモスと一緒に家……なら、大丈夫か。
何も無かつた事にして、工房から離れる。

「しかし……一体何をしたんだ？」

あの刺激が何なのか、気になるベルゼブブだった。

・
・
・
・
・

視点・ベヒモス

目が、目が痛いのです！

涙が、止まらないのです！

何なのですかこれは！？

今私の目の前には、ブクブクと泡立つ真っ赤な麻婆豆腐が置かれている。

視界に入れるだけでも、その辛さが分かる。

鼻を腫らして、目から涙を流す。

「い、痛いのです……」

私の向かいに座るミーシャは、特に表情を変えずに黙々と食べている。

私も、何とかちょびっとずつ食べげる。

美味しいのですが、辛すぎます！

「……から、い？」

「ど、どんな味覚をしてるんですか！？」

ミーシャの、その話を聞いた瞬間、もつ辛い物は作りせはいけないと理解した。

私の中で、ミーシャの味覚は、所々おかしいといつ結論になつた。

「も、もう限界なのです……残りは、任せた、の……です……」

脳が、機能を停止した。

全ての思考回路、五感、意識がとんだ瞬間だった。

・・・・・

見た目ほど辛くないな……もうちょい、唐辛子とか入れた方が良かつたかな?

まあ、うまいからいいか。

ベスちゃんが倒れたので、ベスちゃんの残りも食べる。

ベスちゃんは、何故か涙を流しながら寝ていた。

悲しい夢でも見ているのだろうか?

ベットに寝かせて、後片付けをする。

久しぶりに、テンション上げた気がする。

最近皆暗いから。

残った麻婆豆腐どうしようか?

ベルさんにでも、あげるか。

ベルさんの住居に、持つて行った。
次の日。

ベルさんが口と鼻を腫らして、涙を流しながら氣絶している姿が見られた。

何があつたのだろう?

第三十八話（後書き）

何故かベルさんが落ち担当。

ごめんよ、ベルさん。

後残つてるのは、レビューアタン、マモン、ルシファー、サタンだね。

次、誰にしようか？

第三十九話（前書き）

微妙に空いた投稿。

家で、だれでました。

明日から、頑張る。

黒い猫が、アナタの前を横切った。

アナタはどうしますか？

……この本はなんだろう？

今日は、マモンさんの部屋にお邪魔している。
部屋といつても、ファンタジー世界にあるよつたな図書館のような部
屋だ。

上が見えない。

ちなみに、本棚にあつた本を適当に取つたら、こんな内容だった。
何がしたいんだろうか？

あ、勇者の大冒険だつて。

……なんで、魔王になつた人がこんな物を？

え、王様に勇者として魔王を討伐するように頼まれた勇者。
旅の途中に出会つた、戦士、魔法使い、僧侶の三人。

勇者以外全員女です。

美少女美人は当たり前。

ここ重要。

ここ書く意味あるの？

えつと、多くの戦いを経験して、ついに魔王と戦う事になつた勇者
一行。

そして、魔王は言つ、「我と手を組まないか？ されば世界の半分
をくれてやる」

どつかで、聞いたことがあるんだけど……

その誘惑を跳ね返して、魔王を倒した勇者一行。

魔王は最後に、こう言った、「我を倒しても、第一第二の我が世界を滅ぼすだろう…フハハハハハ…！」

やつぱり、どつかで聞いたことが……

世界を救つた勇者一行は、その日を境に豪遊し続けました。おしまい。

え？ 最後の何？

「ミー・シャ君、どうかしましたか？……ああ、それですか」

マモンさん登場。

この本について何か知つていいのよつだ。

「絵が可愛かつたので、買つたんですけど……一日後位に、発売禁止になつたんですよ……なんでも最後のページから、大人向けの絵になつてているとか」

たしかに、キャピキャピした漫画絵だったけど……大人向けの絵つて、何？

……最後は、勇者が豪遊。

絵は可愛らしい。

つまり、この付録部分は……十八禁？

……………ですが魔界。

「私はもう少し調べモノがあるので、ゆっくりしてくださいね？そうだ、本棚の上の所の本は見ちゃダメ！ですからね？」

そつぱつて、マモンさんは部屋から出て行く。

上の方、何があるか、見ることすら出来ないんですけど。
しうがないので、ギリギリ届く範囲で本を探す。

これは……人体改造マニュアル（初級編）。

あつちのは……心身掌握術（上級編）。

こつちのは……好きな相手を自分好みにする方法。

……もつとまともなのは……ん？一分読むだけでモテモテになる方法。

別にモテなくて良いよ。

ん~相手の本性を曝け出す魔法の使い方。

……良いのが無い。

エッチをする為の魔道書。

可愛くなる為には……。

ハーレムを作るには。

儀式魔法の定理。

可愛い物を愛でる本。

肉球マニュアル。

男まさりな女と無表情ショタの愛の物語。

幻術の使い方が分かる魔道書。

む~儀式魔法の定理と幻術の使い方が分かる魔道書ぐらいかな。
てか、いろいろおかしなラインナップだね。

まあ、いいか。

え~何々……儀式魔法は、魔方陣を描く事から始める。

その魔方陣にいろいろな言葉を刻み、したい儀式をする事が出来る。
例えば、勇者召喚の儀式なら……異世界、転移、勇者の三つの言葉
を入れておけば、基本的に失敗しない。

失敗例としては、自分達の世界から、というのが確認されてる。

意外と分かりやすい。
こつちはなんだろう。

使い方はいたつてシンプル、まず相手の目を見ることです。

相手の目を見て、一言。

「魅了」^{チャーム}と書いて下さい。

そうすれば、簡単にエッチなことが……

あ、間違えた。

幻術はこつちか。

難しいのは時間が無いし、簡単なのでも覚えようかな？

幻術の使い方は、相手を知ることから。

相手がどんな事を望んでいるのか、それが分かれば簡単です。
相手の望む事を、脳内で繰り返せば相手は抵抗できずに、その幻術
から逃れられないでしょう。

……どういふこと？

もつと分かりやすいのは……これかな？

脳を麻痺させれば良い。

わ～簡単だ～

これは無理だね。

お、これは……カッコイイ男と可愛い男が抱き合つてゐる。
裸で。

……ん？おかしくない？

だって、男同士だよ？
わからん。

見ない方が良さそうだ。

「、これは！？」

伝説の武器の造り方と名付け方、だと…？見なくては！

「ミーシャ君！それはダメ！」

「マモンさんに没収された！
み～せ～て～

「そんな顔してもダメです！これの通りに造つただけでも、世界を滅ぼせる様な物が出来てしまつんですかりー！」

なら、んなもん置いとくな。
それと、なんで持つてんだよ。

「私が、魔界の本を管理しているからです」

なるほど。

だがしかし！

視覚出来ないであろう速さで、マモンさんの手から本を奪つ。
一氣読みして、マモンさんの手に戻す。

この間、約一秒。

内容は、ほとんど覚えた！

マモンさんは、一瞬本の重みが無くなつたと感じただけだろう。

「ん？今…………とにかく！」の本は見ちゃダメですかりねー…
「…………ん」

「ミーシャ君は、物分りが良い子ですね～」

フツ、計画通り。

ニーシャは、新しい武器を創れる様になつた！

……あれ？ 今、テキスト出なかつた？

氣のせい？

「私の用事も終わりましたし、何をしましょつか？」

そう、マモンさんとする」となんて……無い。

ネタで創つた盾でも渡す？

パイルバンカー付いてるんだぜ？

……この御方には、似合わないね。

腐らせとけばいいか。

そこら辺にあつた、男まさりな女と無表情ショタの愛の物語を、無言で差し出す。

「……では、これを読みましょつか」
「……ん」

どんな話かは、それほど気にならなかつた。

まあ、登場人物が誰か知りたいけど。

マモンさんが、何故か興奮しながら朗読するのをBGMに、猫パジヤマを起動して……寝る。

明日、は……レヴィたん……食べ、ない……で。

意識が完全に落ちた瞬間だつた。

第三十九話（後書き）

頭痛い。

これは……知恵熱！？

そんなわけ無いか。

次回は、レヴィイたん。
お楽しみに？

ちなみに今回のマモンは、あれだ、性格を変にし過ぎたから。
とりあえず、将来の伏線にさせてもらつた！
反省も後悔もしている！
そ～よ～な～ら～ま～た～ね～……もういいですか？

第四十話（前書き）

やつと出来た！

かなり、変な内容になつた気がする。

ちょっと真面目?にしてみた。

「ああ、頭を洗いますよ～」

誰かヘルプ！

風呂は嫌いです！

現在、大きな温泉にレヴィーたんと入っている。

レヴィーたんは、俺の要望で水着着用だ。

ピンクの花柄の生地が、とてもキュートなセパレートタイプの水着です。

頭にシャンプーをつけられ、泡立っているので目が開けられないので、大して意味が無かつた様だ。

「逃げても無駄ですよ～私が優しく、丁寧に、丹念に、隅から隅まで、綺麗にしてあげますからね～」

隅っこに逃げて、イヤイヤと首を振る。目が一泡が目に沁みる…

「ウフフフフフ、ああー!!」シャ水の全てを見せて下さい…!!

レヴィーたんは、妙に血走った目で、両手を広げながら近付いている。

ミーシャは、レヴィーたんがどこにいるか、気配で分かっているが、見えているわけではない。なので、どれだけ危険か分かっていない。

このままじゃ、一やられる（洗われる）！？
てか、早く泡をどつにかしたい！

「つ・か・ま・え・た

正面から抱っこされる。

用法・当たる

レヴィアタンは、抱っこした状態でお湯をかける。

意外と気持ち良い。

「それじゃあ、次は……か、体を……クツ！頑張るのよ、私！」

泡が流れたので、目を開けると……こう、少々ヤバ目の形相をした
レビイたんが、目に入った。

見なかつた事にして、三月を閉じた。終わるのを待つ。

「はあはあはあはあはあ！ も、もう……限界！！」

ミーシャを申し置く、レヴィアタン。

タオルで隠れた、下半身を凝視している。

いろいろな一線を越える瞬間である。

「か、体を洗う為、だから……このタオルは邪魔！」

そう言って、ミーシャのタオルを取り除いた瞬間、鼻血を出して気絶した。

「かわ、いい……」

……タオルの下にあるモノを見たレビイさんが、呟いた言葉を聞いて……落ち込むミーシャ。

どうせ、どうせ小さいですよ……この体がいけないんだ！

……そうだ！大人になればいいんじゃないか！

考えたら即行動！

運命の導きを使って、体を大人に変える。

そこで、レビイさんが運悪く起きてしまった。

「「……」

先ほどまで、押し倒されていたので、かなり近い。つまり、レビイさんの田の前に晒している状態。

「……すごく、大きいです」

それだけ言つと、レビイさんは完全に意識を失つた。

免疫力が無いな……そんなんじゃ、彼氏とか出来た時大変だよ？

しかし、大きいのか……将来が楽しみだなあ

レビイたんを脱衣所に寝かせて、ゆっくりと温泉に浸かる。

途中で、元に戻つて溺れかけたが、何とか生き延びた。

この体、早く何とかしたいな……

・・・・・

少し熱くなつた顔を、冷ます様にぼんやりする。

「……ミーシャ君」

そう眩いたその顔は、まるで恋する乙女の様だった、むしろ愛している。

「……ミーシャ君と、付き合つたら、アレが、わ、私の
は、入るかな？」

赤くなつたり、嬉しそうになつたり、心配そくなつたり、百面相
をしている。

そんなレビュー・アタンの前に、ミーシャが立つ。
タオルで隠して。

「……こ、れ」

「ふえ？ あ、うん、ありがと、ミーシャ君」

ミーシャ君が、コーヒー牛乳を差し出してきたので、礼を言つて受け取る。

それを見届けたミーシャ君は、腰に手を当てて、自分の持つている
コーヒー牛乳を一気に飲む。

その姿に、グッとする。

「……帰したくない」

そう、小さく呟いたが、ミーシャ君は、いつか、自分の家に帰つてしまつ。

そう思つと、胸の辺りがズキッと痛む。

ずっと一緒にいたい。

どれだけ願つても、その願いは叶わない。

だから、今だけ……

ミーシャ君を、後ろから抱きしめる。

優しく、包み込む様に……

「私のこと、忘れないでね？」

「…………ん」

「ふふ、ありがと」

いつもの様に、表情を変えずに返事をするミーシャ君。
その姿を見て、声を聴いて、体温を感じて、心地の良い気分になる。

ドキドキと、心音がどんどん早くなる。

いつもと違う、一度も感じた事の無い感情。
でも、その感情が……とてもいいとおしい。

「大好きだよ、ミーシャ君」

「…………ん」

ミーシャ君は、少しだけ赤くなってしまった。
やつぱり、可愛い

第四十話（後書き）

次は、ルシファーアー？サタン？ビックリだ？

めんどくさくなってきた。

天界編、ひついたもんか。

ちやつちやと終わらせて、続き考えないと……

第四十一話（前書き）

やつと出来た

ミーシャ君みたいにやる暇が無くなつていぐ。

永眠したい。

死ぬまで絶対しないけど。

第四十一話

おじいちゃんに、お茶を飲もうと誘われた。

なんとなく、話が長くなりそうだから拒否したら、謎の黒服が現れ連れてかれた。

角やら尻尾が見えたので、悪魔だわ！

始めて見た。

担がれながら、いつぞやの螺旋階段の最下層についた。

白い扉と黒い扉があり、黒い扉の奥に進む。

扉の入り口で、黒服が消える。

下に降ろしてから消えてので、落下する事は無かつた。
どうして消えたんだろ？

「彼らは、悪魔の影であり魂だ……ビートでもいるが、ビートにも存在しない」

ほつほつ。

つまり便利？

そんな思考を放棄して、周りを見渡す。

見える範囲が一面花畠で、ポツンと机と椅子があり、机の上にお茶と紅茶とお茶菓子が置いてある。

「ミーシャ君は、お茶の方が好きだつたな」

「……ん」

今更だけど、元日本人ですから。

淹れたてのお茶を啜る。

うま～苦味が少し抑えられていて、熱すぎて飲めないということも無く、冷めているというわけでもない。

良い入れ方ではないか。

いや～しかし、何話すんだう？

長いのは勘弁。

「工房に置いてあるアレは、そのままいいのか？」

工房に置いてあるアレら？

……ああ、暇潰しに創つた何かの病気に罹りそつた武器とかの事だら？

「……だい、じょぶ」

「そつか……まあ、むやんと管理しているならいいんだ」

管理……埃を被り始めてた気がする。

……錆びたりしないからいいか。

「ミー・シャ君……もうすぐ天使が来るが、君は辛い思いをすることになる……私には、君を救う事はできない……君のしたいようにすればいい……どんな選択をしても、君を責める者はいない筈だ」

天使つて……どんな？

初めて会つたのが、アレなんだけど……皆あんな感じなのかな？
会いたくないわ～

てか、辛い思つて何？

姉上とかでも襲い掛かつてくるの？

……むしろそれ以外なくね？

どうしよう？

帰りたいなら、天使側に行けば良さそうだし……
こっちで皆と一緒にいたいなら、魔王側に留まればいい……
なんか、めんどくさいことになつてるね～

姉上、どうしてるかな～

……帰つたら、何されるんだろう?

「顔が、心なしか青くなつてゐるが……大丈夫か?」

「……ん」

青くなつてゐらしい。

しかし、一緒にいた頃の姉上を考えると……何かを失つ?

「今度は、顔が赤いが……本当に大丈夫か?」

「……ん」

赤くなつてゐるのは、よく分かる。

顔が熱いもの。

むう……会いたくない様な、会いたい様な。
まあ、その時になつたら考えればいいか。

「ふう……そうだ、これを渡しておこう」

丸くて小さい水晶玉を渡された。

何ぞこれ?

「大した物ではない……もしもの時、守つてくれるかも知れない物
だ」

へ～す～ごい?

どんな効果なのか見たい。

翳したり、転がしたりして、少し弄つた後にポツケに仕舞つ。
うん、御守りにしよう。

「……ありが、とう」
「どういたしまして、だ」

喋りつかれた。

肺が、痛い。
頸も、痛い。

机に頸を乗せてだれる。
ねむ

「もう疲れたのか？情けないぞ？」

喋ると体を動かすのは、全然違うんだよ？
疲れ具合が、全然違うんだよ……

「安心しろ、今日はもう終わりだ……私は、仕事があつてな」

そう言って、立ち上がるおじいちゃん。
だれながら、手を振る。

「しつかり考えろ、まだ若いのだからな」

一人になつた。

寂しい。

帰ればいいか。

動くの、だるい。

・
・
・
・
・

これで、いい……

もしも、ミーシャが、私達を選んでも……
きっと、あの子は、怒るだろつ。

だが、これが……あの子の為なのだから。

七つの大罪全員が賛成している事……まあ、レビューアタンは渋つて
いたが……

後は、私達に出来る事をするだけ、か……

天使如きに、ミーシャの幸せを、未来を、命を、奪わせるわけには
……いかんのだ。

救う事は出来なくとも……進む道を造る事位は……してみせる。

「……君の未来が、幸福である事を……願つよ

第四十一話（後書き）

ラストは、ルシファー！

できるの……何日後になるかな？

適當は、なんかやだし……まあ、眞面目に書いても大したもんじやないけど。

頑張る。

また次回

……前書きと後書きって、誰も望んでない？
そんなこと無いよね？ね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5380v/>

伝説の武器(笑)、創りますか？

2011年10月7日21時05分発行